新潟県下における農業青年の生活と教育

東京大学　清水義弘
東京学芸大学　潮木守一
東京大学　山村健
東京大学大学院　佐藤暢男

ま え が き

この報告書は，東京大学教育学部教育社会学研究室が新潟県農林部及び同県教育庁の協力のもとに，県下の農業青年指導者と農業青年を対象に行なった調査の結果をまとめたものである。調査は主として，昭和38年11月に実施された。調査の計画，調査票の作成は，産業教育研究会及び青少年研究会のメンバーがあたったが，調査結果の整理並びに報告書の執筆は，以下のものがあたった。

第Ⅰ．Ⅱ章　潮木守一　　第Ⅲ章1　山村　健，佐藤暢男　　第Ⅲ章2～3　山村　健

なお，この調査に関しては，新潟県農林部の細貝繁男氏，永井秀夫氏，新潟県教育庁の中野洋吉氏に多大の御指導と御協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表したい。

東京大学教育学部教育社会学研究室　清水義弘

目　　次

Ⅰ　調査の概要
　1　調査のねらい
　2　調査対象および調査方法
　3　調査票の構成
Ⅱ　農業青年の教育機会と教育内容
　1　農業指導者調査の結果
　　§1農業青年の教育組織はいかにあるべきか
　　　A　離農の傾向とそれに対する対策
　　　B　これからの農業者には最低どの程度の基礎学歴が必要か
　　　C　農業青年のための後期中等教育はいかにあるべきか
　　　D　現在の農業青年のための教育組織はどう評価されているか
　　　E　まとめ
　　§2農業青年教育の教育内容はいかにあるべきか
　　　A　農業青年に不足しているものは何か
　　　B　農業青年の教育要求はどこにあるか
　　　C　農業青年に系統的に教える必要のあるものは何か
　　　D　農業高校卒，普通高校卒，中学校卒三者の比較
　　　E　まとめ
　2　農業青年調査の結果
　　§1農業就職の動機と経路
　　§2農業技術，農業経営の変化
　　§3農業経営における青年の役割分担
　　§4農業青年の教育要求
　　§5農業青年の教育機会
　3　まとめ
Ⅲ　農業青年の生活意識
　1　農業指導者調査の結果
　　§1農業青年の生活意識
　　　A　農村への定着性
　　　B　農業生活にたいする考え方
　　　C　労働と遊び
　　　D　余暇利用観
　　　E　農業改善の意欲
　　　F　団体活動への参加の意欲
　　　G　農業政策や農業問題にたいする関心
　　§2農業指導者の若者観
　　§3農業青年の悩み
　　§4将来の農村生活の見通しと農業青年にたいする期待
　　§5まとめ
　2　農業青年調査の結果
　　§1農業青年の生活意識
　　　A　農村への定着性
　　　B　農業生活にたいする考え方
　　　C　労働と遊び
　　　D　余暇利用観
　　　E　農業改善の意欲
　　　F　団体活動への参加の意欲

G　農業政策や農業問題にたいする関心
§2農業青年の価値意識
A　生き方
B　結婚相手
C　農業相続
§3農業青年の生活
A　生活時間
B　農休日
C　小遣い
D　労働時間，農休日，小遣いにたいする満足度
E　農休日の余暇利用
F　余暇を誰といっしょにすごすか
§4親とのくいちがい・悩みとその相談相手
A　親とのくいちがい
B　悩　み
§5まとめ
3　まとめ

I　調査の概要

§1　調査のねらい

今日，我が国の農業は大きな変貌期に直面している。農業人口の急激な減少，それにともなう農業労働における機械化の滲透，さらには，農産物需要，流通機構の変化，農家経営における新たな局面の出現，これらはいずれも自営農業者に対して，新たな資質を要求しており，これらのインパクトに対して何らかの対策が講じられねばならないことは，明白である。とくに将来，新たな局面のなかで，農業経営の主体とならねばならない，今日の農業青年に対しては，旧来の農民像を基礎とした教育は，もはや時代遅れの感があり，ここで新たな農民像を設定し，それに即応するところの新たな教育組織，教育内容が構想されねばならない。それでは，いかなる農民像が求められねばならないか，さらには，それを支える具体的基盤として，いかなる教育組織，いかなる教育内容が構想，設定されねばならないか。これらの点になると，さまざまな意見が提出され，いまだに十分意見の調整・整理を見るにいたっていないのが，現状だといわざるをえない。

我々が企てた調査は，これらの点に対して若干の事実を明らかにし，今後の議論に必要な具体的資料を提供しようとするものである。ここで，我々の行なった調査について，若干説明しておこう。

まず第1に，我々が明らかにしようと試みたのは，農業青年といっても，「男子」農業青年についてである。つまり，男子農業青年と女子農業青年とでは，おかれている条件，当面する問題の性格がかなり異っており，女子農業青年に関しては，それ個有の問題に即した調査がなされる必要があるので，今回の我々の調査では，問題を男子農業青年だけに限定してある。したがって，女子農業青年に関しては，今後の問題として残されているのである。

第2に，我々の調査の主な目標は，次の三点である。

(1)　農業青年の教育組織はいかにあるべきか。
(2)　農業青年に必要な教育内容はいかにあるべきか。
(3)　農業青年の生活意識はいかなる構造をもっており，また年長農業青年と年少農業青年の間で，いかなる差異が見られるか，の三点である。

2　調査対象および調査方法

以上の三点を明らかにするために，我々は次にあげる三種類の調査を行なった。ここに発表するのは，この三つの調査をまとめたものである。

(1)　新潟県下の農業青年の指導者を対象とした調査（対象数281）—以下では新潟調査と略称する。
(2)　全国より派遣された農村青少年育成担当者を対象とした調査（対象数66）—以下では全国調査と略称する。
(3)　新潟県下の農業青年を対象とした調査（対象数490）—以下では青年調査と略称する

A　農業青年指導者調査

まず，(1)の調査では，県下の社会教育主事，農業改良普及員，青年研修所職員，農業教育センター職員を母集団として，そこから423名を抽出し，調査対象とした。まず農業改良普及員に関しては，新潟県下の農業改良普及員362名全員を対象とした悉皆調査である。この農業改良普及員は，44の普及所のいずれかに所属しており，普及所は平均3～4村程度を対象として，農業技術，農業経営の指導，普及にあたっている。また，青年研修所職員であるが，県下には約30の青年研修所が設置されており，1所に約1名程度，専任の職員がおかれている。この調査ではその専任職員34名全員を調査対象して選定した。次いで社会教育主事であるが，県下にはほぼ350の青年学級がある。そのうち指定農業コースを設置している青年学級が8ある。この調査ではその青年学級の主事8名を対象として選定した。次いで，農業教育センター職員であるが，農業教育センターとは，従来，経営伝習農場と呼んでいたもので，新潟県には，加茂と長岡の2ヶ所に設置されていた。37年度統計によると，入所者は

加茂が91名，長岡が55名となっているが，現在この2つの経営伝習農場は，農業教育センターの名称のもとに，県のほぼ中央にあたる鎧潟のそばに，統合される過程にある。この調査では，その専任職員19名全員を調査対象に選定した。以上，農業指導者として，いかなる人々を選定するかに関しては，新潟県農林部の協力と指示をお願いした。

以上，総数にすると423名を調査対象として，郵送法によって調査を実施した。調査票発送は38年10月10日で，11月中旬に回答を最終的に打ち切ったが，その間に1回督促を行なった。その結果えられた有効回答数は281であり，回収率は66％であった。

次に(2)の調査であるが，これは昭和38年11月5日より9日まで，茨城県内原にある農林省農業研修所で開催された都道府県農村青少年育成者研修会に出席された方々に回答してもらったものである。この研修会に各都道府県より1～2名程度，農村青少年育成の担当者が派遣されており，これらの人々に会の一部をさいて，回答してもらったものである。したがってこれは出席者66名，悉皆の調査である。ただ以下の文中では仮りに全国調査と略称しているが，勿論，厳密な意味での全国を母集団としたサンプリング調査ではない。しかし，この会には新潟県以外の人々が多数参会しており，これらの人々の回答は新潟県特有の傾向を，ある程度，浮き出たせる補助的なものとして，ここでは使っている。その点を頭に入れておいていただきたい。

このようにして最終分析の対象とした農業指導者の性格について，さらに若干説明を補足しておこう。

(イ) 身分別構成

第 1 表　被調査者の身分

	新潟調査	全国調査
社会教育主事	2 (0.7)	1 (1.5)
青年研修所職員	14 (5.0)	12 (18.2)
農業改良普及員	244 (86.8)	
農業教育センター職員	2 (2.5)	1 (1.5)
その他，無答	14 (5.0)	52 (78.8)
合計	281(100.0)	66(100.0)

第1表に示されているように，新潟調査の主体はサンプリングの手続きからもわかるように，農業改良普及員である。つまり87％は農業改良普及員で，それに対して他のもの，とくに社会教育主事は1％にすぎない。このことは，我々の調査の特色であるが，以下の結果を見て行く上では，重要な意味を持つものと考えられる。これに対して，全国調査の方は，「その他」が79％となっているのは，ほとんど全部が都道府県庁の職員である。

(ロ) 年令別構成

第 2 表　被調査者の年令

	新潟調査	全国調査
30才未満	13.2％	12.1％
30才～35才未満	34.8	25.8
35才～40才〃〃	27.0	42.5
40才～45才〃〃	8.2	12.1
45才～50才〃〃	7.1	7.6
50才以上	8.9	0.0
無答	0.7	0.0
合計	100.0	100.0

新潟調査・全国調査とも，主体は30才代の人々である。新潟調査では，72％がこの世代に入り，全国調査でも69％は，この30才代の人々によって占められている。

(ハ) 経験年数別構成

第 3 表　被調査者の経験年数

	新潟調査	全国調査
5年未満	16.7％	24.2％
5年以上10年未満	8.5	13.6
10年以上15年未満	63.5	50.0
15年以上	8.9	9.1
無答	2.5	3.0
合計	100.0	100.0

経験年数別に見て，最も多いのは10年以上15年未満の層である。新潟調査では64％が，全国調査では50％が，この層で占められている。つまり，戦後まもなくこの道に入り，以来ずっと農業青年，農業技術の指導にあたってきた人々が多いものと考えられる。あと5年未満のものが，若干ふえているのが目立つ。

(ニ) 最終学歴別構成

第 4 表　被調査者の学歴

	新潟調査	全国調査
新制中学・旧制小学校卒	3.2％	1.5％
新制高校・旧制中等学校卒	62.5	31.6
新・旧大学卒	32.8	66.6
無答	1.4	0.0
合計	100.0	100.0

新潟調査で最も多いのは，「新制高校，旧制中等学校

卒」であるが，年令から見て，旧制中等学校卒業者が主体であると考えられる。全体の63%はこのカテゴリーに入り，大学卒は33%である。それに対して全国調査は大学卒が主体で67%はこの層で占められている。

以上要約すれば，新潟調査の主体は，学歴程度は旧制中等学校卒で，年令は30才代。戦後にこの道に入り，以後10年以上，農業改良普及員として，従事してきた，大体，こう考えてよかろう。これに対して全国調査は，農業改良普及員のように，現場第一線で指導に従事しているというよりは，むしろ，都道府県レベルの農政あるいは，農村青少年の育成に参画している人々が主体と，考えることができよう。

B　農業青年

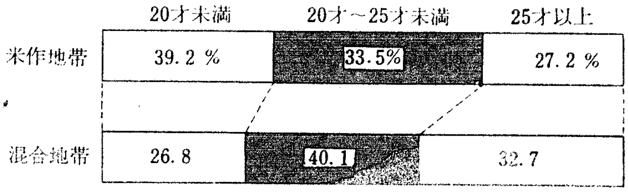
次に(3)の調査であるが，この農業青年を対象とした調査では，新潟県のうちでも，最も典型的な米作地域である西蒲原郡から，黒崎，吉田，巻の三地区を選定し，他方新潟県のうちでもやや蔬菜，果樹などの栽培の行なわれている北蒲原郡のなかから，新発田，白根，豊栄の三地区を選定し，そこに住む15才から29才までの農業青年（男子）を対象に行なったものである。調査票は各地区の改良普及所を通じ，農業改良普及員の方々から農業青年に手渡し，またそれを回収するという方法をとった。この調査では事前に農業青年の実数をつかむことは不可能だったので，回収率を約50%と見込み，約800の調査票を配布したが，その結果回収されたものが499票，そのうち有効回答票として分析に使用されたものは490票であった。尚，調査票は10月20日ごろから31日にかけて配布し，11月中ごろに各普及所に回収した。

このようにして本調査で最終分析の対象とした青年の一般的特徴は大要次のとおりである。

(イ)　年令別構成

この調査は総数490名の農業青年から集めた回答を集計したのであるが，そのうち約3割は20才未満の年令層に属し，20才以上25才未満の青年が約4割，25才以上の青年が3割といった分布になっている。第1図は，米作地帯と混合地帯とに分けて，年令別構成を示してあるが，対象の抽出方法，回収状況などから，米作地帯の方が，やや20才未満の青年の比率が多くなっている。

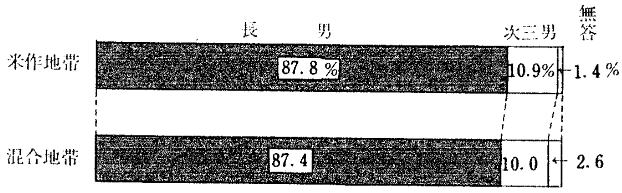
第1図　年令別構成



(ロ)　続柄別構成

次に続柄についてみるならば，長男が圧倒的に多く，全体の87%は長男で占められている。次三男以下のものは，1割程度しかみられず，この点からみても，農業青年の大部分は長男層でしめられ，次男以下のものが農村に残っていることが，きわめてまれであることが，わかる。この傾向は米作地帯，混合地帯とも全く同じで，いずれにおいても，続柄による構成に差は全く見られない。（第2図参照）

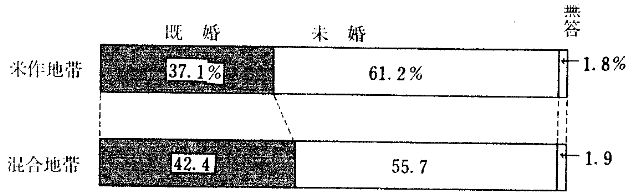
第2図　続柄別構成



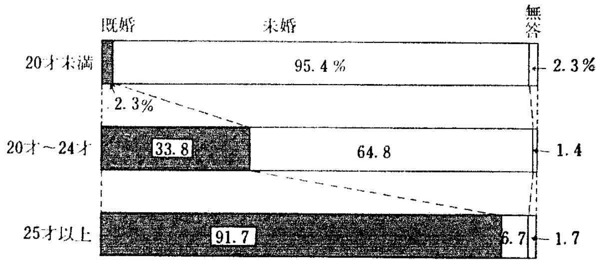
(ハ)　婚姻関係

既婚組と未婚組とに分類した結果が，第3図である。これからもわかるように，全体の4割が既婚者で，未婚のものは6割程度である。この婚姻関係は当然のことながら，年令が高くなれば，既婚者の比率は増加し，25才以上の青年の場合には90%強の者が既婚者である（第4図参照のこと）。さすがに20才未満のグループではほとんど全部が未婚者であるが，20才から24才までの年令層をとると，すでに3分の1の者はすでに結婚している。このことから考えても，結婚年令はかなり低いものと予想できる。

第3図　婚姻関係



第4図　年令別　婚姻関係



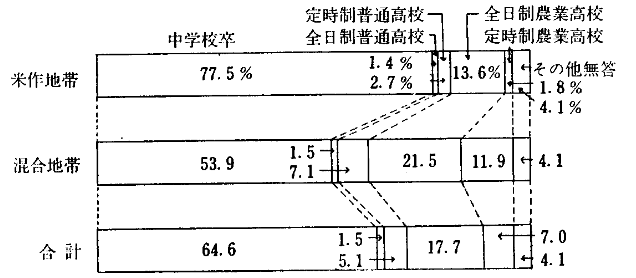
(ニ)　学歴別構成

次に最終学歴についてみると，第5図が示すように，全体の約65%が中学校卒業者である。次いで多いのは全日制農業高校卒業者で，全体の約18%がこれにあたる。それに対して，全日制の普通高校卒業者は，わずか1.5%

にすぎない。また定時制課程卒業者もかなり見られ，定時制の農業高校卒業者は全体の７％，定時制の普通高校卒業者は5.1％いる。つまり，定時制高校卒業者を合わせると，全体の12％というところになる。これらの数字から推定すると，農業青年全体の35％は，何らかの高校の課程卒業者であり，そのうち約70％は，農業課程の卒業者（全日制，定時制合わせて），それに対して普通課程卒業者は30％というところになる。また全日制か定時制かという点で分類すれば，高校課程卒業者のうち55％は全日制の高校を，残りの45％は定時制の高校を卒業したことになる。この数字から見ると，定時制のはたしている役割はかなり大きいものと考えられる。

なお，この学歴別分布には，第５図を見ればわかるように，米作地帯と混合地帯とでは，差が見られる。つまり，混合地帯の方が一般的にいって高校卒業者の占める比率が高い。例えば全日制農業高校卒業者の割合を見ると，米作地帯では14％程度であるのに対して，混合地帯では，全体の約22％が全日制農業高校の卒業者である。同じく定時制農業高校卒業者の比率も，混合地帯の方が高く，米作地帯では２％にすぎないが，混合地帯では12％となっている。このように，全体的に見て，米作地帯よりも混合地帯の方が，学歴水準が高いということができよう。

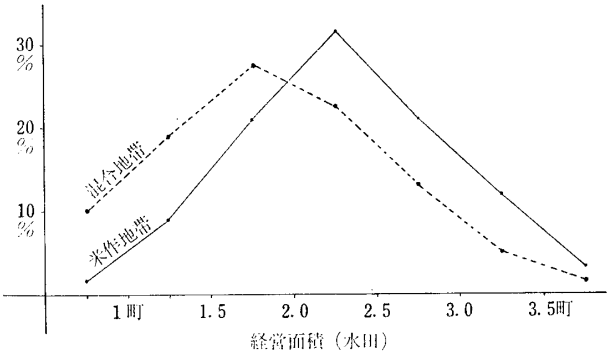
第５図　学歴別構成



㈥　経営規模

まず，水田の経営面積についてみると，第６図が示すように，米作地帯の場合，最頻値は２町から２町５反までである。それに対して混合地帯の場合は最頻値が１町５反から２町の間となっている。また平均値は，米作地帯の場合2.3町，混合地帯の場合，1.9町である。つまり米作地帯の場合，３町以上経営しているものは全体の15％，また2.5町以上の者となると36％がこのグループに入る。それに対して，1.5町未満のものは全体の10％にすぎない。それに対して混合地帯の場合には３町以上のものは6.7％，2.5町以上のものとしても，全体の15％にすぎない。これに対して，1.5町未満のものの占める比率は30％にもなる。このように，水田の経営面積からみると，米作地帯の場合，全体の70％は２町以上の水田

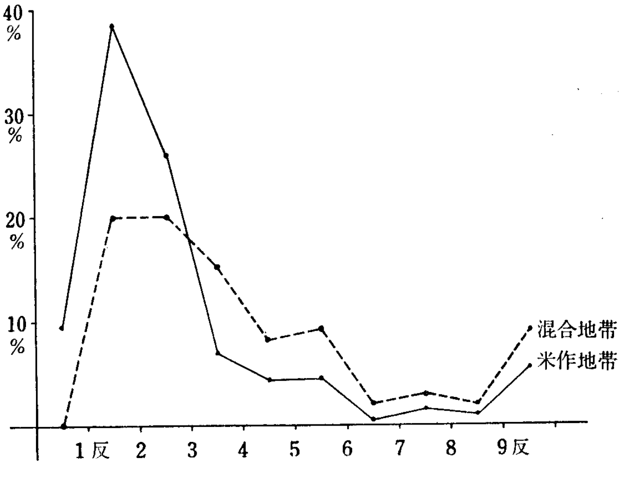
第６図　経営面積別分布（水田）



を経営している。それに対して，混合地帯では，同じく２町以上の水田を経営している者は，全体の42％程度である。

次いで，畑・果樹・園芸等の経営面積の分布を示したものが，第７図である。ここでは，便宜上，畑・果樹・園芸の経営面積の粗計を使っている。米作地帯の場合，平均面積は2.8反，混合地帯の場合には平均面積４反となっている。分布からもわかるように，米作地帯，混合地帯とも，１反から３反程度経営している者が最も多い。米作地帯では全体の74％はこのグループに入り，混合地帯全体の39％は，ここに入る。あと，それ以上経営

第７図　経営面積（畑・果樹・花等の合計）



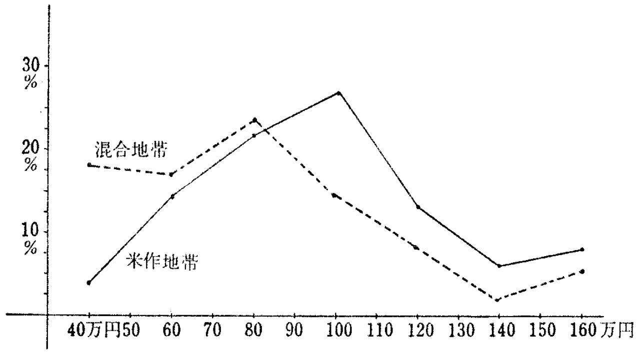
している者は次第に少なくなって行くが，米作地帯，混合地帯とも９反以上を経営しているという者が，ごく少数ではあるが５％と９％，それぞれ見られる。やはり，全体として混合地帯の方が当然のことながら経営規模が大きい。また，９反以上というようにかなりの規模で畑作なり，果樹なり，花なりの経営をしているものが，９％も見られるのが特徴的である。

㈦　農業粗収入と農業外収入

第８図は，被調査者の家の年間農業粗収入の分布を示したものである。米作地帯の場合，平均は97万円で，混

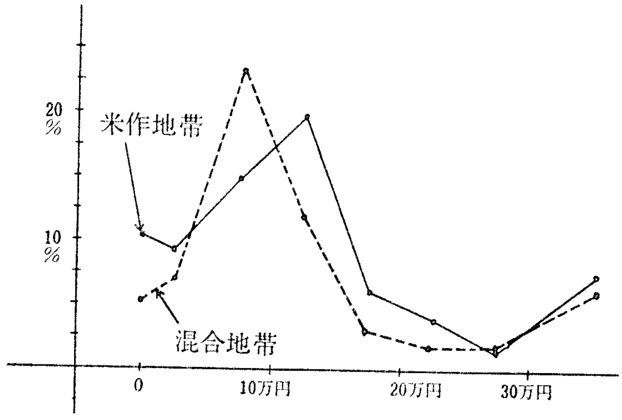
合地帯の場合は，平均が82万円となっている。つまり米作地帯と混合地帯とでは，平均して15万円のひらきが見られる。また分布の型からみると，米作地帯の場合，平均値を中心にほぼ対称形をなしている。それに対して，混合地帯の場合には，低い収入の方に曲線が歪む傾向が見られる。つまり，混合地帯では，農業粗収入70万円未満という，低い階層が全体の35%を占めており，米作地帯の20%とくらべてかなり多いのが特徴である。

第８図　農業粗収入（年間総額）



また第９図は，被調査者の家全体での農業外収入の分布を示したものである。米作地帯では10%のものが，また混合地帯では７%のものが，農業外収入なしと答えているが，その他，農業外収入のあると答えたものの場合，その幅は大体，５万円未満から30万円程度までである。平均値は，米作地帯の場合，13.5万円，混合地帯の場合は12.6万円で，両者の差は一万円程度で，大きな差は見られない。全体的に云って15万円未満の場合が大部分を占めているが，それでも30万円以上と答えているものもかなり見られる。米作地帯では８%のものが，また，混合地帯では６%のものが，農業外収入が30万円以上だと答えている。

第９図　農業外収入（年間総額）



(ト)　階層別構成

以上，経営面積・収入の関係を見たのであるが，我々は，そこから資料分析の一つの指標として，階層を設定することにした。これは，経営面積と収入の二つの項目を綜合して求めたものである。まず経営面積については，山林を除いて，水田・畑・果樹・園芸などの総面積を求め，それを第10図のように６つの段階に区分した。この点に関しては，はたして水田一反と畑一反ないしは果樹一反と等値におきかえられるかという問題も残る

第10図　階層区分のしかた

━━米作地帯の場合
┈┈混合地帯の場合

経営面積＼収入	50万円未満 ①	50万円～70万円 ②	70万円～90万円 ③	90万円～110万円 ④	110万円～130万円 ⑤	130万円以上 ⑥
1.5町未満 ①	2	3	4	5	6	7
1.5町～2.0町未満 ②	3	4	5	6	7	8
2.0町～2.5町 ③	4	5	6	7	8	9
2.5町～3.0町 ④	5	6	7	8	9	10
3.0町～3.5町 ⑤	6	7	8	9	10	11
3.5町以上 ⑥	7	8	9	10	11	12

が，ここでは一応便宜上の操作として，問題にしないこととした。次いで収入であるが，収入も農業粗収入と農業外収入の合計額を求め，これを同じく第10表のように６段階に区分した。ここでも，農業粗収入と農業外収入の合算について問題が残るが，これも不問にした。このように，経営面積と収入の二つの項目につき，１点から６点までの段階を設け，この両項目の得点の和を求めた。我々の場合には，農業青年の意見・意識・態度と階層的背景との関係をとらえることが問題なので，実際のばらつきのぐあいから，大きく，上・中・下の三段階を設けることにした。まず米作地帯では得点　3. 4. 5のものを下，得点　6. 7. 8のものを中，得点　9. 10. 11.12のものを上とした。また混合地帯の場合には，得点　2.3.4を下とし，得点　5. 6. 7を中，得点　8.9.10.11.12を上とした。その結果，米作地帯では全体の25%が下の階層に，44%が中の階層に，32%が上の階層に入ることとなった。また混合地帯の場合には，全体の32%が下の階層に，37%が中の階層に，また31%が上の階層に入ることとなった。以下，階層上・中・下といった場合には，このようにして求めた指標を使ったものである。

§３　調査票の構成

まず，農業指導者の調査に使用した調査票は，補助質問をいれて，約38問からなっている。38問のうち，(1)農

業青年の教育組織に関するものは6問，(2)農業青年の教育内容に関するものは5問，(3)農業青年の生活意識に関するものは21問，その他6問という構成になっている。

(1) 農業青年の教育組織に関する質問としては，「今後の農業者に必要とされる基礎学歴の程度はなにか」「後期中等教育段階の義務化に対する賛否」「義務化の必要があるとしたら，その形態はどうか」「現在の指導組織の統合化に対する意見」「現在の指導組織の問題点」「現在ある教育諸団体・機関・施設に対する評価」などである。

(2) 農業青年に必要な教育内容に関する質問としては「農業青年に不足している知識・技術・態度」「農業青年が学習したいと要求している知識・技術・態度」「系統的に学習させる必要のある技術・知識」「中卒者にはとくに習得困難と思われる技術・知識」「農高卒業者・普通高卒業者・中学卒業者三者の比較」などである。

(3) 農業青年の生活意識に関する質問としては，「農業青年の一般的諸傾向」12問，「農業青年の悩み」2問，「農業青年の生活意識と生活態度」8問，「農業青年に対する抱負と将来の農村生活についてのヴィジョン」2問である。

次に，農業青年を対象とした調査で使用した調査票は，32問からなっている。農業につくにいたった経路に関する質問　8問，農業労働，農業経営の実態およびその変化に関する質問　7問，余暇時間の実態その利用のしかたに関する質問　8問，青年の生活意識，価値観に関する質問　13問，教育機会，教育要求に関する質問10問，以上補助質問まで入れると約50問から構成されている。

Ⅱ　農業青年の教育機会と教育内容

1　農業青年指導者調査の結果

§1　農業青年の教育組織はいかにあるべきか

今日，農業青年の教育組織はいかなる問題に当面しているか，またそれは今後，いかなる方向に拡充・整備されねばならないか，とくに学校教育以外の諸活動，団体が当面する問題は何であるか。まず，これらのことが問題にされねばならない。

A　離農の傾向とそれに対する対策

よく指摘されるように，教育組織が相手とすべき農業青年そのものがすでに，いなくなりつつあること，このことが現在の農業青年の教育組織の第1の問題だとされている。こうした点は新潟県の場合，どのような状況にあるか。まず，このことから説明して行きたい。昭和35年度の統計によると，新潟県全体で農家世帯数は約21万戸である。この農家世帯が30年単位に世代交代を行なうと仮定すると，毎年7,000人のあととりが農業につかねばならず，またその配偶者をも含めると，毎年約1万4,000人の農家補充人口が必要となる訳である。一方いま36年3月の卒業者についてみると，中学卒業者のうち農業に就職したものは3,463名，高校卒業者のうち農業に就職したものは1,600名である。これから計算すると，新潟県の農家人口補充率は35.3%であり，北海道・青森についで，全国第3位である。今日すでに全国の農家人口補充率が平均18.8%ということと合わせ考えると，新潟県は農業後継者の確保という点では，まだ有利な方だと云わざるをえない。

我々の調査でも，指導者の日常経験として，青年の離農傾向が，どの程度であるかをたずねたが，その結果は第5表の通りである。

第5表　青年の離農傾向

	新潟調査	全国調査
あととりまでが農業をはなれて行く傾向が強い	% 46.3	% 71.3
次，三男は都会に出て行くがあととりはだいたい農村に残る傾向である	41.0	24.2
農業をすてるものの数はまだそれほど多くない	8.9	3.0
一度農村をすててまたかえってくる傾向がでている	3.2	1.5
無　答	0.7	0.0
合　計	100.0	100.0

つまり，全国調査では71%のものが「あととりまで農業から離れて行く傾向が強い」と答えているのに対して，新潟調査では，その割合は46%で，全国調査と比較してかなり低い。その逆に「次・三男は都会に出て行くが，あととりはだいたい農村に残る傾向である」とするものは，全国調査では24%であるのに対して，新潟調査では41%である。農村青年の脱農化に対して，新潟県が全国よりかなり有利であることは我々の調査結果にも反映されている。

それでは，こうした離農傾向を農業指導者はどのように見ているか。離農化を一応，産業構造の変化にともなう必然的傾向として，是認しているのか，あるいはこれを危機的なものとして考え，何らかの対策を考え，こう

した傾向にブレーキをかける必要のあるものと見ているのか。この点を質問した結果は第6表の通りである。

第6表　離農に対する対策の必要性

	新潟調査	全国調査
農業人口はへった方がよいので，とくに引きとめ策は考える必要はない	% 38.8	% 45.5
今のうちに引きとめ策を立て，農業後継者を確保することが必要である	42.0	40.9
どちらとも云えない	18.2	13.6
無　答	1.1	0.0
合　計	100.0	100.0

この結果を見ると，新潟調査では，39%のものは農業人口の減少を，今の時点では，一応，このましい傾向とみ，とくに引きとめ策を立てる必要はないと考えている。しかしその反面，今から引きとめ策を立てる必要のあることを主張しているものは，42%で，この二つの考え方は両者とも，相半ばしている。同様のことは，全国調査についてもいえ，青年の離農をこのましいと見るか，あるいは危機的なものとしてみるかについては，農業指導者のなかで，意見がわかれている。

B　これからの農業者には最低どの程度の基礎学歴が必要か

近年，全国的に高校進学率が高まりつつあることは周知の通りである。37年3月の統計によると，新潟県の高校進学率は55.1%で，全国で38位である。この進学率は全国平均64%と比較するとかなり低い。

また新規農業労働力の学歴構成をみると，全国平均では，昭和27年度の新規農業労働力の中卒者と高卒者の比率は9・7：1であったが，32年度では3・5：1，36年度では2：1となっている。つまり，ほぼ10年前には，中卒者10に対して，高卒者1であったものが，今では2：1となっているのである。これは全国統計であるが，新潟県でも大きな変化があり，今日では，やはり2・2：1となっている。このように，新規農業労働力の平均学歴は次第に上昇し，高卒者のしめる割合がきわめて高くなりつつある。こうした事実と関連し，農業指導者は，これからの農業者には，最低，どの程度の基礎学歴が必要だと，考えているのかをたずねた。その結果は，第7表に示されている。

この結果からも読みとれるように，ほとんどの者が，これからの農業者には，基礎学歴として高校が必要であると答えている。これは新潟調査ばかりでなく，全国調査でも90%は，高卒を基礎学歴として，選択している。この90%という数は非常に重みをもつものと考えられる。

第7表　これからの農業者に最低必要とされる基礎学歴

	新潟調査	全国調査
中学校卒業程度の学力があれば，あとは実際の経験をつんで行けば十分だ	% 0.7	% 0.0
高校を出なくとも，中学校卒業後適当な教育訓練を随時与えれば十分だ。	13.9	10.6
これからは高校卒業程度の学力が必要だ	84.6	89.4
無　答	0.7	0.0
合　計	100.0	100.0

C　農業青年のための後期中等教育はいかにあるべきか

現在，義務教育の最終期は中学校である。90%の農業指導者は高校卒程度の学歴が，これからの農業者には必要だと考えているのであるから，問題は，後期中等教育の組織をいかにすべきかということになる。しかも，農業青年を対象とした，教育組織がいかにあるべきかという問題である。

そこで，我々は，中学校卒業以後，何らかの教育を農業青年に義務化することに賛成であるか，どうかをたずねた。その結果は，第8表である。

第8表　後期中等教育の義務化について

	新潟調査	全国調査
賛　成	88.5%	94.0%
反　対	6.1	4.5
わからない	5.3	1.5
合　計	100.0	100.0

つまり，この結果では90%近くのものが義務化することに賛成と答えている。すなわち大部分の農業指導者は，中学校卒業以後の農業青年に何らかの義務教育を与えることに賛成している訳である。これに対して，反対意見を示すものは，5%前後にすぎない。これら反対意

見の人々の理由は何であるか，参考までに例挙しておこう。

○農業で将来を立てようとする青年なら，農業高校に進むのが常識である。何も義務教育にする必要はない。

○私達の地区の中卒者500名中，農業に残った者はわずか12名。この者は大体三流人物である。能力の低い者が多い。中卒より，むしろ定時制高校又は高校卒を教育する方が優先かと思う。

○自主性を尊重し，義務づける必要はないと思う。われわれの日常活動の中で，積極的によき農業青年の相談相手になるよう，反省しなければならない。

○とくに義務づける必要なし。各々目的に依って職業別に専攻した方が良い。例へば同じ農業でも家畜・果樹等に分けて専門的教育をすること。

○教育の機会を設けるのは良いが，義務教育までは無理だ。また現在いや近い将来に及んでも農家経済の苦境からみて父兄の負担を伴う義務教育は困難ではないか。農業青年が喜んで，自己勉学の出来る施設を作る事が先決ではないか。

○個々の自由にまかせて，希望するものに徹底した農業教育の場を与えるべきである。普及事業の中に農業教育専任者を置くことも考えられる。

○高校教育をうける能力のないものまで一緒にすると，一般の学生の勉強に支障ができる。

○農業青年を特別扱いしなくとも，すでに進学率も高いし，今までのままでよいと思う。

○教育は義務化することにより，それほど効果はあがらない。それより環境の整備を計り，学習意欲の向上を計ることが，より大切。

○中学校卒で，農村で働く少年の多くには，学ぶという意欲が少ない。大いに研修しようと思えば，親は定時制高校へやってもよいと考えている。

それでは，どのような形態でそれを義務化することを望んでいるのか。我々は，これを現行の学制にとらわれることなく，年限においても，全日制であるか定時制であるかについても，また学校組織の拡充という方向をとるか，青年団体の拡充という方向をとるかも，まったく自由に選択できるような形で質問した。その結果が第９表である。

この結果から見ると，最も多いのは，「現在の高校とはちがった新しい農業青年のための全日制の学校を作って義務化する」という回答であった。またそれとほとんど同じ程度で「現行の各種教育機関をそれぞれ整備して，そのどれかをうけるよう義務化する」という回答が

第９表　後期中等教育を義務化する場合の形態

	新潟調査	全国調査
全日制高校を義務化するのがよい	16.1%	13.5%
定時制高校を義務化するのがよい	5.0	8.5
現在の高校とはちがった新しい農業青年のための全日制の学校を作って義務化する	29.8	30.5
現在の高校とはちがった新しい農業青年のための定時制の学校を作り義務化する	20.3	23.7
現行の各種の教育機関をそれぞれ整備し，そのどれかをうけるよう義務化する	29.0	23.7
合　　計	100.0	100.0

あげられている。次いで多くの選択をえたのは「現行の高校とはちがった新しい農業青年のための定時制の学校を作って義務化する」というものである。この三つが多くの人々の支持をうけたものであるが，この三つは，それぞれ形態が大分異なっている。いいかえると，義務教育制度を新たに設けることに対しては，圧倒的多数のものが賛成しているのに対して，具体的にそれをどのような形態のものとして作るかに関してはいずれも支配的な意見になっていないのが現状である。また，現行の高校とはちがった定時制ないしは全日制の学校を作るべきであるという意見に対しては，さらに何年程度のものが望しいかをたずねたが，その結果が第10表である。

第10表　何年程度の学校を義務化するか

	1年	2年	3年	4年	5年	1～2年	2～3年	合計
全日制の学校の場合	3.0	50.0	39.4	1.5	1.5	1.5	3,0	100.0
定時制の学校の場合	0.	45.8	39.6	4.2	8.3	0	2.1	100,0

これによると，「農業青年のための全日制の学校を作り，それを義務化する」という意見の50%は２年のものと答えており，40%は３年という年限をあげている。一方，「農業青年のための定時制の学校を作り，それを義務化する」という意見の46%は２年程度のものをあげており，40%は３年程度の定時制の学校をあげている。

そこで，以上の諸回答をまとめ，年限としては何年程度がよいか，形態としては全日制がよいか，定時制がよいかという点で整理してみると次のとおりになる。

1. 3年制の全日制学校（現行の全日制高校を含む）	26.8%	65
2. 2年制の全日制学校	13.6	33
3. 4年制の定時制学校（現行の定時制高校を含む）	5.8	14
4. 3年制の定時制学校	7.9	19
5. 2年制の定時制学校	9.1	22
6. その他の年数の全日制学校	4.6	11
7. その他の年数の定時制学校	3.3	8
8. 現行総教育機関のいずれかを義務化する	29.0	70
合　　　計	100.0	245

このように，最も多いのは，やはり，現存するいろいろな教育機関（通信教育・農業教育センター・青年学級など）のどれかに参加することを義務づけるという意見であり，次には，3年制の全日制学校の義務化であり，次いでは2年制の全日制学校である。この他にもいろいろな意見が提案されており，そのいずれも支配的意見になっていないということが，特徴だといわざるをえない。

D　現在の農業青年のための教育組織はどう評価されているか

どこの県においてもそうであるが，新潟県においても，各種の教育活動が，農業青年の教育・指導にあたっている。例えば青年学級，農事研究会，4Hクラブ，農協の青年部，青年研修所，生活改善グループ，青年団，農業教育センター，さらには，新潟県ではかなりの成果をおさめているといわれるラジオ農業学校など，さまざまな団体，施設，機関が農業青年の指導にあたっているわけである。そのうちの若干について説明しておくが，まず青年学級であるが，新潟県における開設状況は第11表の通りである。

第11表　青年学級の現状

	学級数	総時間数	内農業関係の占める時間	農業関係の占める率	生徒数
30年度	572	143,281	27,578	19.2	30,820
35年度	352	102,243	21,337	20.9	23,486

昭和35年度の国勢調査によると，新潟県全体では15才～24才の年令層の青年は約40万人いるので，いまこれを基数とすると，約6％が青年学級に吸収されていることになる。また，あとでも述べるが，青年を対象とした調査の結果によると，現在，青年学級に参加している青年は米作地帯で7.3％，混合地帯では13.0％となっており，その大部分は24才以下の青年たちである。

次いで，主として25才以上の農業経営者が自主的に農業の研究及び農業改良を実践している，農事研究会についていうならば，その数および，集団員数は第12表のごとくである。

第12表　農事研究会の状況

	集　団　数	集　団　員　数
31　年　4　月	997	19.640
35　年　8　月	1,566	28.007
37　年　1　月	781	9.890

この農事研究会への参加率は，青年調査によると，米作地帯で28％，混合地帯で18％でその主体は25才以上の青年層である。つまり25才以上の青年の40％はこの団体に所属している。

さらに，25才以下の農村青少年が自主的に研究集団を組織して，農業の研究および農業改良を実践している，農村青少年クラブについてみれば，第13表のような状況となっているが，これは15才～25才年令層の約2.5％を吸収していることになる。

第13表　農村青少年クラブの状況

	集　団　数	集　団　員　数
31　年　4　月	326	5,053
35　年　8　月	509	5,304
37　年　1　月	218	2,150

さらにまた，生活改善グループについてみれば，第14表のようになっている。

第14表　生活改善グループの状況

	集　団　数	集　団　員　数
31　年　3　月	175	4.351
35　年　3　月	525	10.083
37　年　3　月	623	10.365

またラジオ農業学校は，新潟県がとくに力を入れているもので，主として20才未満の年少農業青年の教育機会として，その成果に大きな期待がかけられている。その正確な受講者数はおさえられていないが，ラジオ農業学

校テキストの購読部数からみると，新潟県では36年度には23.341部，37年度には14.000部，38年度については，12.000部と報告されている。これは北海道についで全国第2位の購読部数にあたる。

また，我々の調査では，20才未満の農業青年の約40%が現在，ラジオ農業学校に参加しているという結果がでており，その普及率はかなり高いと考えられる。

このように，多くの教育施設，機関，集団があり，それぞれが農業青年の指導・教育を担当しているわけであるが，これらについて農業指導者はどのように評価し，それについてどのような意見をもっているか，まずこの点に焦点を合わせることにする。

第15表　各教育活動の効果

	青年学級	農事研究会	農業教育センター	4Hクラブ	農業学校ラジオ	農協青年部	青年研修所	生活改善グループ	青年団
農業技術の学習	+4 −23	+29 −1	+62 −0	+25 −1	+31 −2	+4 −22	+11 −7	+2 −16	+1 −63
農家経営改善のための学習	+2 −24	+24 −4	+41 −1	+9 −7	+5 −12	+12 −15	+4 −8	+6 −18	+0 −52
共同化の推進	+0 −35	+28 −5	+19 −8	+5 −11	+2 −28	+13 −11	+4 −15	+4 −21	+0 −58
生活様式の合理化改善	+2 −20	+2 −16	+12 −6	+5 −14	+2 −14	+2 −19	+2 −10	+55 −0	+2 −31
仲間づくり	+14 −6	+12 −9	+15 −6	+41 −0	+8 −17	+2 −19	+7 −9	+9 −4	+17 −9
健全な余暇利用	+17 −7	+2 −20	+6 −14	+13 −7	+4 −25	+1 −29	+2 −10	+3 −7	+16 −10
社会常識の学習	+33 −3	+1 −30	+13 −7	+2 −19	+4 −26	+2 −27	+6 −8	+1 −17	+7 −14

第15表の注　+4とは，全体の4%のものが，非常に効果があると答えたことを意味する。−23とは，逆に全体の23%のものが，ほとんど効果なしと答えそのことを意味する。

第15表は，新潟県で活動している代表的な教育活動として青年学級・農事研究会・農業教育センター・4Hクラブ・ラジオ農業学校・農協青年部・青年研修所・生活改善グループ・青年団の9つをとり出し，それぞれが，農業技術の学習・農家経営改善のしかたの学習・共同化の推進・生活様式の合理化・改善・仲間づくり・健全な余暇利用・社会常識の学習の各面で，とくに効果があるか，あるいは効果がほとんど認められないかを評価してもらったものである。例えば+26と記入してあるものは，26%のものがとくに効果ありと答えたものであり，−3と記入してあるのは，3%が効果がほとんど認められないと答えたという意味である。

まず，農業技術の学習という面を見ると，農業教育センターは62%のものがとくに効果ありと答え，効果なしと答えたものは0であった。したがって農業教育センターに対するこの面での評価は高く，安定していると見られる。この他農事研究会，4Hクラブ，ラジオ農業学校なども，この面ではかなり高い評価をうけている。次いで農家経営改善のしかたの学習という面での評価を見ると，ここでも農業教育センターの評価は一番高く，ついで農事研究会の評価も高いようである。しかし，農協青年部は効果とくにありと答えるものが12%ある代りに，効果なしと答えているものも15%いる。したがって，農協青年部のこの面での評価は安定していない。また共同化の推進という面でみると，農事研究会の評価の高いのが目立ち，次いで，農業教育センターも高い。しかし，農協青年部に対する評価は，ここでも分かれ，安定していない。次いで生活様式の合理化，改善という面では，当然のこととして生活改善グループに対する評価が高くまた安定している。また仲間づくりに関しては，4Hクラブに対する評価が高く，安定しているが，青年団に対する評価は，必ずしも安定しているようには見えない。健全な余暇利用という面についてみるならば，ここでは青年学級に対する評価が高いようではあるが，7%のものは効果なしと答えており，安定しているとは考えられない。同様のことは青年団についても云える。16%のものは効果ありと答えているが，10%のものは効果なしと考えている。社会常識の学習という面では，青年学級が他の活動をぬきんでて，高く評価されており，その評価も安定していると見られる。農業教育センターに対するこの面での評価は，必ずしも安定していると断定することはできない。

次いで，このような種々の教育活動の相互間の関連をたずね，このような一見複雑に見える農業青年の教育活動を統合することについて，どう考えているかを質問した。その結果は第16表であるが，これからみると，最も多くの回答者の選択している項目は「部分的に統合するのもよいが，いくつか種類性格のちがったものがあってよい」という項目であった。この項目は新潟調査では59%，全国調査では73%が選んでいる。それに対して，現在の農業青年の教育組織には「相互に重複が多く，調整し，統一をはかり，一本化すべきだ」と考えているもの

は，新潟調査では13％，全国調査では14％にすぎない。このように，農業青年のための教育組織が多様であること

第16表　教育組織の統合について

	新潟調査	全国調査
	%	%
それぞれ目的がちがう。それぞれの特色をもっとのばすのがよい。	16.4	12.1
相互に重複が多い。調整し統一をはかり，一本化すべきだ。	23.1	13.6
部分的に統合するのもよいが，いくつか種類性格のちがったものがあってもよい。	58.9	72.7
わからない	1.8	1.5
合　　計	100.0	100.0

に対しては，積極的に支持する意見の方が多い。このことは，先に，後期中等教育段階を義務化する場合の形態をたずねた際に，最も多く出された意見が「現行の各種の教育機関（通信教育、農業教育センター，青年学級）等をそれぞれ整備して，そのうちどれかをうけるよう義務化するのがよい」というものであったことと照合する。つまり，多くの意見は，現存する諸教育機関のそれぞれの方向での拡充，発展を希望しているものだということができよう。

それでは，現在の農業青年の指導面で，最も問題だと指導者が考えているのは，どのような点であろうか。この点をたずねた質問の結果が，第17表である。これから見ると，一番多くの指導者にあげられた問題は，「学ぶ青年自身に意欲関心が欠けていること」という項目である。この項目は，新潟調査では30％のものがあげており，全国調査でも23％のものがあげており，同じく最も高い。次いで２番目に多くのものに選ばれたものは「指導のための施設，設備がたりないこと」で，これは25％，３番目には「指導の機構がわかれすぎていること」があげられており，14％のものがこの項目をえらんでいる。つまり，農業青年の教育組織が多様であってよいというのが，義務化の問題，組織統合化の問題の一般的傾向であったのであるが，ここでは，14％のものは，やはり，組織機構がわかれすぎている点を指摘している。以下，予算，指導者自身の研修の機会などが４番目，５番目程度にあげられている。

第17表　指導組織の問題点

	新潟調査	全国調査
	%	%
指導のための施設設備がたりないこと	25.2	16.7
指導者が不足していること	3.9	6.1
指導の機構がわかれすぎていること	13.9	18.2
指導者自身の研修の機会が少ないこと	4.6	7.6
予算がたりないこと	12.5	13.6
上層部の意欲がたりないこと	3.2	7.6
地域の人々の関心理解がかけていること	2.8	6.1
学ぶ青年自身に意欲，関心が欠けていること	29.9	22.7
その他	3.2	1.5
合　　計	100.0	100.0

Ｅ　ま　と　め

以上が，農業青年の教育組織に対する意見の概要であるが，ここで二三，問題となる点を要約して列挙してみよう。

1　これからの農業者の基礎学歴として，高校卒程度を望む声がいちじるしく顕著である。90％は高校卒が最低必要だと考えている。

2　中卒後，数年間の義務教育を農業青年に与えることには90％のものが賛成している。

3　ただし，どのような形態の学校を義務化するかについては，支配的な意見はなく，種々さまざまの意見が提出されている。しかし，そのなかでも，比較的多くの者が提案しているものをひろうならば，現在ある諸教育機関をそれぞれ拡充し，そのどれかに参加することを義務づけるという意見で，これは全体の29％のものが支持している。次いで２番目に多いのは，３年間の全日制の学校を義務化するもので，これは27％のものが支持している。この他には，２年制の全日制学校とか，２年制の定時制学校とか，３年制の定時制学校など，いろいろ現行学制からははずれた形態の学校を提案するものがかなりいる。

4　現在の農業青年指導組織に対する評価を見ると，種々さまざまなものがあり，それぞれが特色をもって活動することに対しては，かなり積極的に支持しており，にわかに統合化する必要性はないというのが，大方の意見である。

§2　農業青年教育の教育内容はいかにあるべきか

農業青年の教育機関・団体・施設には，以上のように種々さまざまなものがあり，またそこで教えられる教育内容もまた，さまざまである。こうした現状に対しては，あえて統合する必要なしとするのが，我々の調査結

果の一つである。そこで機構はともかくとして，農業青年のおかれている状況，そこから生じてくる教育要求，などを見た場合，農業青年に与えられねばならない教育内容の中核はどのようなものであるか。今後，農業青年には何を教えねばならないのか，この点についてここでは述べることにする。

A　農業青年に不足しているものは何か

まず，この点を明らかにするものとして，現在，農業青年にはいかなる知識・技術・態度が欠けているか，とくに年少青年と年長青年との比較でみるとどうなるか，この点から見て行くことにする。その結果は第18表に示されている。

第18表　農業青年には何が欠けているか

	新潟調査		全国調査	
	年少青年	年長青年	年少青年	年長青年
基礎的な農業技術	23.2	6.1⑤	34.9①	9.1
新しい農業技術を導入しようとする積極性	4.6	3.9	4.5④	3.0
農業経営改善に必要な基礎知識	5.3	12.8④	4.5④	13.6②
農業経営を改善しようとする積極性	7.1④	17.5①	3.0	15.2①
農業に対するほこり	28.1①	13.4③	27.3②	12.1③
家庭生活を改善し，合理化しようとする積極性	0.4	0.7	0	1.5
仲間づくりに対する積極性	3.6	2.1	0	1.5
部落生活を改善し合理化しようとする積極性	1.4	2.1	0	1.5
農産物の流通機構についての知識	0.7	4.3	1.5	3.0
共同化に対する積極性	0.7	4.3	0	3.0
国や県の農業政策についての理解	2.1	4.6	3.0	3.0
農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度	8.9③	15.0②	4.5④	12.1③
社会経済政治全体のうごきについての理解	5.7⑤	6.1⑤	6.1③	10.6⑤
余暇の健全な利用のしかた	0.0	0.4	1.5	1.5

①，②，③……は順位を示す。

この結果から云えることは，年長青年と年少青年とでは，不足していると指摘されるものの内容がちがっている。年少青年の場合，一番多くあげられるのは，農業に対するほこりである。28%のものは，これをあげている。それに対して，年長青年について農業に対するほこりの不足を指摘するものは13%で，この数は3番目に多い。年長青年にも農業のほこりがたりないと感じている指導者はかなりいるが，それでも，年少青年の場合ほどではない。

次に，年少青年の場合第2位に多くあげられているのは，基礎的な農業技術で，23%の者がこの項目をあげている。しかし，年長青年の場合になるとその比率は6%と少なくなる。それに対して，年長青年の場合一番多くあげられるのは，農業経営を改善しようとする積極性である。これは18%のものがあげており，一番多い項目である。全体的に云って，年少青年の場合には農業技術の欠如が目立つのに対して，年長青年になるとそれは農業技術ではなく，農業経営にウエイトが移ってきている。

次いで特徴的なことは，年少青年，年長青年をとわず多くあげられるのは「農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度」と「社会，経済，政治全体のうごきについての理解」である。つまり，農業を広いパースペクティブのなかで考えようとするかまえ，社会全体のうごきについての理解は年少，年長をとわず，不足している点として指摘されている。

B　農業青年の教育要求はどこにあるか

それでは，農業青年自身のもっている教育要求はどのようなものであるか。何を学ぶことを要求しているのであろうか。第19表がその結果であるが，これからわかることは，年少青年の場合，一番多いのは，基礎的な農業技術であり，年長青年の場合は，農業経営に関する知識である。一般的にいって，年長青年の場合に，農業経営に対するウエイトが，年少青年の場合よりも高くなる。

もう一つ特徴的な点は，年少青年の場合には，余暇利用に関する要求が高く，3番目に多くあげられていることである。しかし，他の項目はいずれにしても，あげられる比率が少なく，ほとんどが農業技術か農業経営に関する項目に集中している。つまり，農業指導者のとらえた農業青年の教育要求は，主としてこの領域に集中しているということになる。

ここで注目しなければならないことが一つある。農業指導者は，農業全体を広いパースペクティブのなかで考えるかまえが，年少，年長共通に欠けていると指摘している。ところが農業青年の教育要求としては，こうした点はほとんどあげられていない。事実として，農業青年にこうした教育要求がないのかどうかは，青年調査の結果のところで論ずるが，この限りでみるかぎり，農業指

第19表　農村青年の教育要求はどのような点に向けられているか

	新潟調査		全国調査	
	年少青年	年長青年	年少青年	年長青年
基礎的な農業技術	28.1①	6.8④	28.8①	4.5④
新しい農業技術を導入しようとする積極性	16.4②	18.2②	19.7②	25.8②
農業経営改善に必要な基礎知識	6.8④	23.2①	3.0	28.8①
農業経営を改善しようとする積極性	1.4	18.2③	3.0	16.7③
農業に対するほこり	2.1	1.4	1.5	0
家庭生活を改善し合理化しようとする積極性	5.3	2.1	4.5④	3.0
仲間づくりに対する積極性	6.4⑤	0.7	12.1③	3.0
部落生活を改善し合理化しようとする積極性	1.4	2.8	1.5	1.5
農産物の流通機構についての知識	1.1	3.9⑤	0	3.0
共同化に対する積極性	0.4	2.1	0	0
国や県の農業政策についての理解	1.8	2.5	0	1.5
農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度	1.1	2.8	3.0	0
社会経済政治全体のうごきについての理解	2.5	1.1	0	4.5④
余暇の健全な利用のしかた	8.9③	1.4	12.1③	0

導者の期待と，農業青年の教育要求の間にギャップが見られると考えられる。

C　農業青年に系統的に教える必要性のあるのは何か

これまでのように，講習会，研修会等の短期間の教育訓練ではなく，なるべく学校などで系統的に教育する必要のあるものとして，指導者はどのようなものをあげているか。我々は比較的基礎的な農業技術から，農業経営に必要な基礎知識，さらには広い社会的・政治的・経済的な動きにいたるまでの項目をあげ，そのなかから農業青年に系統的に教育する必要性のあると考えられるものを選択してもらった。その結果が第20表である。この結果から指摘しうることをいくつかあげるならば，まず最も多くあげられたのは，「農業簿記のつけ方，農業経費の計算」という項目で，39%のものが，まずこの項目をあげている。この他の項目があげられる率はこれに対してきわめて低く，この項目がいかに重視されているかがこれからもわかる。つまり農業指導者が系統的に教育す

第20表　系統的に教育する必要性のある点

	新潟調査	全国調査
農業機械の整備運転	9.6③	6.1③
品種作目の選定	1.8	0
育苗技術	0.7	0
農薬，肥料のやり方	1.4	0
病虫害防除	0.4	0
水のかけひき，熟期判定	0.4	0
温床のつくり方，管理のしかた	0	0
接木，剪定のしかた	0	1.5
畜産技術	7.5④	1.5
肥料，飼料の成分や栄養の計算	6.1	0
農産物の流通機構	7.1⑤	6.1③
農家簿記のつけ方、農業経費の計算	39.2①	72.7①
国や県の農業政策	4.3	0
社会・経済・政治全体のうごき	10.7②	9.1②

べき中心として考えているものは，品種作目の選定などをはじめとする個々の農業技術なのではなく，むしろ農業経営に不可欠な基礎的知識，あるいは合理的経営のための基礎に向けられているということであろう。このことは，農業青年教育の中核が，農業技術ということよりも農業経営という側面に移行してきている明らかな証拠と考えられる。

この他の項目について見るならば，「農業機械の整備運転」といった項目を別にすれば，「肥料，飼料の成分や栄養計算」とか，「農産物流通機構」といった項目に回答があつまっており，いいかえると，いずれも農業経営に関連をもつものか，あるいは「社会・経済・政治全体のうごき」といった広い視野の育成といった側面にウエイトがかけられている。つまり，農業青年に対して何らかの系統的教育機会が与えられるとしたら，そこで教育さるべきものは，農業経営的側面に関する資質だとされているのである。

それでは，これらの点を学習するのにどの程度の基礎教育を必要とするであろうか。はたして中卒程度の基礎教育で，これらは十分理解できるものとして考えられているのであろうか。この点をたずねた結果が第21表である。この結果を見てもわかるように，「肥料・飼料の成分・栄養計算」「農産物流通機構」「農家簿記のつけ方，農業経費の計算」「国や県の農業政策」「社会・経済・政治全体のうごき」などは，いずれも，短期間の教育訓練ではなく，系統的に教育さるべき項目としてあげられていると同時に，中卒程度の学力の者では習得が困難だとされている。つまり「農家簿記のつけ方，農業経

費の計算」などは，40％のものが，中卒程度では無理だと答えている。後期中等教育段階を何らかの形で義務化するといった要求の基礎の一部は，こうした点にもあると考えられる。

第21表　中卒程度の学力の者に教えるのが困難なもの

	新潟調査	全国調査
農業機械の整備・運転	2.9	3.0④
品種作目の選定	0.7	
育苗技術	0	
農業・肥料のやり方	0.7	
病虫害防除	0.7	
水のかけひき・熟期判定	0	
温床のつくり方・管理のしかた	0	
接木・剪定のしかた	0.7	
畜産技術	2.5	
肥料・飼料の成分や栄養計算	5.0⑤	3.0④
農産物の流通機構	6.8④	6.1③
農家簿記のつけ方・農業経費の計算	40.6①	63.6①
国や県の農業政策	8.2③	0
社会・経済政治全体のうごき	19.4②	21.2②

第22表　農高卒・普高卒・中卒三者の比較
新潟調査

	農高卒がすぐれている	普高卒がすぐれている	中卒がすぐれている	差なし
基礎的な農業技術	**95.5**	0	1.1	2.1
新しい農業技術を導入しようとする積極性	**53.0**	20.6	4.9	19.6
農業経営改善に必要な基礎知識	**78.0**	6.4	1.1	8.5
農業経営を改善しようとする積極性	**44.5**	19.6	3.2	29.9
農業に対するほこり	29.2	3.9	7.1	**53.0**
家庭生活を合理化し，改善しようとする積極性	13.5	29.9	3.9	**46.7**
仲間づくりに対する積極性	11.4	18.2	27.0	**41.7**
部落生活を改善し，合理化しようとする積極性	17.8	18.9	4.3	**52.0**
農産物流通機構についての知識	**53.5**	17.8	0	22.0
共同化にたいする積極性	31.6	11.4	3.2	**44.9**
国や県の農業政策についての理解	**35.2**	33.1	0	27.0
農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度	18.2	**56.2**	0.4	22.1
社会・経済・政治のうごきについての理解	4.9	**72.5**	0	18.2
余暇の健全な利用のしかた	4.3	25.0	4.6	**58.0**

D　農高卒・普高卒・中卒三者の比較

最後に，今日の農業青年を構成している3つの主な学歴集団である，農高卒・普高卒・中卒の三者について，それぞれがどのような点ですぐれているか，また三者に差がないとすればそれはどのような点であるか，こうした評価の結果を示すことにする。我々は，諸々の知識・技術・意欲をとり出し，それぞれについて三者の比較を行なうようたのんだ。その結果が第22表である。数字は全体の何％のものが，その欄を選択したかを示している。またゴジックの数字は，その箇所が最も比率の高いことを示している。

この結果からみると，農業高校卒業がすぐれていると評価するものが一番多い箇所は，農業技術・農業経営に関する知識・積極性，農産物流通機構，国や県の農業政策についての理解といった項目である。これに対して，普通高校卒がすぐれているという回答の最も多い箇所は農業を広いパースペクテイブの中で考えようとする態度，社会・経済・政治全体についての理解という箇所である。それに対して中卒がすぐれていると考えた比率の最も多い箇所はみあたらない。全体的にいって，農業に関する領域ではやはり農高卒が高い評価をされているが，広いパースペクティブや視野ということになると普通高校卒が高い評価をうけている。他の項目では差なしと答えたものが最も多く，農業にたいするほこりなども，三者では差がないという回答などは注目してよかろう。

E　ま　と　め

以上が，農業青年教育の教育内容に関する回答の概要であるが，ここで特徴的と考えられる点を，要約しておくことにする。

1　まず第1にあげられる特徴は，農業技術という側面よりもむしろ，農業経営に関する教育が重要だと考えられていることである。とくに，年長青年の場合には，この農業経営に関する知識が不足しているという評価が下される一方，指導者の側からも，また，青年自身の側からもそれを教育する必要であるという要請が，提出されている。

2　第2には，農業を広い全体的なパースペクテイブのなかでとらえること，さらには，社会全体のうごきに

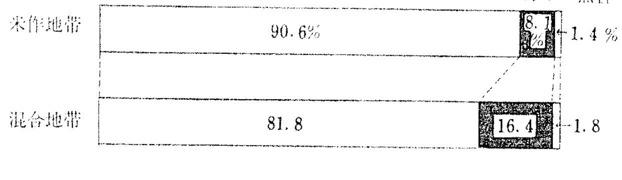
対する理解を深めること，こうした点に関する要請が強い。このことは，農業経営に対する要請と深く関連すると考えられる。農業を狭い生活空間のなかだけで考えるのでは不十分だという認識が，次第にできあがりつつあることの反映だと考えられる。

2　農業青年調査の結果

§1　農業就職の動機と経路

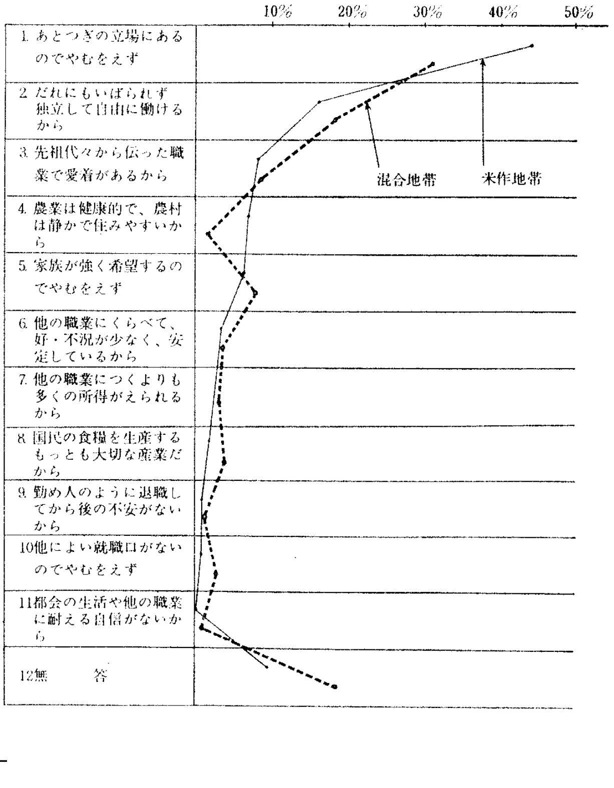
Iでも述べたように，この調査の対象となった地域では，農業規模は全国平均と比較してかなり高い。したがって青年労働力に対する期待はきわめて高いと想像される。青年の大部分は，中学校か高校を卒業するとただちに農業に就き，他の職業を経験する者の比率は低い。この傾向は混合地帯よりも米作地帯に顕著で，米作地帯では，卒業後農業以外の職業についたことのあるものは8.1%，混合地帯ではその倍の16.4%となっている。またその期間を見てみると，大部分は2～3年程度で，混合地帯では5年，6年，8年といったものを散見する程度である。今日，一般的傾向として，一旦農業以外の職業につき，やがて帰農してくる，いわゆる環流型といったものがあるとされているが，我々の調査ではこの数はごくわずかで，ただ混合地帯に若干見られる程度である。

第11図　学校をでてから農業以外の職業についたことがありますか



以上のように，大部分の青年は学校卒業と同時に農業につき，それ以来ずっと農業を継続している訳であるが，それでは，いかなる理由で農業に従事するようになったのであろうか。この農業についた動機をたずねた質問に対する解答状況が第12図に示されている。この質問で最も多かった回答は，「あとつぎの立場であるのでやむをえず」というもので，全体の37%（米作地帯では44%，混合地帯では31%）がこう答えている。このことから考えると，農業の相続が，広い範囲にわたる職業選択の結果として行なわれるのでなく，長子相続といった伝統的な形によっていることの反映と考えられる。この項目は全体の約4割のものが選んでおり，その他の項目よりも群を抜いて選ばれる率が高い。この他，消極的動機をひろって行くと「家族が強く希望するので，やむおえず」という項目が6～8%程度,「他によい就職口がないのでやむおえず」という項目が1～2%程度，さらに「都会の生活や他の職業に耐える自信がないから」といった項目をあげる者は皆無に近い。このように消極的動機をあげた者を合計すると，全体の46%（米作地帯51%，混合地帯42%）になるが，その大部分は，「あととりであるため」か，あるいは「家族の強いすすめによる」といったものによって占められている。これに対して，何らかの積極的動機をあげる者もかなりいる。例えば「だれにもいばられず，独立して自由に働けるから」という項目は2番目に多くあげられる項目で，全体の17%（米作地帯16%，混合地帯18%）がこれをあげている。このように一部ではあるが，農業という仕事の独立性に魅力を求めて，積極的に農業を選択した者もいると考えられる。またこのような積極的動機をあげる者は，全体の39%いるが，それぞれ農業のどこに価値を認めるかという点になると，きわめてバラエティーに富んだ姿を示すことになる。農業の独立性に価値を求める者については，すでに述べたが，この他にも「先祖代々から伝わった職業で，愛着がある」というもの8%程度，「農業は

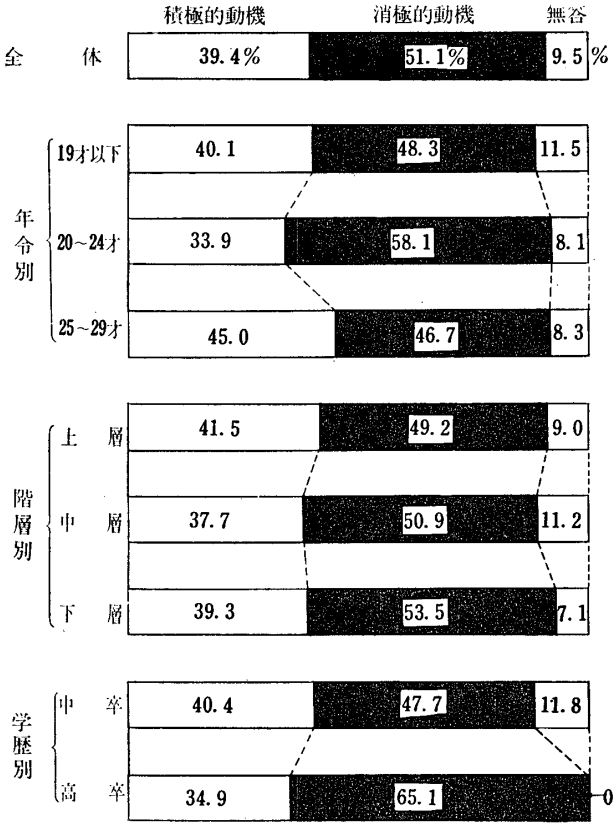
第12図　農業選択の動機



健康的で，農村は静かで，住みやすいから」と答える者，米作地帯で７％，混合地帯で２％，「他の職業にくらべて好不況が少なく安定しているから」というもの３％，この他，所得の点に農業の有利性を求める者，国民生活の基礎的産業である点に誇りを求める者，退職後の不安がないことに価値を求める者など，さまざまである。

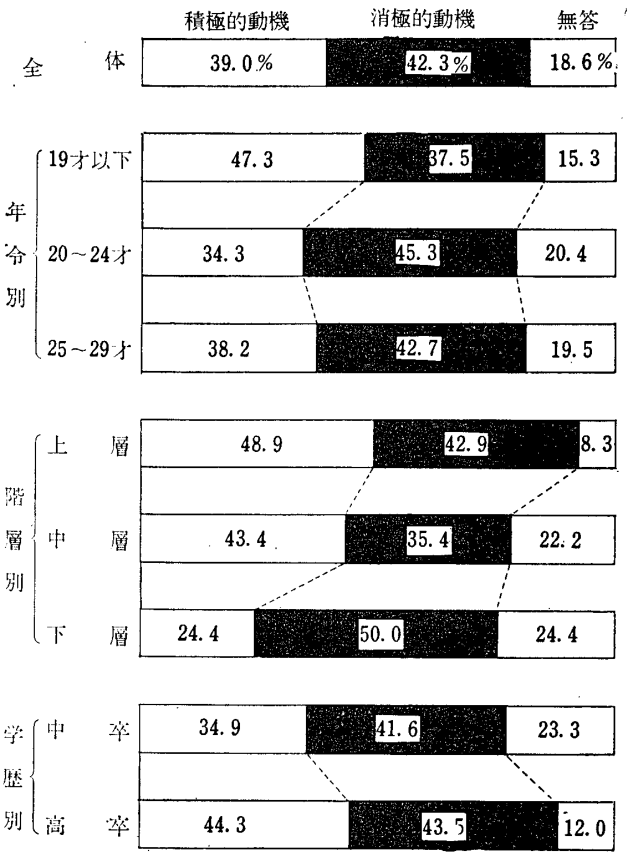
それでは，こうした積極的動機をあげる者と消極的動機をあげる者とが，どの様な点でことなるのか，その背景を見ることにする。第13図は米作地帯の場合で，年令別，階層別，学歴別に，動機の性格が変化するかどうかを見たものであるが，これからもわかるように年令別に

第13図　農業選択の動機（米作地帯）



よる差，階層別による差はほとんど認めがたい。学歴別に見た場合に，若干高卒グループで消極的動機をあげるものが，多いように思われる。また第14図は同様のことがらを混合地帯について見たものである。混合地帯の場合には，米作地帯に比して，若干の関係が見うけられる。まず顕著な傾向として，階層別に見た場合，階層が低くなるにつれて消極的動機をあげるものが多くなり，積極的動機で農業についた者の比率が極端に減少する。つまり，上の階層では積極的動機を示す青年が50％近くいるのに，下の階層を見ると，その半分の24％にすぎない。これに対して，消極的動機をあげるものは，増加し，それに更に「わからない」と考えるものの比率も増加している。次に学歴別に見ると，ここでは米作地帯と

第14図　農業選択の動機（混合地帯）

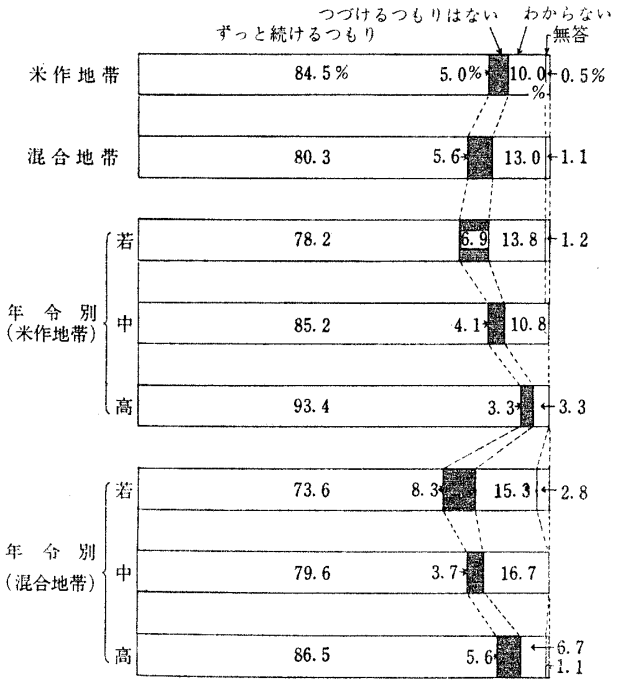


ことなって，中卒者よりも，むしろ高卒者の方に積極的動機を示すものが多くなっている。つまり，米作地帯では高卒者の方が比較的に消極的動機を示す割合が多くなっているが，混合地帯では逆の関係が見られる。このことから考えると，米作地帯では階層が低いと云っても，かなりの経営規模を持っているのに，混合地帯では下の階層では２町未満のものがかなり多く，こういう階層の農業青年の場合には，諸々の理由から，やむおえず農業につく傾向が多いということを反映していると考えられる。

また，今後も農業を継続して行くつもりかどうかを問うた結果が第15図である。全体の約83％は農業を継けると答えているが，「つづけるつもりはない」とはっきり答えている者が，それでも５～６％は見られ，そのうえ12％程度のものは「わからない」といった不明確な回答を与えている。第15表からもわかるように，当然のこととして，年令が高くなるにつれて，農業を続けると答える者の比率が高くなって行くのであるが，それでも25才以上の年令層にも，継続意志なしと答える者，あるいは

「わからない」とする者が，米作地帯で７％，混合地帯では12％もいることは注目に価いする事実であろう。

第15図　農業に対する継続意志



まとめ

1　大部分の青年は学校卒業と同時に農業についており，他の職業の経験を持っている者はきわめて少ない。

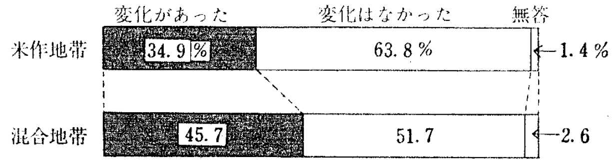
2　農業への就職は，大部分があとつぎのためやむおえず，とか，家族の強い希望のためといった形で決定されており，広い範囲での職業選択のなかで積極的な形で農業が選ばれる場合は，少ないと考えられる。しかし，農業に積極的な意義を認めているものもかなりあるが，農業のいかなる面にその積極的意義を認めるかは多様である。

3　経営規模が２町にたっしないような階層の場合，青年が積極的な形で農業を選択する例が顕著に減少し，やむおえず農業につくに至ったとする者の数がきわだって増加する。

§２　農業技術・農業経営の変化

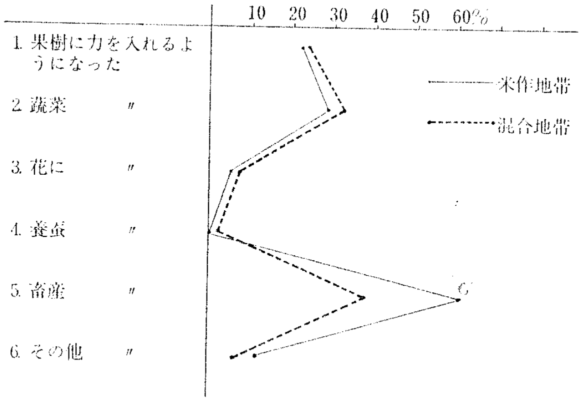
今日，日本の農業は米作中心から，果樹・野菜・畜産といった新しい分野の出現とともに，いわゆる選択的拡大の時期に移行しつつあるといわれている。この調査の対象地域は日本でも有数の穀倉地帯であり，しかも，今日の農業においては，最も安定性の高い米作を中心としているため，米作技術の面での変化はかなりあるとしても，作物における変化，それにともなう農業経営そのものにおける変化は，それほど多いとは予想しがたいのである。しかし，過去５年間に作るものに変化があったかという我々の質問に対して，米作地帯でも35％のものが，混合地帯では46％のものが変化があったと答えている（第16図参照）。この作物における変化は，階層別に見ても顕著な開きは認めがたく，したがって，こうした変化は特定階層だけでなく，すべての階層におしなべておきたものと考えられる。

第16図　過去５年間における作物の変化



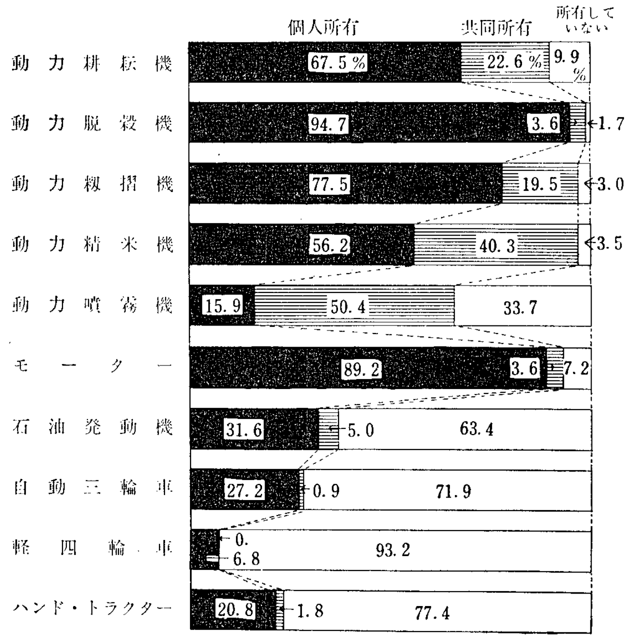
それでは，どのような変化がおきたのか，どのようなものに力をそそぐようになったか，この点を見たのが第17図である。これによると，米作・混合両地帯とも，畜産に力を入れるようになったと答えている者が一番多く，とくに米作地帯では，変化があったと答えたもののうち，61％がこの畜産面での変化をあげている。また，これに次いで多いのは，蔬菜で米作地帯では29％，混合地帯では32％のものが，蔬菜に力を入れるようになったと答えている。また，果樹に力を入れるようになったと答えている者も，22〜23％程度見られ，この三つが，中心的な変化だったと考えられる。

第17図　何に力を入れるようになったか（変化があったと答えたものを100とした場合）

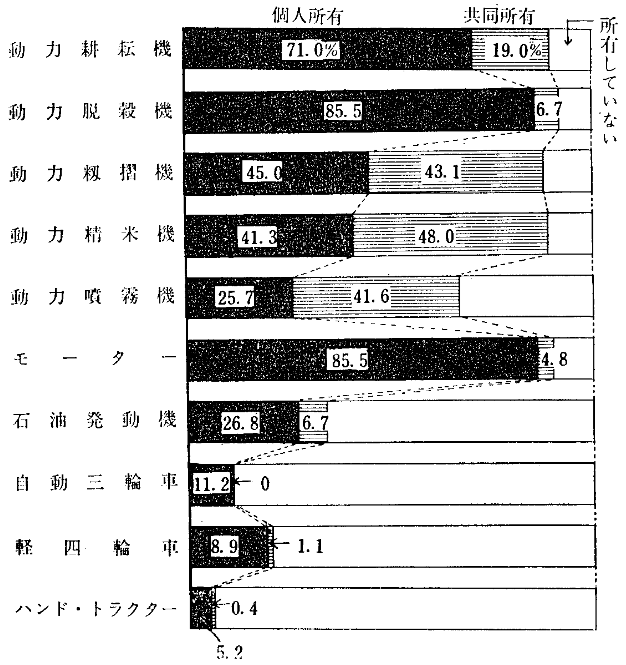


次に，農業機械の滲透の状況について見ることにする。我々の調査地帯は戦前からかなり高い水準の農業技術をもっていたと想像されるが，戦後における農業の機械化の流れは，こうした戦前での水準のうえに，更に積み重ねられる形で，滲透していったと考えられる。第18

第18図　農機具所有率（米作地帯）



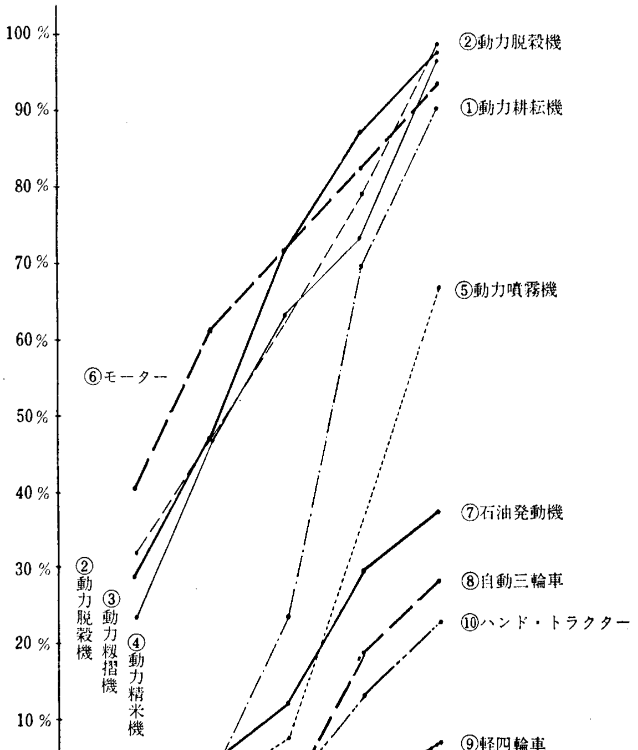
第19図　農機具所有率（混合地帯）



図，第19図は米作地帯，混合地帯での農機具の所有率を示したものであるが，まず米作地帯からみて行くことにする。我々が示した10の農機具のうち，最も高い個人所有率を示すのは動力脱穀機で，95%のものが，個人で所有している。次いではモーター（89%），動力籾摺機（76%），動力耕耘機（68%），といった順になっている。また共同所有率について見るならば，動力噴霧機は50%，動力精米機40%，などが目立っている。個人所有共同所有のいかんを問わずに所有率についみるならば，動力耕耘機，動力脱穀機，動力籾摺機，モーターなどはすでに90%以上の普及率を示しており，ほとんどの農家が所有していることを示している。これに対して，自動三輪車（28%），ハンド・トラクター（23%），軽四輪車（6.8%）などは，まだその普及の程度はそれほど高くはなっていない。この傾向は混合地帯の場合とほとんど変化なく，やはり，耕耘機・脱穀機等の基本的な農機具は90%以上の普及率を示している。

以上は現在時点での普及率であるが，それでは，これらの農機具が何時ごろから導入されるにいたったのかを見たのが，第20図である。この図から見られるように，

第20図　農機具の導入時期



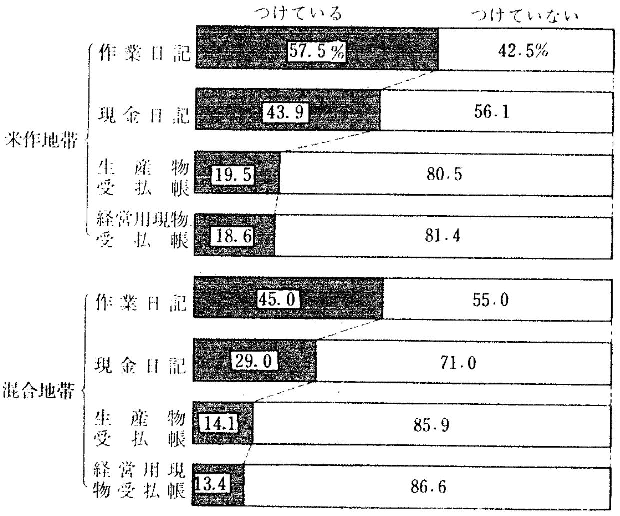
普及の状況に大きく云って三つのタイプのあることがわかる。まず，第1にモーター，動力脱穀機，動力籾摺機，動力精米機などは，すでに昭和20年以前からほぼ20%から40%程度普及していたのであるが，それが年々，次第に普及を重ねて行き，現在ではほぼ90%以上の普及率を見るにいたっている。これが第1のタイプである。第2は，動力耕耘機・動力噴霧機の類で，これは，昭和20年ごろには皆無であったのが，その後急速な普及をはじめ（とくに昭和30年以後），現在ではほとんど飽和状態に達したタイプのものである。第3のタイプは，自動三輪車，ハンド・トラクター，軽四輪車類でこれも昭和20年ごろは

皆無の状況であったものが，昭和30年ごろから次第に普及しはじめ，現在ではほぼ10％から40％程度の普及状況に達し，これからもさらに増加する可能性をうちにふくんでいるものである。

以上のように，動力脱穀機，モーター，動力籾摺機，動力精米機，動力耕耘機などはすでに飽和状態に達しており，それに対して，軽四輪車，ハンド・トラクター，自動三輪車，石油発動機などは，次第に増加する傾向にある農機具である。

次に，農家経営のための基礎ともなる帳簿類が各農家でどの程度つけられているかを見たのが第21図である。この調査では帳簿類の代表的なものとして，作業日記，現金日記，生産物受払帳，経営用現物受払帳の四種をとりあげ，それをつけているか，どうかをたずねた。この四種はいづれも，新潟県農林部・県教育委員会・NHK新潟放送局の共同で行なっている「ラジオ農業学校」のテキストのなかにとりあげられているものである。これ

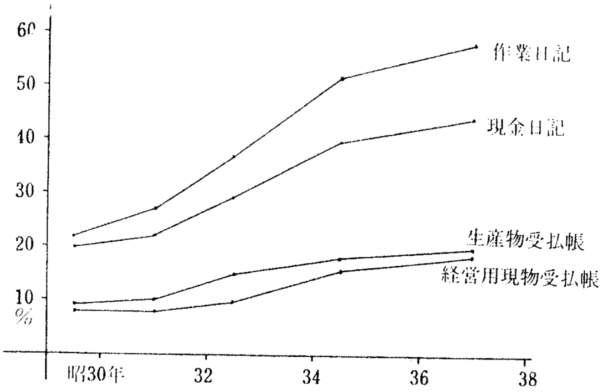
第21図　帳簿をつけている割合



によると，最も多くの農家でつけられているのは，作業日記で，米作地帯では全体の58％が，混合地帯では全体の45％がつけているとされている。それに次いでは，現金日記で，米作地帯では全体の44％が，混合地帯では29％がつけている。これに対して，生産物受払帳とか経営用現物受払帳などになると，つけているものが少なく，まだそれほど滲透しているとは考えられない。つまり，現在の段階では，作業日記，現金日記あたりが中心でそれ以上の帳簿類をつけているのは，まれだということになろう。また，この帳簿類をつけているかどうかを階層的にみてみたのであるが，ほとんどの場合，差は見られなかった。また，被調査者の学歴との関連を見ると若干高校卒の場合には率が高くなる傾向が見られる。とくに，高校卒業の青年がその家の農家経営の中心となっている場合には，その率が高くなる傾向が見られ，こうした新しい知識・あるいは農業経営のかまえをもった層が広がるにつれて，こうした経営面での合理化が進行して行くものと想像される。

次に，第22図は，これらの帳簿をいつごろからつけはじめたのかを見たものである。これによると，作業日記現金日記などは，昭和30年以前からつけていたものが，20％程度いたのであるが，その後とくに昭和31年ごろから昭和35年ごろにかけて，次第につけるものがふえてきて，現在では，60％とか40％程度の普及率に達したということがわかる。

第22図　帳簿をつけはじめた時期



これに対して，生産物受払帳，経営用現物受払帳などは，昭和30年以前から10％程度のものがつけており，その後現在までに，さらに10％程度が新たにつけられるようになり，現在の20％程度の水準に達するようになったと考えられる。

まとめ

1　全体の約30～40％のものが，過去5年間の間に作物に変化があったと答えている。主として畜産・蔬菜・果樹に以前よりは力をそそぐようになったと答えている。

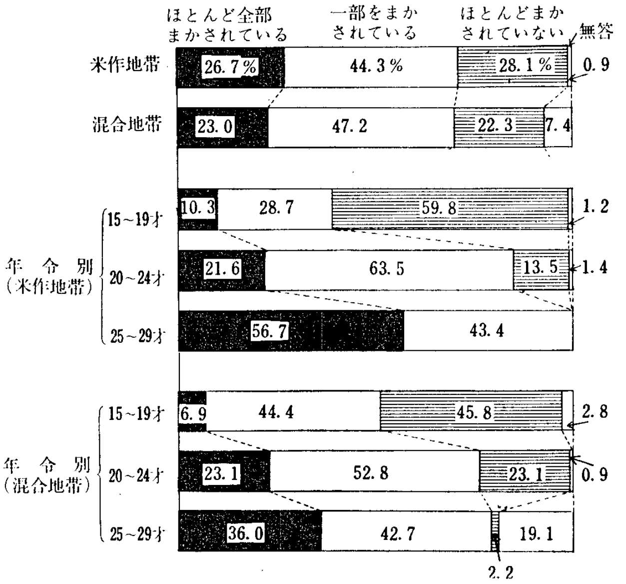
2　農業機械の滲透はかなり高く，すでに動力脱穀機，動力耕耘機，動力籾摺機，モーター，動力精米機などは飽和状態に達しており，これからは，自動三輪車，四輪車が滲透する傾向にあるものと考えられる。とくに昭和25年から30年にかけての導入状況はめざましいものがある。

3　また農家経営の基礎となる帳簿類をみると，作業日記・現金日記などが50％程度つけられている程度，それ以外の帳簿はほとんどつけられていない。これも昭和31年ごろから35年にかけて普及しはじめたように見うけられる。

§ 3　農業経営における青年の役割分担

農業青年が実際上，一家の農業経営のうち，どの部分までの実権をにぎっているのか，農業経営のうち青年にまかされているのは，どの程度であるのか，次にこのような点を見ることにしたい。全体的に云って，第23図からもわかるように，米作地帯でも混合地帯でも全体の4分の1程度の青年は農業経営のほとんどすべてをまかされており，これらの青年の場合には，一家の農業経営の実権はほとんど若い世代に移行しているということがで

第23図　農業経営をどの程度まかされているか

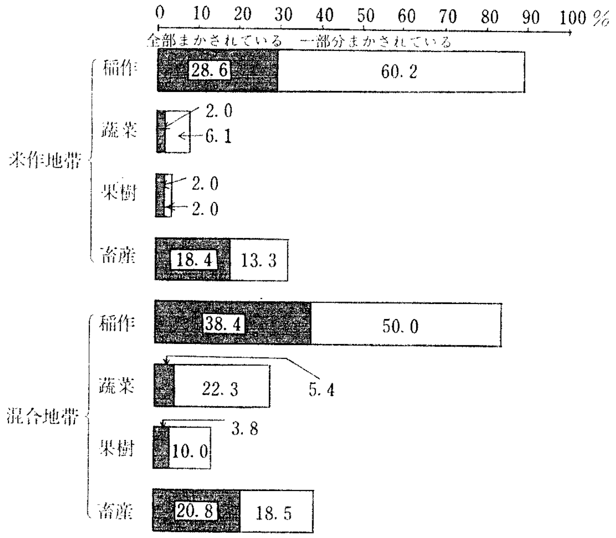


きよう。これに対して，ほとんどまかされていないと答えた青年も全体の4分の1程度見られ，残りの半分は経営の一部分だけをまかされていると答えている。

しかし，この農業経営上の実権をどの程度にぎっているかは，当然のことながら，その青年の年令と関係してくる。第23図からもわかるように，米作地帯でも混合地帯でも，年令が高くなるにつれて，「ほとんど全部まかされている」と答える者の比率が高くなっている。例えば米作地帯をとると，20才未満でほとんど全部まかされていると答えたものは，わずか10％，それが20才以上25才未満の層になると22％に増加し，25才以上の青年層では57％のものが，ほとんど農業経営の実権をにぎっている。同じことは混合地帯にも見られ，とくに25才以上になると，「ほとんどまかされていない」と答えるものは皆無の状態になる。このように見てくると，20才未満の青年の場合では，農業経営の実権はほとんど親あるいは兄たちがにぎっており，農業青年は，ごく一部分を分担するといったものが支配的であるが，それが20才から25才未満の層になると，次第に一部分にしろ農業経営をまかせられる場合がふえ，25才以上になると，半分近くのものが農家経営の主体になるといった過程が，ここからもうかがえる。つまり単なる農業労働の補助者という地位から，農業経営の実際的運営者への移行が，ここにはっきりあらわれている。ただ，米作地帯と混合地帯の分布を比較してみると，混合地帯ではやや，この実権の移行が遅れる傾向がうかがえる。つまり，25才以上の青年の場合，米作地帯では57％のものがほとんど農業経営の実権をにぎっていると答えているのに対して，混合地帯では，こう答えたものは36％でかなり米作地帯より低い。またこれとどのように関係するのかわからないが，この層だけとびぬけて，無答が多く，他の年令層では2％程度なのに，19％もいる。いずれにしても，この混合地帯の25才以上の層は，特殊な事情があるのではないかと想像される。

それでは，青年たちは農業経営のなかでどのような分野をまかされているのか。いいかえれば青年が主体的に活動できるのはどのような分野であるのか。この青年たちの分担分野を調べることは仲々困難であった。一言に分担といっても，畜産とか果樹とかという特定分野について，一切をまかされているといった型があるかと思うと，稲作・蔬菜・果樹などの各分野を通じて，肥料の配合，散布をまかされているといった特定技能についてのまかされかたがあったり，種々様々であるからである。そこで，我々は先の質問に対して一部をまかされていると答えた者，米作地帯の98人，混合地帯の130人を対象として，いかなる分野を，またいかなる仕事をまかされているかを調べることとした。つまり，ここでは，どのようなまかされかたをしているかを見るために，分野として，稲作・蔬菜・果樹・花・養蚕・畜産の6分野を設け，さらに各分野について，「設計と計画」（稲作であれば品種の選定，肥料の選定などの計画，畜産であれば同じく品種の選定・飼育の選択など設計・計画といった部分。）と「肥料・栽培・飼育などの管理」（稲作であれば，病虫害防除，水のかけひき，施肥といった部分，畜産であれば飼料をやったり，家畜の手入れなど）と，「出荷や販売」の三部門を設け，それぞれの分野・部門をどの程度まかされているかをたずねたのである。まず分野についてみると，第24図が示すように，稲作の全部または一部をまかされているというものが最も多い。米作地帯では29％のものが稲作について，設計・管理・出荷販売を全部まかされていると答えている。この29％の青年の場合には，自分は稲作を，家族の他の者が他の分野を分担するという形をとっているものと考えられる。また稲作に次いで多いのは畜産である。最近の傾向として，鶏・豚などを若い青年に全部まかせ，購入から販売

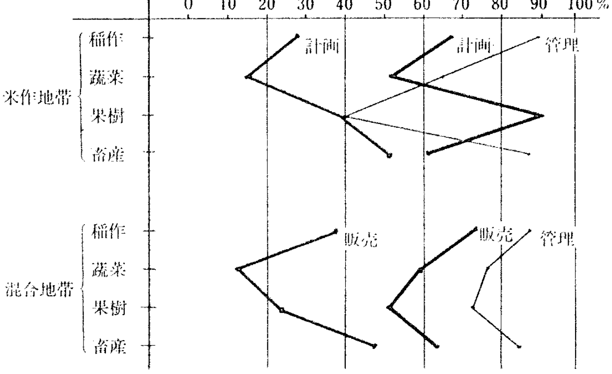
第24図　どのような分野をまかされているか



にいたる全過程を青年の自主的な運営にゆだねる例がでてきたとされている。この調査によると，約20％程度のものが，畜産は全部自分にまかされていると答えている。これを全調査対象に対する比率からいうと，８～９％程度にあたる。この他の蔬菜・果樹の場合は表に示すように，かなり低く，花・養蚕については皆無となっているので，図からもはぶいてある。

次いで，計画・管理・販売といった部門別についてみると，第25図のように，全体的にいって，青年たちにまかされる程度の多いのは，管理部門で，次いで，計画部門となっており，販売部門が青年にまかされているという場合は，その数がかなり低くなる。つまり，具体的にいうと，稲作の場合には，病虫害防除，水のかけひき，施肥といった部門，畜産であれば飼料を与えたり，家畜のせわをしたりといった実際的な作業部門が青年の担当する部門であって，売買の実権はやはり，その家の主人に与えられているといった姿がこの辺からも，うかがえる。

第25図　どのような分野をまかされているか



まとめ

1　20才未満の青年は大部分，一家の農作業の面での補助労働者としての位置しかしめていないが，20才から24才ごろにかけて，自分の責任において行なう部分が増加し，25才以上の層になると，大半のものが，一家の農業経営の主体となるといった移行の傾向が見られる。

2　まず部分的にしろ，青年たちが主体的に経営のなかに参加するようになるのは，主として，計画・管理の部門からで，販売面での実権をにぎるようになるのは，かなりあとになってからのことと予想される。つまり，特定の農業技術の応用がまず青年にまかされるようになり，その部分が次第に拡大して行き，やがて販売・経営といった面までが青年の仕事のなかにくみこまれ，一家の農業経営の主体となるといった過程をとるものと想像される。

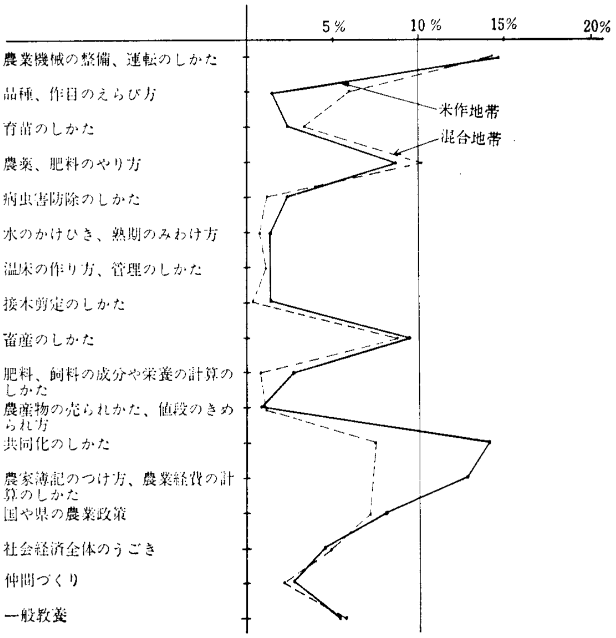
3　青年たちにまずまかされるようになるのは，まず稲作のうちの特定部分，とくに計画・管理といった面，さらには畜産全体とかそのうちのある部分，とくに管理部門といった面からである。また，畜産を全部青年にまかせるといった例も若干見られるが，蔬菜のようにその販売面に複雑性をともなうものを全部まかせるといった傾向は少ないようである。

§4　農業青年の教育要求

以上，§2および§3で，農業青年が現在直面している農業技術・農業経営の変化・また一家の農業労働のなかでの青年の役割について述べてきたのであるが，ここでは，こうした条件におかれた農業青年がいかなる教育要求をもっているのか，いかなることを今後学習したいと欲しているのか，このような点を見て行くことにしたい。この調査では，やや煩雑とは思われるが，17の項目をあげ，現在とくに学習したいと考えているものが，何であるかを問うてみた。その結果が，第26図であるが，この調査では，「農業機械の整備，運転のしかた」からはじまって，「品種・作目のえらび方」「育苗のしかた」「農薬・肥料のやり方」といった，主として農業労働に必要な諸技術にあたる項目９つ，それについで，「肥料・飼料の成分や栄養の計算のしかた」や「農産物の売られかた，値段のきめられ方」や「共同化のしかた」や「農家簿記のつけかた，農業経費の計算のしかた」などの農業を経営して行く上で必要な知識にあたる項目７つ，そのうえに，これら農業技術・農業経営と直接的には結びつかないが，社会人として必要な「一般教

養」の合計17項目を示し，そのうちとくにどのようなものを勉強したいかをたずねたのである。その結果によると，まず全体のなかで最も多くの青年の選んだ項目は，米作地帯・混合地帯ともに，「農業機械の整備・運転」という項目である。これからみても，次第に滲透しつつ

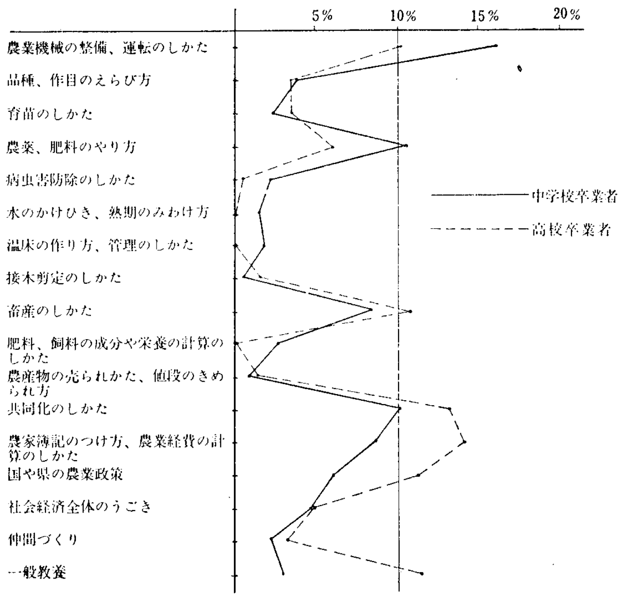
第26図　何を学びたいか



ある各種の農業機械に関する知識・技能を求める要求がかなり強いということがいえよう。この他，農業の技術に関する項目をみて行くと，「農薬・肥料のやり方」「畜産のしかた」といった項目が比較的多くの青年にあげられている他，あとの項目を選択する者の数はきわめて少ない。これに対して、特徴的傾向とみられるのは，「共同化のしかた」「農家簿記のつけかた，農業経費の計算のしかた」「国や県の農業政策」といった，個々の農業技術に関する項目よりも，農業経営に関する項目がかなり多くの青年によって，選ばれており，とくにその傾向が米作地帯においてきわめて顕著だという点は注目にあたいする。つまり，米作地帯について云うならば，第一位に多くあげられる項目はさきに述べたごとく，農業機械についての項目であるが，それと同じぐらいに多くの者が「共同化のしかた」「農家簿記のつけ方，農業経費の計算のしかた」といった，農業経営や組織に関する項目をあげている。つまり，これらの青年の場合，学習意欲の対象は，個々の農作業に必要な知識・技能というよりも，一つの企業としての農業を経営して行くうえで必要な知識なり，かまえというものに学習の意欲が向けられているのである。こうした点からみて，農業青年の教育要求は，単に農業技術的な面だけではなく，農業経営のための基礎的な見方・知識・組織といった点に向けられていることを，見落してはならない。

次に，こうした教育要求が，農業青年の学歴によってどう変化するかを見たのが，第27図である。まず，中卒者の一番多くあげる項目は，「農業機械の整備・運転のしかた」という項目であり（16%），それに次いで，「農薬・肥料のやり方」（11%）となっている。それに対して高卒者が一番多くあげる項目は「農家簿記のつけかた，農業経費の計算のしかた」（14%）であり，次

第27図　何を学びたいか(米作・混合の合計)学歴別

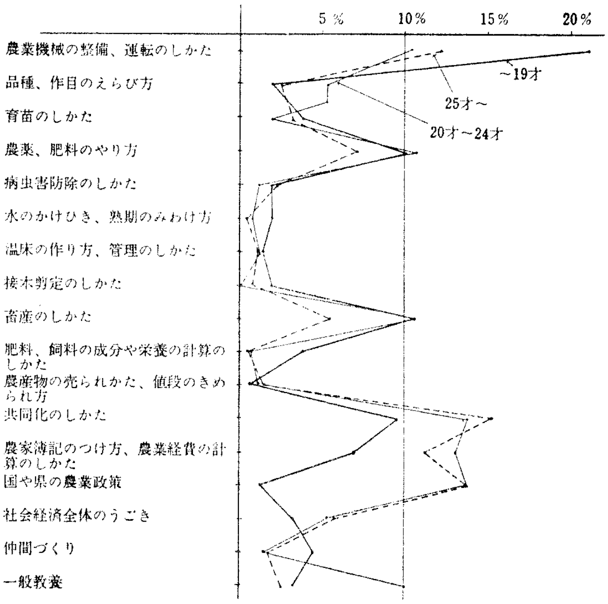


いでは「共同化のしかた」（13%），さらにそれに次いでは「一般教養」（11%）と「国や県の農業政策」（11%）という順になっている。中卒者と高卒者のプロフィールを見ていって，目立った差の見られるのは，まず，「農業機械の整備・運転」で，中卒者は高卒者よりも有意に多くこの項目をあげている。また，「農薬・肥料のやり方」という項目でも，中卒者が高卒者よりも多くこの項目をあげている。それに対して，中卒者よりも高卒者が多くあげているのは，まず「共同化のすすめ方」という項目で，これに関しては，高卒者がかなり強い要求を示している。また，「農家簿記のつけかた，農業経費の計算のしかた」や「国や県の農業政策」という項目も，高卒者が中卒者以上に高い要求をしているのが目立っている。さらに，「一般教養」という項目の場合にも，高卒者は中卒者とくらべてかなり高い要求を示している。こうした傾向を見てくると，全体的に云って，中卒者の関心は農業技術に向けられているのに対して，高卒者の場合には，農業経営的な側面ないしは，社会人としての一般的教養といった面についての教育要求が高

い。中卒者と高卒者との間には，こうした教育要求の内容に若干のちがいがみられる点に注目する必要があると考えられる。

次いで，第28図は，年令別に見た場合，教育要求がどう変化するかを見たものである。全体的に云って，年令による差の顕著な項目は学歴別の場合とほぼ似ていて，「農業機械の整備・運転のしかた」「共同化のしかた」

第28図　何を学びたいか(米作・混合の合計)年令別



「農家簿記のつけ方・農業経費の計算のしかた」「国や県の農業政策」「一般教養」といった項目である。例えば20才未満の青年の場合，最も選ばれる率の高い項目は農業機械に関する知識・技能で，全体の21％がこの項目をあげており，それに次いで「畜産のしかた」(11％)「農薬・肥料のやり方」(10％) といった順になっている。それに対して，25才以上の青年になると，第一位は「共同化のしかた」(15％)，「国や県の農業政策」(14％)，「農家簿記のつけかた・農業経費の計算のしかた」(11％) といった順になっている。つまり全体的に云って，20才未満の青年の場合には，農業技術に関する教育要求が高いのに対して，20才以上の青年の場合には，農業経営に関する教育要求が高くなるのが一般的傾向である。また，「一般教養」に関する要求の最も高いのは20才から25才までの青年たちで，それ以下の青年層よりも，またそれ以上の青年層よりもきわだって高い要求を示している点は，この年令層の特徴となっている。

ま　と　め

1　農業青年の教育要求がどのような内容を持っているかを見ると，まず農業技術に関する学習意欲を強く持っていことは否定できないが，それと同程度で，また農業経営に必要な基礎的知識が要求されている。

2　この傾向のいちじるしいのは高卒者群で，この場合には，「農業簿記のつけかた，農業経費の計算のしかた」とか「共同化のしかた」「国や県の農業政策」といった農業の経営に関する側面の教育要求の方が，農業の技術よりも多く要求されている。また，同じく高卒者の場合には，こうした労働生活・生産活動とは一応直接的関連をもたない一般的教養に対する要求が強く出されている。

3　年令別に見た場合，20才未満の青年ではやはり農業技術に関する教育要求が強いが，25才以上の青年になるとこうした面の要求が減少し，それにかわって経営面に関する学習要求が多くなる。

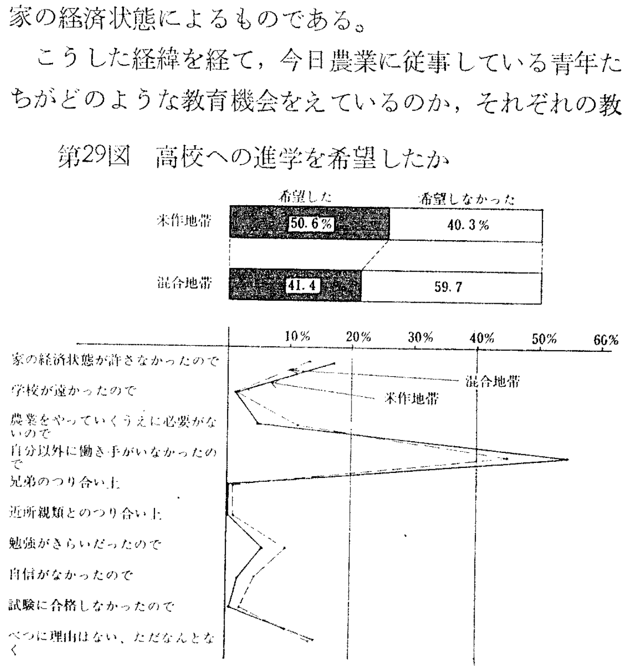
§5　農業青年の教育機会

すでに述べたように，この調査の対象となった農業青年の約3分の2は中学校卒業者で，残りの3分の1が，定時制または全日制高校の卒業者である。またこの3分の2の中卒者のうち，約半分は高校への進学を希望しながら，はたせなかった青年たちである。その高校進学をはたせなかった理由の大部分は，「自分以外に働き手がいなかった」か，あるいは「家の経済状態がゆるさなかった」か，あるいは「とくに理由はない，ただなんとなく」というものである (第29図参照)。

また，高校卒業者のうち，大学への進学を希望したものは，ほぼ15％程度で，いいかえると全対象の約5％は大学への進学を希望しながら，果せなかった者である。大学進学を断念した理由は，大部分が働き手の問題か，家の経済状態によるものである。

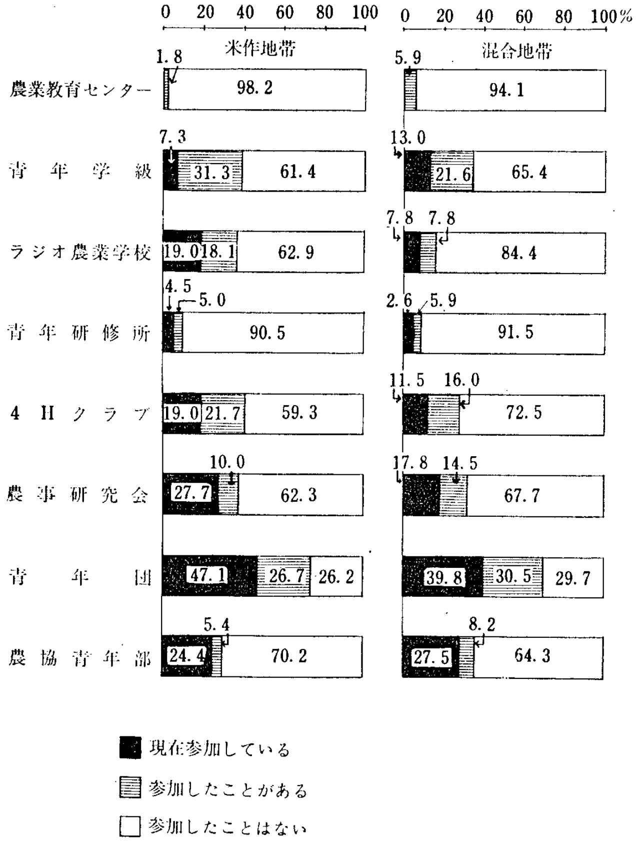
こうした経緯を経て，今日農業に従事している青年たちがどのような教育機会をえているのか，それぞれの教

第29図　高校への進学を希望したか



育機会が農業青年にいかなる点で貢献しているのか，こうした点をここでは問題にしたい。まず第30図は，農業教育センターをはじめとして，8つの教育機関・集団・施設への農業青年の参加度を示したものである。現在参加している者，過去に参加したことのある者を合計した参加の度合を見ると，最も高いのは青年団で，70％強の農業青年が現在参加しているか，過去に参加していたと答えている。それに次いでは，青年学級・ラジオ農業学

第30図　教育機関への参加度

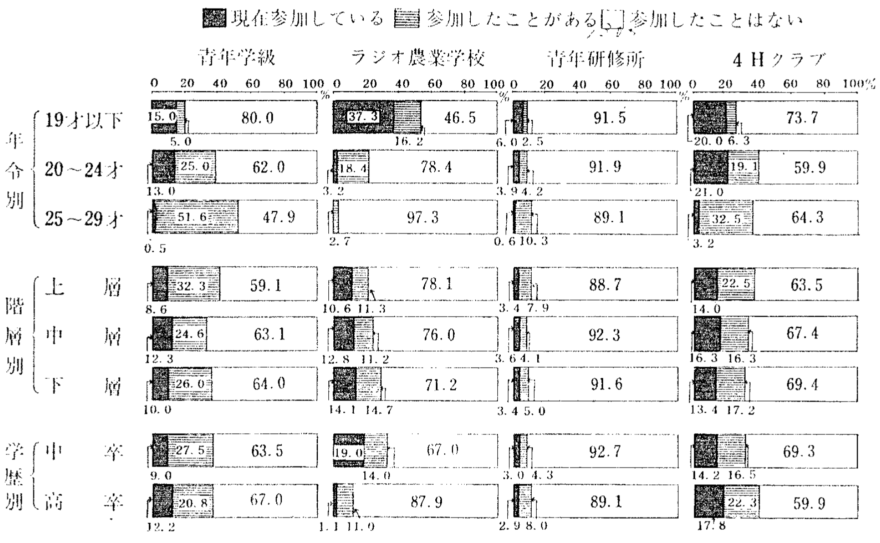


校・4Hクラブ・農事研究会の4つがあげられるが，これらの機関・集団には，40％程度の農業青年が現在参加しているか，過去に参加していたと答えている。これに対して，ごく最近できた農業教育センターは当然のことながら，まだ多くの参加者を生むに至っていない。また青年研修所にもほぼ10％程度のものしか参加していない。

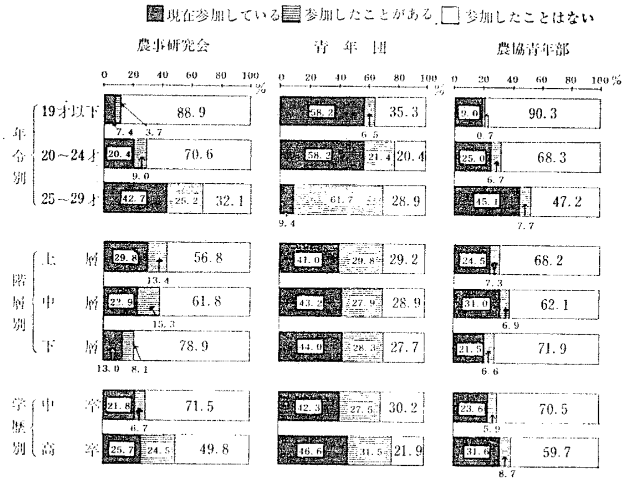
こうした集団ないし機関への参加は，当然のことながら，年令や学歴によって変化するものと予想される。第31図，第32図は，こうした参加度を年令別，階層別，学歴別に示したものである。まず年令別に見た場合，分布の状況から大きくわけて，年少青年を中核とした集団・機関と，年長青年を中核としたそれとに分けることができる。例えば青年学級をとると25才以上の青年のうち約50％がかって参加したことがあると答えているが，現在参加していると答えたものはごくまれである。また20才から25才未満の年令層をとってみても，現在参加している者と，参加経験者とはほぼ1対1である。それに対して，20才未満の層では，参加経験者は少なく，現在参加者が16％程度みられる。このようなプロフィールから判断すると，青年学級は，ほぼ20才未満の青年層と，20～25才年令層のものが，中核となった教育集団で，25才以上になるとほとんどの青年がそこから卒業して行く集団だと見ることができる。同様の傾向は4Hクラブや青年団の場合にも見られ，現在参加している者の大部分は25才未満の青年たちで，25才以上になると，ほとんどの青年たちがもうすでにそれらの集団から卒業してしまっている。これに対して，25才以上の青年を中核とする集団は農事研究会である。農事研究会には，20才未満の層の7％，20～24才層の20％と次第に参加している者がふえて行き，25才以上の層では40％が現在参加しており，約20％のものが参加経験者となっている。こうした点を見ると，農事研究会は25才以上の青年が中核となった集団であるが，それでもそのなかに20才～25才層の約20％が吸収されているような集団である。これと同様の傾向を示すのは農協青年部で，25才以上の青年の約45％がこれに現在参加している。また20才未満の層，20～24才層でもそれぞれ20％強のものが参加しており，中核が25才以上の青年ではあるが，その覆っている年令層はかなり広いと考えられる。以上の諸団体・機関とくらべて，ごく最近できたラジオ農業学校は20才未満の青年によく普及している。つまり20才未満の青年の約40％は現在参加していると答えており，かつて参加していた者も10％程度いる。20才未満の青年の参加度を見ると，このラジオ農業学校は，青年団についで高い参加度を示している。

次に学歴別にこの傾向を見てみよう。中卒者と高卒者とを比較してみても，全体的にその参加の度合に大きな差は見られない。若干差の見られるものをひろって行くならば，ラジオ農業学校・農事研究会の場合である。つまりラジオ農業学校の場合，高卒者で現在参加しているものは皆無に近く，またこれまでの参加経験者も10％程度である。それに対して，中卒者では現在参加しているものが20％近く，これまでに参加したことがある者も14％いる。この点からみても，ラジオ農業学校の利用者の主体は中学校卒業者であるといえる。それに対して，農事研究会は現在の参加者は中卒者で23％，高卒者で26％とほとんど差はないが，これまでの経験者を見ると中卒者の7％と高卒者の25％とでかなりのひらきが見られる。農事研究会は元来特定層の青年を対象としている訳ではないという点を考えると，中卒者と高卒者との間で，自

第31図　教育機関への参加度



第32図　教育機関への参加度（続）



然とこの集団への参加にある傾向が生じるのかもしれない。

まとめ

1　農業青年全体で平均すると，一人の農業青年は平均1.5の教育機関なり団体に現在所属しており，1.2の機関なり団体にこれまで参加していたこととなる。

2　各種の集団・機関のなかで最も多くの青年が所属経験を持っているのは青年団で，次いで，農事研究会・4Hクラブ・ラジオ農業学校・青年学級といったものがあげられる。

3　各種の集団・機関は年令集団としての性格が濃く，その経営規模・学歴に応じた集団参加という形態が少ない。

4　例えば，20才未満の青年を中核としたものとしてはラジオ農業学校，25才未満の層が中核で，それ以上の青年はほとんどがぬけて行く集団としては，青年学級・4Hクラブ・青年団など，25才以上の層が中核となっていて，それ以下の青年の参加が低いものとしては，農事研究会・農協青年部などがあげられる。

5　いずれにしても，年令集団としての性格が濃いが，最近では，中卒者を主なる対象とした機関としてラジオ農業学校などがあらわれはじめている。これは，20才未満の中卒者の約50％を覆っている。

3　ま　と　め

以上，農業青年指導者と農業青年の意見なり希望なり実態を各側面について調べてきたのであるが，ここでもう一度，われわれの当初の調査目標である「農業青年の教育組織はいかにあるべきか」という問題と，「農業青年の教育内容はいかにあるべきか」という二つの基本的問題に立ちかえり，この点についての一応の結果を提示することにしたい。

まず最初に，農業青年教育の教育内容いかんという問題について考えてみたい。この問題に関連して明らかになった諸事実を列挙すれば次のとおりである。

(1)　青年の教育要求のありかを調べた質問から見ると，農業機械の運転・整備といった農業技術に対する学習要求もさることながら，むしろ特徴的現象は農業経営に必要な基礎知識，例えば農業経費の計算，農業簿記のつけかた，国や県の農業政策といった面に関する学習要求がかなり強い。

(2)　このことは指導者の意見にも反映されており，農業青年に系統的に教育すべきものとしては，農業経費の計算，農業簿記のつけかた，社会・経済・政治全体のうごきといった項目が，個々の農業技術にもまして多くあげられている。

(3)　これらの諸事実の示す点は，明らかに，今日では一

つ一つの農業技術の習得ということよりも，むしろ企業化しつつある農業を経営していくうえでの基礎能力が要求されるにいたっているということである。いいかえれば，機械を使う耕作者というイメージから，技術を使う企業者へという基本的な変化がそこにはあると考えられる。

(4) この問題をやや詳細に農業における世代交代のプロセスとの関連でみると，20才未満の青年においては，一軒の農家のなかでの地位は大半が補助労働者としての地位である。またこの期の青年の教育要求それ自身も，主として農業技術の習得という方向に向けられている。しかし20才から24才ごろにかけて次第に農業経営のある特定部分が青年の手にまかされるに至り25才をこえると一家の経営主体としての実権をにぎるに至る。それとともに，青年の教育要求も技術的なものから，次第に農業経営的なものに移っていく。また集団参加の状況をみても，25才未満の青年層とはちがった集団に参加するようになる。これは伝統的な年令集団の交代としての面もあるかもしれないが，やはり，25才未満の青年集団と，25才以上の青年集団とでは現実的課題がことなっていることが原因と考えられる。

(5) 以上が，一般的な形での農業における世代交代とそれと関連した教育課題の変化の実態であるが，しかし，一つ注目すべき現象がある。それは高卒者，とくに農業高校卒業者の場合である。農高卒業者の場合には，農業高校で習得した農業技術を土台として，むしろ卒業後においては，農業経営上の諸知識，さらには農業生産とは直接関連を持たない一般教養的な側面の学習意欲がかなり高い。このことは考え方によれば，高校が普及し，ほとんどの者がそこで農業技術，ないしは農業経営の基礎的学習を積めば，卒業後はもっぱらその補修，追学習に専念でき，卒業後の教育内容の中核は，むしろ社会人として不可欠な一般的教養の学習にむけられる可能性を示しているのではなかろうか。

今日，農業人口中における高校卒業者の割合は次第に増加の傾向を見せ，やがては高校卒業者が農業人口の中核部分を占める時期がくるにちがいない。したがってこうした傾向が次第に顕著になって行けば，農業青年の教育組織も，これまでとは大部ことなったものになって行くにちがいない。その時に要求されるのは，農業技術，農業経営の基礎知識についての若干の補習と，それにもまして，農業そのものを国民経済全体，国民社会全体のなかで見透しうる広いパースペクティブが要求されるに至るであろう。それではこうした資質を育成しうる教育組織とはどのようなものであるか。またその具体的教材とはいかなるものであるか，今後の問題としてこうした重要な問題が残されることになるであろう。

次に農業青年の教育組織はいかにあるべきかという問題に関して明らかにされた事実を列記するならば，次のとおりである。

(1) 農業青年のうち，65％程度は中卒者であり，全日制定時制高校の卒業者は35％程度である。そのうち中卒者の半数は高校への進学を希望しながらはたせなかった青年である。したがって全体としてみれば，3分の1は中学校を卒業し，高校進学を希望しなかった青年，3分の1は中学校卒業後高校進学を希望しなかった青年，最後の3分の1はなんらかの形の高校を卒業した青年，といった構成になる。

(2) 一方，指導者の意見によると，90％近くのものが，将来の農業後継者の基礎学歴として高校程度を希望しており，また90％の者が中学校卒業後何年かの義務教育に賛成している。ただし，どのような形態の義務教育を設けるかという段になると，ほとんど支配的意見がないのが現状である。

(3) 一方，青年の各種教育機関・施設・団体への所属状況からみると，1人平均して，1.5の機関なり施設なり団体に参加している。

(4) また指導者は農業青年に各種のさまざまな機会が開かれている事実に対して，比較的肯定的で，部分的に統合をはかることをしても，いくつか種類，性格のちがったものがあってよい，という意見を出している。

これらの諸結果から，ただちにいかなる教育組織が望まれているかを結論づけることは困難である。しかし，9年間の義務教育のうえに，さらに何らかの教育機会が農業青年に与えられなければならないことは，青年の要求のなかからも，また指導者の希望のなかからも，ほぼ自明なこととなっている。またその段階で農業青年に用意されなければならない教育内容に関しても，いくつかの中心的領域が明らかになってきたのである。そこで問題は，いかなる組織において，いかなる形態において，それを体系化するかということである。我々の調査では，先にものべたごとく，この点に関する支配的な意見を得ることができなかったのであるが，この点に関する検討は更に今後の研究にまつ他ない。そのためには，現存の教育機関・施設・団体が現実的にいかなる機能を果しているのか，また一人前の農業人に成長して行くプロセスでそれらがどのような役割をになっているのかといった縦断面的な研究が必要になってくるにちがいない。

Ⅲ　農業青年の生活意識

はじめに

農業青年にたいして何らかの教育的な施策を講ずるにしても，われわれはまず，農業青年が現実にどのような生活を営んでおり，また日々の生活の営みを通じてかれらが何を考え，どんな意識を抱き，どんなことに悩んでいるかを知らねばならない。

かつて過剰人口に悩んだ農村は，今や新規学卒若年労働者の都市へのおびただしい流出をきたして，逆に人手不足，後継者不足に悩んでいる。加うるに所得格差のうえで都市産業にたいする立遅れが目立って大きくなってきている今日の農業は，今や根本的な体質改善，抜本的な構造改革をせまられている。こういった瞬時もゆるがせにできない大きな課題と重荷を課せられた農村に依然としてとどまり，今日のそして明日の新たな農業を背負って立とうとする農業青年たちの現実の生活と意識とその問題の所在をできるかぎり明らかにすること，これがこの第Ⅲ部のねらいである。

1　農業指導者調査の結果

農業指導者調査では，ふだんさまざまなかたちで農業青年に親しく接している農業指導者の眼に映った農業青年の姿を，次に示すようないくつかの点からとらえてみた。

1　農業青年の生活意識
2　農業指導者の若者観
3　農業青年の悩み
4　将来の農村生活の見通しと農業青年にたいする期待

以下順を追って調査結果を検討していこう。

§1　農業青年の生活意識

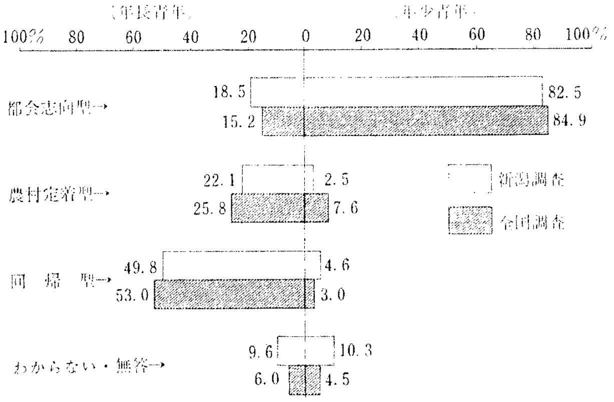
農業青年のA）農村への定着性，B）農業生活にたいする考え方，C）労働と遊び，D）余暇利用観，E）農業改善の意欲，F）団体活動への参加の意欲，G）農業政策や農業問題にたいする関心，の7つの領域にわたる質問を設定して，それぞれの領域に関して年少青年と年長青年とについて農業指導者の意見をたずねた。

A　農村への定着性〔第33図〕

農村への定着性に関して農業青年を次のような3つのタイプに分けて，年少青年と年長青年の各々に多いのはどの型の青年かをたずねた。

1　「農村は古いしきたりも多く，また何かと不便で住みにくい。できれば都会へ出たい」と思っている青年（都会志向型）
2　「農村は都会とちがって健康的だし，農村の人間には人情がある。農村に住むにこしたことはない」と思っている青年（農村定着型）
3　「一度は都会に出て，いろいろな経験をつむのはいいが，都会は永住するところではない。やがては村に戻って住みつきたい」と思っている青年（回帰型）

第33図　農村への定着性



全体的に新潟調査と全国調査とではほとんど差異が示されない。

いずれの調査の場合にも年少青年と年長青年とではきわめて対照的なちがいを見せている。年少青年においては，大部分が都会志向型に集中してこれが8割以上を占めており，農村定着型と回帰型はきわめて少ない。

これにたいして年長青年の場合は，回帰型がもっとも多くて約5割，次いで農村定着型は大きく減少して2割強，都会志向型が2割弱となっている。

こうして，年少青年における都会志向性，年長青年における回帰性と農村定着性が強調される。

B　農業生活にたいする考え方〔第34図〕

農業生活にたいする考え方に関して，農業青年を次のような4つのタイプに分けた。

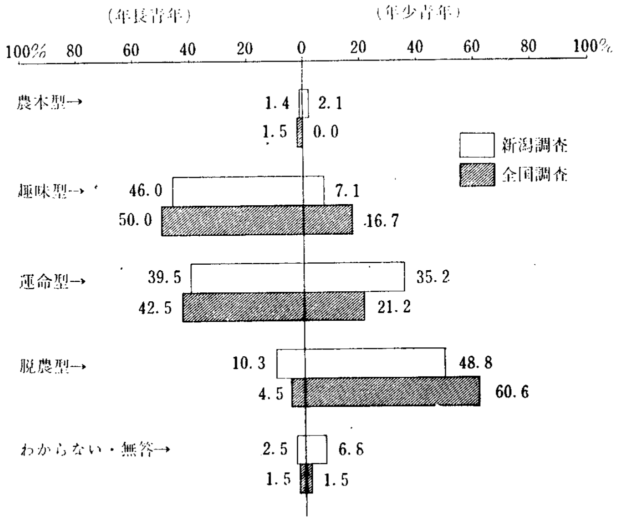
1　「農業は国のもとだから，ひたいに汗して働くだけの値うちのある大切な仕事だ」と思っている青年（農本型）
2　「農業はあまり割の合う仕事とはいえないが，やってみればいろいろおもしろいところのある仕事だ」と思っている青年（趣味型）
3　「農業はつまらない仕事だが，あとつぎである以上，運命だからしかたがない」と思っている青

年（運命型）
4 「農業はまったくつまらない仕事だ，できればやめてほかの仕事に移りたい」と思っている青年（脱農型）

新潟調査と全国調査とでは比率に若干のちがいがあるが，全体的傾向においては両者に大差はない。

ここでも年少青年と年長青年とではいちじるしい差異を示している。年少青年においては脱農型がもっとも多

第34図 農業生活にたいする考え方



くて新潟調査で5割，全国調査で6割がこれを占めている。次いで運命型（新潟調査35%，全国調査21%），趣味型（新潟調査7%，全国調査17%）とつづき，農本型は皆無に等しい。

年長青年においては，新潟調査と全国調査とではほとんど差異がなく，趣味型（約5割）と運命型（約4割）という一見相反するタイプがほぼ等しく，この両者で大半を占めている。年少青年において半数以上を占めていた脱農型は年長青年においてはきわめて少なく，約1割にすぎない。また農本型は年少青年の場合と同じくほとんど皆無である。

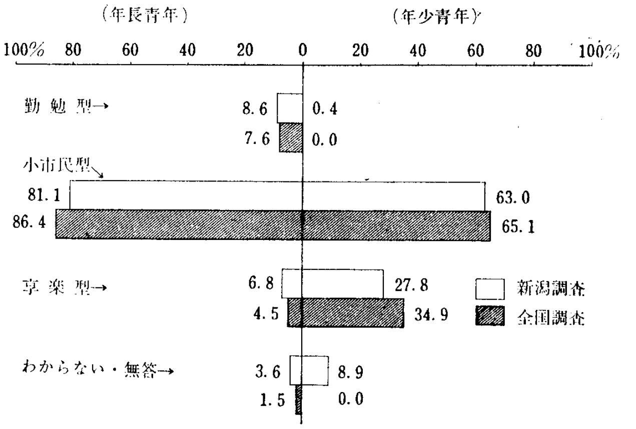
こうして年少青年においては脱農的傾向がいちじるしく，また年長青年においては趣味型と運命型とが混在している。

C 労働と遊び〔第35図〕

労働と遊びに関して農業青年を次のような3つのタイプに分けた。

1 「働くことこそ生きがいだ，べつにとりたてて遊びたいとは思わない」青年（勤勉型）
2 「働くことは楽しみだが時には楽しく遊びたい」と思っている青年（小市民型）
3 「もしも働かずに遊んでくらせるなら，それにこしたことはない」と思っている青年（享楽型）

第35図 労働と遊び



新潟調査と全国調査とでは傾向にはほとんど差異は見られない。

年少青年においては小市民型がもっとも多くて6割強，次いで享楽型が約3割で，勤勉型は皆無に近い。

年長青年では，年少青年において第1位を占めていた小市民型はさらに多くて8割以上がこれに集中している。年少青年の場合にその3割を占めていた享楽型は大巾に減少し，また年少青年において皆無に等しかった勤勉型は年長青年では若干増えて1割弱となっている。

こうして，農業青年の労働と遊びに関して全体的に小市民型が強くうち出されるとともに，とくに年少青年においては享楽的傾向が強調される。

D 余暇利用観〔第36図〕

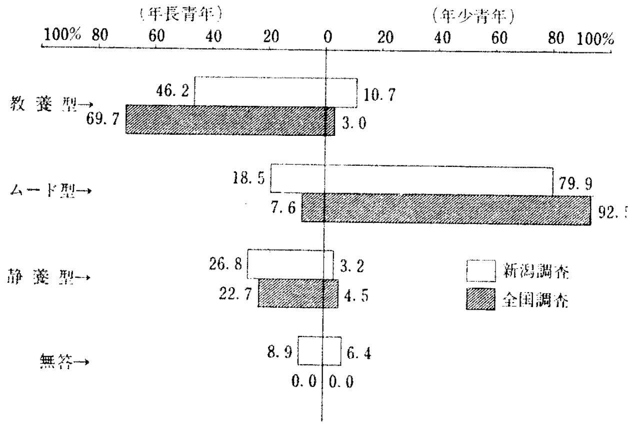
余暇利用にたいする考え方について，農業青年を次のような3つのタイプに分けた。

1 自分の知識や技術・教養を高めるために余暇を有効に使いたい」と思っている青年（教養型）
2 「余暇を多勢でにぎやかに遊んですごしたい」と思っている青年（ムード型）
3 「ひとりかあるいはごく親しい人と余暇を静かに楽しみたい」と思っている青年（静養型）

ここでも年少青年と年長青年とはいちじるしい差異を

見せる。年少青年においてはムード型が大半（新潟調査80％，全国調査93％）を占め，教養型と静養型はきわめてわずかである。

第36図　余暇利用観



他方年長青年においては，教養型がもっとも多くて新潟調査で46％，全国調査で70％がこれに集まり，次いで静養型が２割強で，年少青年においてその大半を占めていたムード型は大きく減少して，新潟調査で19％，全国調査で８％となる。

年長青年の場合，新潟調査と全国調査とでは若干の差異を示し，全国調査の方が教養型が多くムード型が少なくなって，年長青年にたいする評価がいくぶん積極的である。

ともあれ，年少青年においてはムード的な余暇利用が，年長青年においては教養的な余暇利用がここに強調される。

E　農業改善の意欲〔第37図〕

農業改善への意欲に関して，農業青年を次に示すような３つのタイプに分けた。

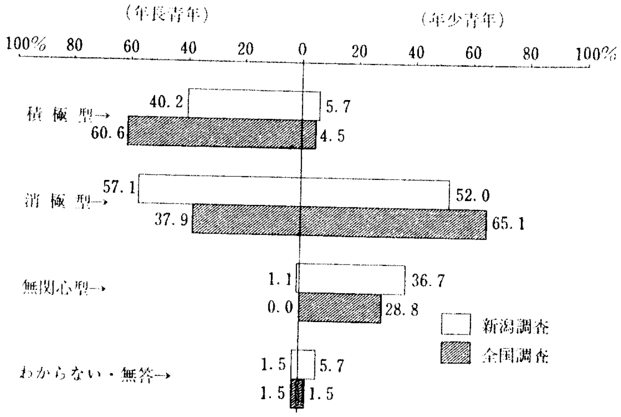
1　農業経営や農業技術の改良にみずからすすんで積極的にとりくんでいる青年（積極型）
2　農業経営や農業技術を改良しようとする気持はあるが，それほど積極的でない青年（消極型）
3　農業経営や農業技術の改良には無関心な青年（無関心型）

ここでも年少青年と年長青年とでは大きな差異が示される。

年少青年に関しては消極型が52％（新潟調査），65％（全国調査）ともっとも多く，次いで無関心型もかなり多くて約３割を占め，反対に積極型はきわめて少ない。

年長青年においては積極型と消極型があい半ばして，この両者で大半を占め，年少青年においてかなり多かっ

第37図　農業改善の意欲



た無関心型は皆無に近い。また，新潟調査に比べて全国調査の方が消極型が少なく積極型が多くなって，いくぶん高い評価がなされている。

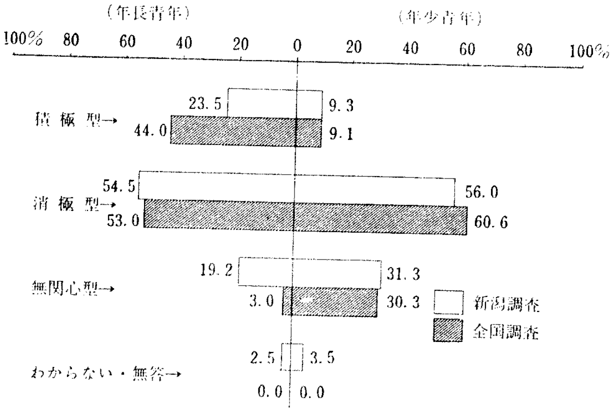
こうして農業改善にたいする意欲において，年少青年は消極的ないしは無関心であるのにたいして，他方年長青年は積極的ないしは消極的であるとされる。

F　団体活動への参加の意欲〔第38図〕

地域のさまざまの団体活動への参加の意欲に関して，農業青年を次のような３つのタイプに分けた。

1　地域のさまざまな団体活動に積極的に参加し，これをもりたてていこうとしている青年(積極型)
2　地域の団体活動にいちおうは参加するが，それほど積極的ではない青年（消極型）
3　地域の団体活動にはあまり関心を示さない青年（無関心型）

第38図　団体活動への参加の意欲



農業改善への意欲の場合と同様，年少青年と年長青年とでは消極型に大差はないが，積極型と無関心型とが相

反する傾向を示し，年少青年においては無関心型が，年長青年においては積極型がそれぞれかなり多い。

また年長青年に関しては，総じて全国調査の方が新潟調査に比べていくぶん評価が高い。

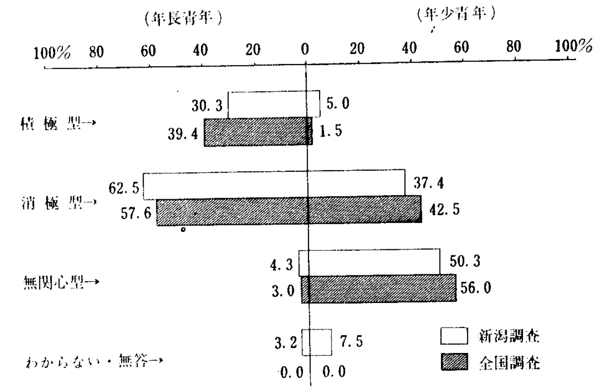
こうして団体活動への参加についても，年少青年における消極性と，年長青年における積極性とが対照的に示される。

G　農業政策や農業問題にたいする関心〔第39図〕

ここでも同様にして農業青年を「積極型」「消極型」「無関心型」の3つに分けた。

1　農業政策や農業問題などに深い関心をよせ，それにたいして自分なりに，積極的な意見をもっている青年（積極型）
2　農業政策や農業問題などにいちおう関心を示すが，それほど積極的でない青年（消極型）
3　農業政策や農業問題などには無関心な青年（無関心型）

第39図　農業政策や農業問題にたいする関心



農業改善や団体活動への参加の意欲の場合とほぼ同じ傾向が示されて，消極型を軸として，年少青年における無関心型と，年長青年における積極型とが対照的に強調される。

また年長青年については全国調査の方が新潟調査よりも評価が若干高く，地方年少青年に関しては，反対に全国調査の方がいくぶん低い評価が示されている。

以上見てきたように，生活意識の諸相について，農業指導者が農業青年にたいしてなす評価は，年少青年と年長青年との場合では極端な差異を見せ，両者はきわめて対照的である。ここに設定した7つのどの領域をとってみても，年長青年にたいする評価がかなり高いのに比べて，年少青年にたいするそれはきわめて低い。農業生活にたいする意欲・積極性・定着性といった点で，年少青年に欠けるものが非常に大きいと看做されているのである。

また，新潟調査と全国調査とを比べてみると，後者の方がとくに年長青年にたいして若干積極的な評価をなしているが，全体的傾向においては特記すべき差異はほとんど示されない。

§2　農業指導者の若者観〔第40・41図〕

農業指導者は農業青年たちについて，その長所と短所とをどのようにとらえているだろうか。現代の若い人たち一般にひろくうかがえるような特質を，積極的・中間的及び否定的なものにわたって次に示すような合計12項目を設定して，ふだん接している年少の農業青年と年長の農業青年の各々についてどう思うかをたずねてみた。

＜否定的特質＞

「打算的だ，あまりにも現実的だ」
「自己中心的だ，自分勝手だ」
「派手だ」
「無責任だ，公共心に乏しい，他人の迷惑を考えない」
「理屈っぽい，口ばかり達者だ」
「おとなの意見に耳をかさない，なまいきだ」

＜中間的特質＞

「卒直だ，はっきりしている」
「社交性がある，人なつっこい」
「明るい，きびきびしている」

＜積極的特質＞

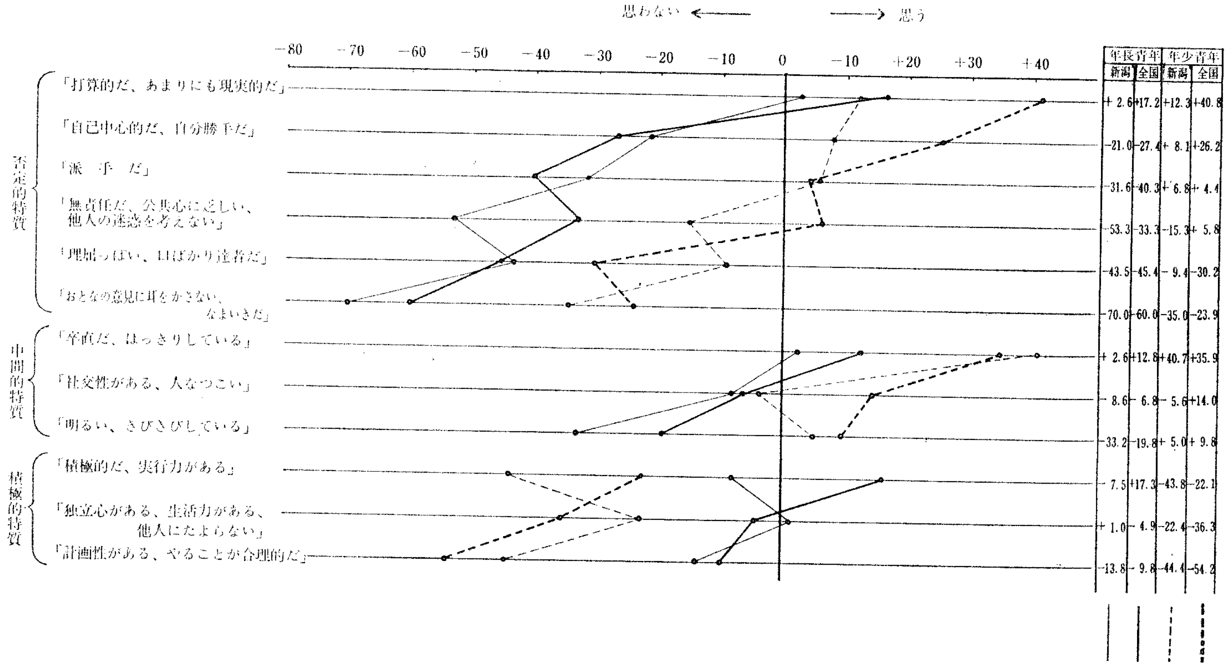
「積極的だ，実行力がある」
「独立心がある，生活力がある，他人にたよらない」
「計画性がある，やることが合理的だ」

回答は「そう思う」「思わない」「わからない」といったかたちで求められたが，ここではこれにさらに統計的処理を施してＣＩ値（註）を算出し，より端的に傾向をとらえようとした。ＣＩ値がプラスの場合は，数値が大きければ大きいほど「そう思う」とする者が多いことを示し，反対にマイナスの場合は，その数値が大きいほど「そう思わない」とする者が多いことを示している。

全体的に見て新潟調査と全国調査とでは注目すべき差異はほとんど示さない。

次にまずわれわれの眼をひくのは，年少青年の場合と年長青年の場合とでは，その評価に明瞭な差異が存在する点である。「打算的」をはじめとして「自己中心的」「無責任」「理屈っぽい」「なまいき」といった否定的な特質にたいしては，そのすべてにわたって年長青年よ

第40図　若　　者　　観



（註）　C I 値 (Coefficient of Imbalance)：傾きの係数とよばれる。

総度数（t）のうち，関連ある総度数を（N），アイテムに有利な総度数を（f），不利な総度数を（u）とする場合，f＞uならば

$Cf=\frac{f(f-u)}{Nt}$，f＜uならば

$Cu=\frac{u(u-f)}{Nt}$ として算出される。

従ってそれは，$\frac{f-u}{N}$ と $\frac{f}{t}$ or $\frac{u}{t}$ という二つの契期の積としての意味をもつ。

(H. D. Lasswell, et al, Language in Politics, 1949, 中のchap. 8, The Coefficient of Imbalance, by Irving L. Janis & Raymond Fadner, PP. 153～169を参照)

りも年少青年のC I 値が高い。

次いで「率直」「社交的」「明るい」といった中間的な特質にたいしても，年長青年よりも年少青年の場合の方がおしなべてC I 値が高い。

しかし，「積極的」「独立心」「計画的」といった積極的な特質に関しては，反対に年少青年よりも年長青年の場合の方がC I 値が高くなっている。

こうして農業指導者の農業青年にたいする評価は，年少青年よりも年長青年の場合の方がかなり高いということができる。

ここで，年少青年と年長青年の各々に関して＋と－のC I 値10以上のものをそれぞれ高い順に拾ってみると次のようになる。

＜年少青年＞

－		＋	
新潟調査	全国調査	新潟調査	全国調査
計画的 積極的 なまいき 独立心	計画的 独立心 理屈っぽい なまいき 積極的	率直	打算的 率直 自己中心的

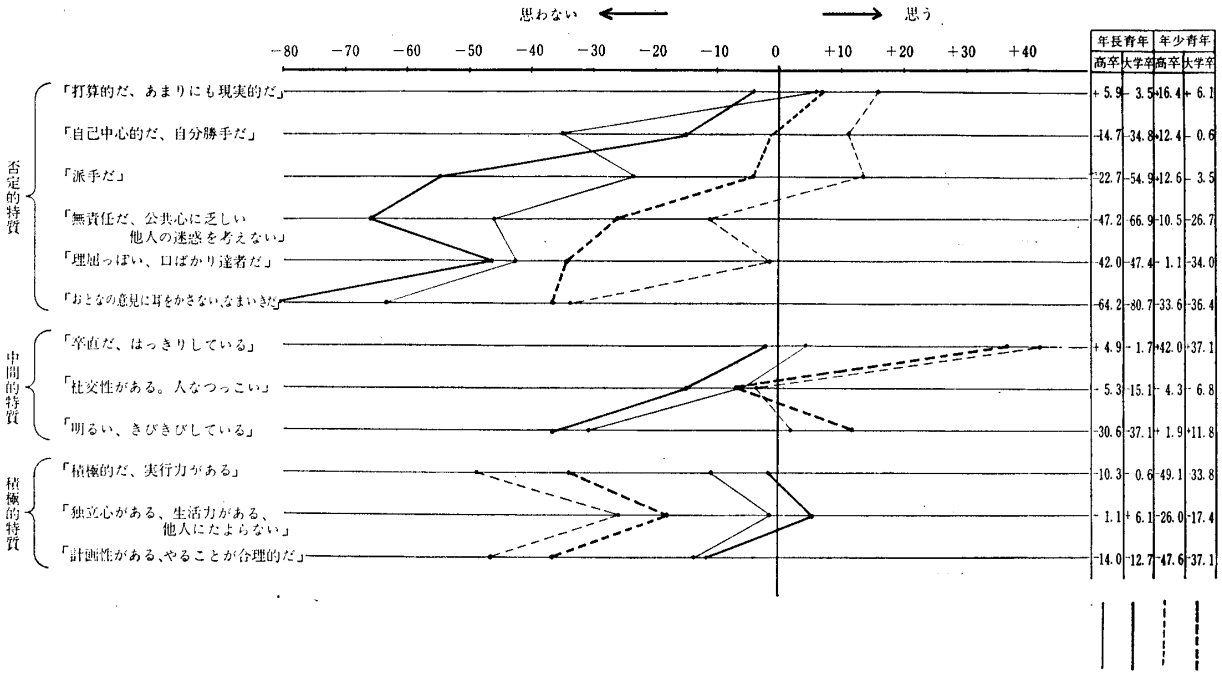
＜年長青年＞

－		＋	
新潟調査	全国調査	新潟調査	全国調査
なまいき 無責任 理屈っぽい 明るい 派手 自己中心的	なまいき 理屈っぽい 派手 無責任 自己中心的	なし	なし

こうして見ると，農業指導者の眼に映った年少の農業青年は「率直」だが「打算的」「自己中心的」で，同時に「計画性」「独立心」「積極性」に欠けているということになる。また年長の農業青年についていえば，かれらは「おとなの意見に耳をかさず，なまいき」だとか「無責任」「理屈っぽい」「派手」などということはないが，反面「明るさ」にも欠けるところがあると見られているのである。

次に比較的サンプルの多い新潟調査について，これを農業指導者の学歴別にとってみると，興味深い結果が示される。「打算的」「自己中心的」「派手」「無責任」「理屈っぽい」「なまいき」といった一連の否定的な特質及び「率直」「社交的」「明るい」などの中間的な特質に関しては，高等教育修了者よりも中等教育修了者の方が，年

第41図　若　者　観――学　歴　別――



少青年と年長青年のいずれの場合もより高いＣＩ値を示し，他方「積極的」「独立心」「計画的」というような積極的な特質に関しては，年少青年，年長青年いずれの場合も，反対に中等教育終了者よりも高等教育修了者の方がＣＩ値が高い。

このようにして，学歴が高い農業指導者の方が農業青年にたいしてより高い評価をなしているということができよう。

§3　農業青年の悩み〔第42図〕

農業青年の現実の姿をとらえる上で，日々の生活におけるかれらの悩みの所在を知ることは重要である。農業青年を年少と年長のふたつに分けて，農業指導者から見て農業青年はどんなことに悩んでいるかをたずねてみた。下に示すように，農業技術や農業経営，家庭，勉強や教育，あとつぎや将来の職業，友人，異性，遊び，近所や親類づき合いなど，農業青年の生活全般にわたって合計24の項目を設定して，そのうち農業青年がもっとも悩んでいると考えられるもの１つをえらんでもらった。

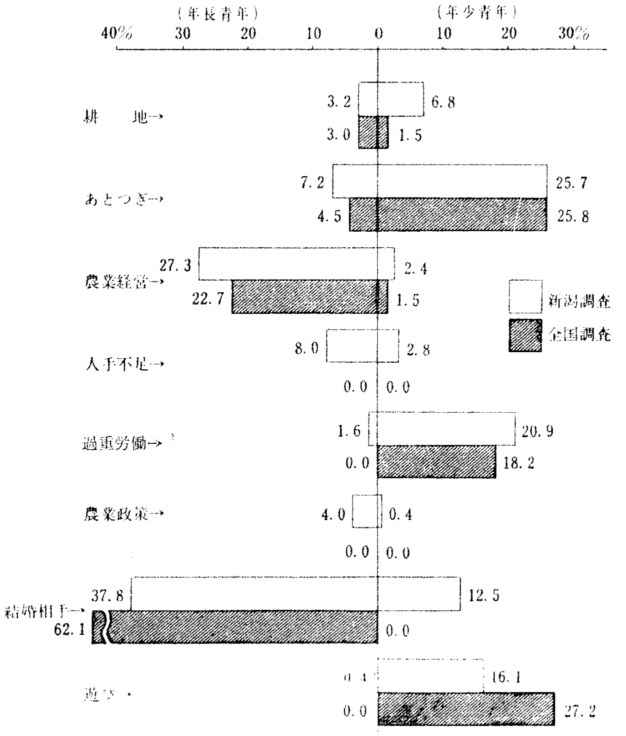
1　耕地のこと	13　隣近所とのつき合いのこと
2　農業相続(あとつぎ)や将来の職業のこと	14　本家分家関係のこと
3　財産のこと	15　地主，小作関係のこと
4　農業技術のこと	16　村の政治のこと
5　農業経営のこと	17　結婚相手のこと
6　人手不足のこと	18　生活改善のこと
7　共同化のこと	19　教育や勉強のこと
8　農協のあり方のこと	20　学力や教養のこと
9　過重な労働のこと	21　遊ぶ時間や金のこと
10　農業政策のこと	22　友達のこと
11　親子関係のあり方のこと	23　異性のこと
12　兄弟関係のあり方のこと	24　その他

設定された24項目のうち，比較的高い比率を示しているものをとりあげてみると，「結婚相手」「あとつぎ」「農業経営」「遊び」「過重労働」「耕地」「人手不足」

「農業政策」の８項目となる。これを年少青年と年長青年の各々の場合について比べてみよう。

まず全体的な傾向においては，全国調査と新潟調査とでは顕著な差異はほとんど示されない。ただし，年少青年・年長青年ともに「人手不足」「農業政策」に関する悩みが全国調査では皆無であるが新潟調査ではこれが若干指摘されている。また，とくに年長青年の場合，「結

第42図　農業青年の悩み



婚相手」に関する悩みが新潟調査でも４割近くを占めて第１位にあげられているが，全国調査ではこれをさらに上まわって６割以上にのぼっている。

さて，これを年少青年について見ると，その悩みは「あとつぎ」「遊び」及び「過重な労働」の３つにほぼ集中されている。だが年長青年においては，この３つの悩みはきわめて少数であるかあるいはほとんど皆無に近い。そして年少青年とは全く異って，「結婚相手」と「農業経営」に関する悩みが大きく前面にたち現われてくる。

こうして年長青年においては，その生活の重心が農業生活そのものの中に積極的に据えられているのにたいして，他方年少青年におけるそれは，農業生活の消極的な面ないしは農業生活以外——というよりもむしろ農業生活以前——の場所に置かれていると見られているわけである。

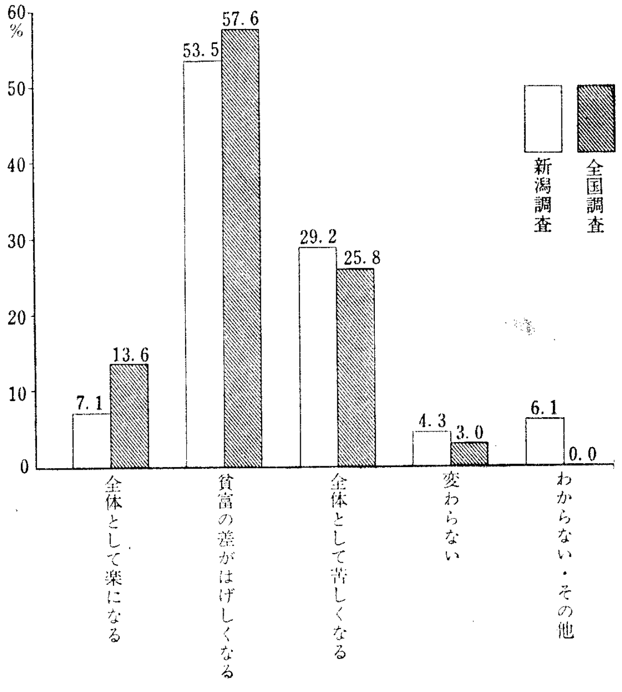
§4　将来の農村生活の見通しと農業青年にたいする期待

A）将来の農村生活の見通し〔第43図〕

いよいよいちじるしくなっていく農業の都市産業にたいする立遅れ，農村から都市産業への労働人口の大量移動，そして農業経営の抜本的な構造改革等，緊迫した数々の大きな課題を背負っている農村について，農業指導者はいったいどんな見通しをもっているのだろうか。こういった将来の農村生活にたいする見通しを農業指導者にたずねてみた。

新潟調査と全国調査とでは，全体的傾向においてはほとんど差異が見られない。もっとも多いのが「貧富の差がはげしくなる」という意見で，これが５割以上を占

第43図　将来の農村生活の見通し



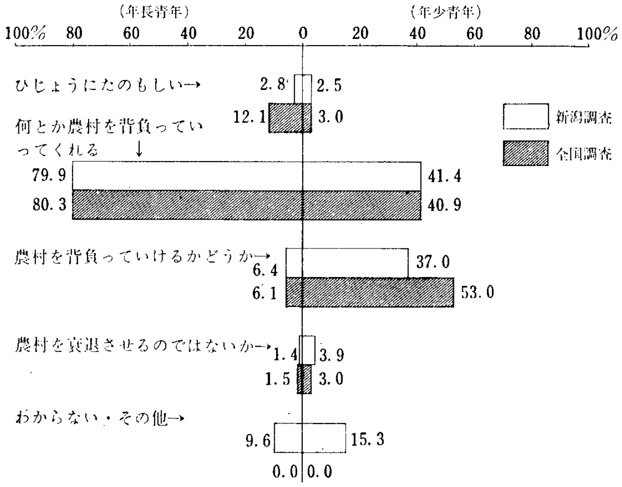
め，次いで「全体として苦しくなる」が約３割である。「全体として楽になる」と見る者はわずかに１割程度にすぎない。経営規模の拡大化とならんで農業経営の困難を予想する悲観的な見方がかなり強い。

B）農業青年にたいする期待〔第44図〕

それでは，このような困難な局面の到来を予想させずにはおかないところの明日の農村を背負っていくべき農業青年たちの上には，いったいどの程度の期待がかけられるのだろうか。

結果を見ると，年長青年の場合は「何とか農村を背負っていってくれる」と見る者が大半で８割を占めているのにたいして，年少青年に関しては，「農村を背負っていけるかどうか心配だ」とする者と「何とか農村を背負っていってくれる」とする者とがほぼあい半ばしてい

第44図　農業青年にたいする期待



て，とくに年少青年にたいする不安がかなり大きい。

§5　ま　と　め

以上，農業青年にたいする若者観，農業青年の生活意識，悩み，期待などに関して農業指導者の意見をさぐってきたが，ほとんどすべての質問を通して，20才を境とする年少青年と年長青年との間のひらきがきわめて顕著に示された。年長青年に比べて年少青年にたいする否定的な意見や評価がかなり強いのである。またこういった傾向は，新潟調査と全国調査とでは注目すべき差異はほとんど示されなかった。したがってここに明らかにした農業指導者の種々の意見は，かなりの普遍性をもつものといって差支えないであろう。

ところで，こうしてわれわれがここにとらえた農業青年にたいする農業指導者の意見や評価は，はたして充分な確実性をもつものだろうか。それとも，世代的な差異によって多少とも誇張されたりゆがんだりしているものなのだろうか。こういった農業指導者が農業青年について示した意見や評価の検証と農業青年にたいしてより確実な認識を得る作業は，次の農業青年調査にゆずることにしよう。

2農業青年調査の結果

青年調査の構成の大要は次のとおりである。

1　農業青年の生活意識

2　農業青年の価値意識——生き方・農業相続・結婚相手——

3　農業青年の生活——労働と余暇——

4　農業青年の親とのくいちがい及び悩みとその相談相手

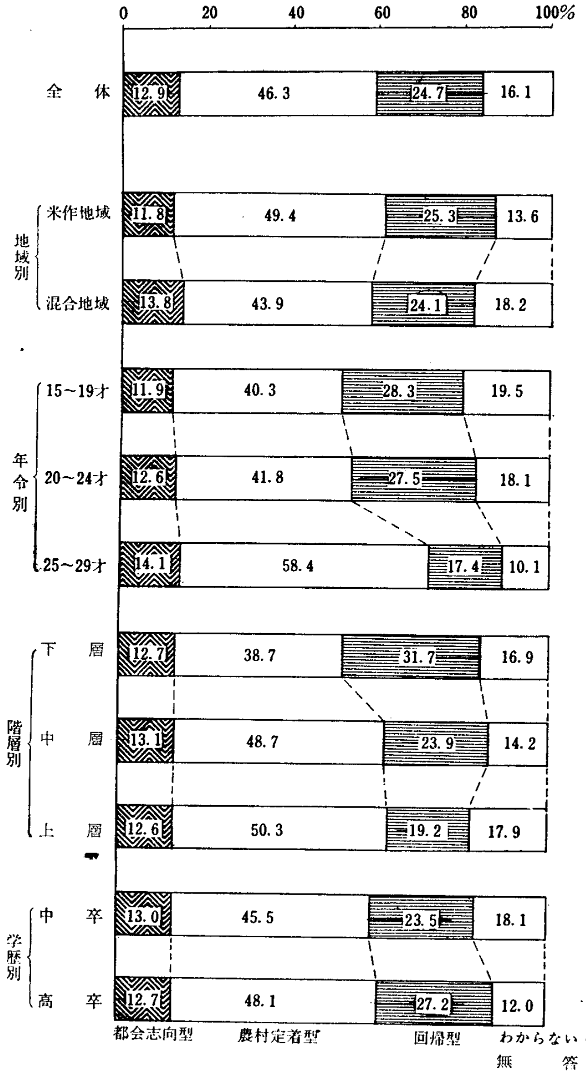
§1　農業青年の生活意識

まず農業青年の生活意識を，指導者調査の場合と同じくA）農村への定着性，B）農業生活にたいする考え方，C）労働と遊び，D）余暇利用観，E）農業改善の意欲，F）団体活動への参加の意欲，G）農業政策や農業問題にたいする関心，の7つの面から多角的に明らかにしようとした。

A　農村への定着性〔第45図〕

農業青年の農村への定着性を「都会志向型」「農村定

第45図　農村への定着性



着型」「回帰型」の3つのタイプに分けて，次のような設問を用いた。

1　農村は古いしきたりも多くまた何かと不便で住みにくい。できれば都会へ出たい。（都会志向型）
2　農村は都会とちがって健康的だし農村の人間には人情がある。農村に住むにこしたことはない。（農村定着型）
3　一度は都会へ出ていろいろな経験をつむのはいいが都会は永住するところではない。やがては村に帰ってきて住みつきたい。（回帰型）

まず全体的に見ると，約半数近く（46.3%）が農村定着型で，次いで4分の1（24.7%）が回帰型，都会志向型は12.9%である。

＜地域別＞都会志向型は混合地域の方にいくぶん多く，また農村定着型は反対に米作地域の方により多い。

＜年令別＞都会志向型は各年令段階で大差は示さないが，農村定着型がとくに25～29才の段階で急増し，逆に回帰型が減少する。

＜階層別＞都会志向型には差が示されないが，とくに下層階層において定着型が急減し，逆に回帰型が増加する。

＜学歴別＞定着型，回帰型とも高卒者よりも中卒者の方にやや多い。

以上のようにして，各クロスを通じて都会志向型はほとんど差異を示さないが，農村定着型と回帰型がほぼ相反する傾向を示しており，農業青年の農村への定着性は，地域別には米作地域に，年令別には高年層に，階層別には上層に，学歴別には高卒者の方に大きいということができる。

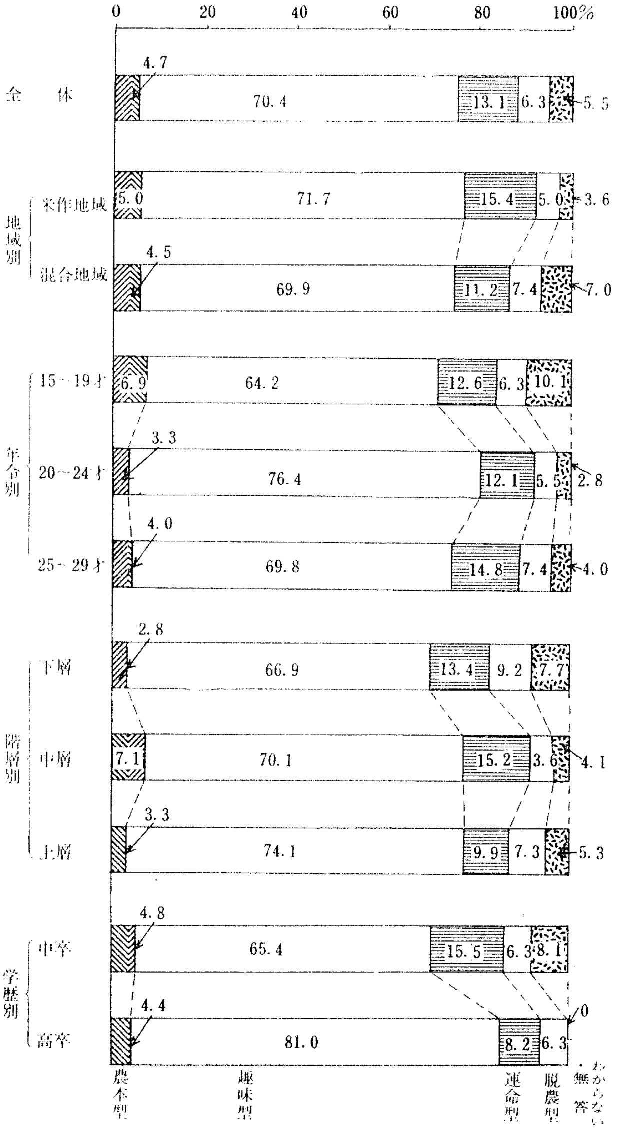
B　農業生活にたいする考え方〔第46図〕

農業青年の農業生活にたいする考え方について，「農本型」「趣味型」「運命型」「脱農型」の4つのタイプを設け，次のような設問を用いた。

1　農業は国のもとだからひたいに汗して働くだけの値うちのある大切な仕事だ。（農本型）
2　農業はあまり割のあう仕事とはいえないが，やってみればいろいろとおもしろいところのある仕事だ。（趣味型）
3　農業はつまらない仕事だが，あとつぎである以上運命だからしかたがない。（運命型）
4　農業はまつたくつまらない仕事だ。できればやめてほかの仕事に移りたい。（脱農型）

全体的に見ると，趣味型が圧倒的に多くて7割（70.4%）を占め，次いで運命型が13.1%，脱農型が6.3%，農本型4.7%となっている。

第46図　農業生活にたいする考え方



＜地域別＞農本型と趣味型はほとんど差異を見せないが，運命型が米作地域の方にやや多く現われている。

＜年令別＞とくに20～24才の段階で，趣味型が多いのが目立つ。また25～29才で運命型が若干多くなっている。

＜階層別＞階層をのぼるにしたがって趣味型が増加し，逆に運命型が減少していく傾向にある。

＜学歴別＞中卒者と高卒者とではかなりいちじるしい差異を示して，趣味型が高卒者に多く，逆に運命型は中卒者の方により多い。

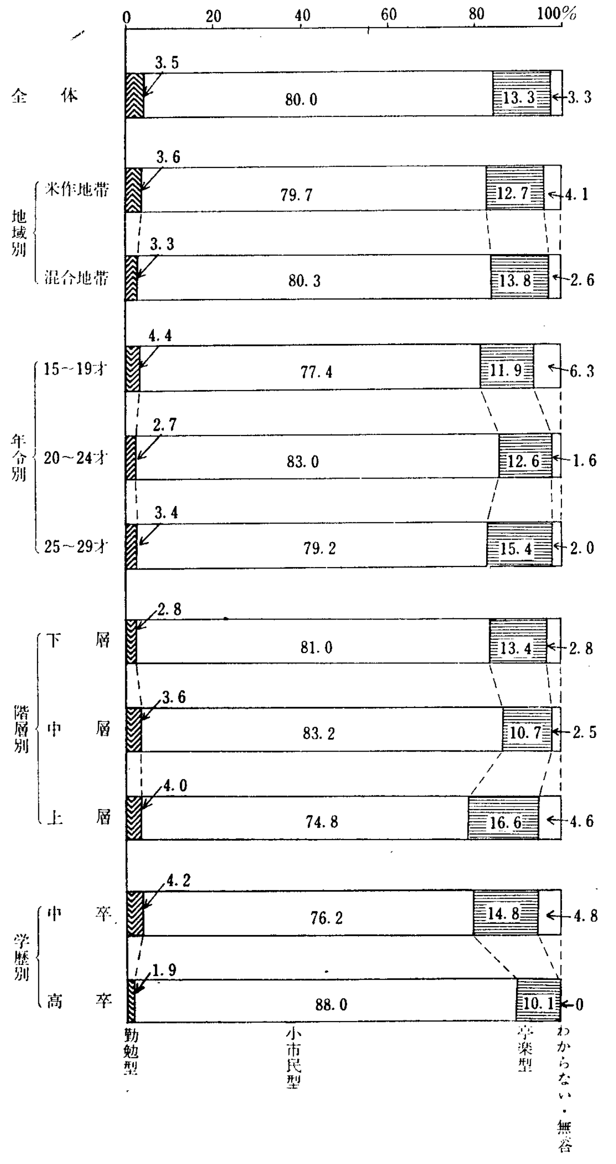
このようにして，各クロスにおいて趣味型と運命型とがほぼ相反する傾向を示しており，とくに運命型についていえば，それは地域別には米作地域に，階層別には中及び下層に，学歴別には中卒者の方により多く現われている。

C　労働と遊び〔第47図〕

労働と遊びについて，これを「勤勉型」「小市民型」「享楽型」の３つのタイプに分けて，次のような設問を用いた。

1　働くことこそ生きがいだ。べつにとりたてて遊びたいとは思わない。（勤勉型）
2　働くことは楽しみだが，時には楽しく遊びたい。（小市民型）
3　もしも働かずに遊んでくらせるなら，それにこしたことはない。（享楽型）
4　わからない。

第47図　労働と遊び



全体としては小市民型が大半（80.0％）を占め，これに次いで享楽型が13.3％，勤勉型はわずかに3.5％である。

<地域別><年令別><階層別>にはほとんど特徴的な差異は見られない。

<学歴別>小市民型は中卒者よりも高卒者の方に多く，反対に享楽型は高卒者よりも中卒者の方に多く現われている。

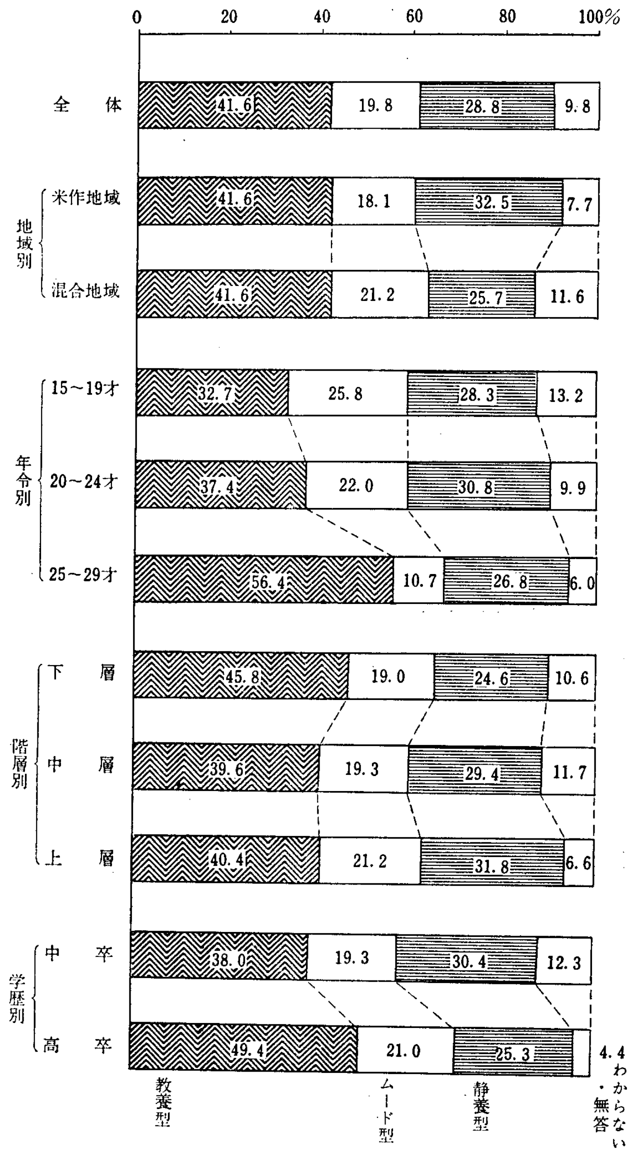
D　余暇利用観〔第48図〕

農業青年の余暇利用観を，「教養型」「ムード型」「静養型」の３つのタイプに分けて，次のような設問を用いた。

（設問は次頁）

全体としては，積極的な余暇利用である教養型がもっとも多くて41.6％を占め，次いで静養型が28.8％，ムード型が19.8％となっている。

第48図　余暇利用観



1　自分の知識や技術，教養を高めるために余暇を有効に使いたい。（教養型）
2　余暇を多勢でにぎやかに遊んですごしたい。（ムード型）
3　余暇をひとりかあるいはごく親しい人と静かに楽しみたい。（静養型）
4　わからない。

＜地域別＞とくに静養型が混合地域よりも米作地域の方により多く現われている。

＜年令別＞教養型とムード型がかなりいちぢるしい対照をなしており，年令段階をのぼるにしたがって教養型が増加し，逆にムード型が減少する。そしてこの傾向はとくに25～29才において顕著である。

＜階層別＞とくに静養型が上層ほど増加する傾向がうかがえる。

＜学歴別＞教養型は中卒者よりも高卒者の方に多く，また静養型は反対に中卒者の方に若干多く現われている。

こうして，とくに積極的な余暇利用である教養型についていえば，それは年令別には低年令層よりも高年令層に多く，学歴別には中卒者よりも高卒者に多いといえる。

E　農業改善の意欲〔第49図〕

農業青年は農業経営や農業技術の改良にたいしてどの程度の積極性をもっているだろうか。

これには，次のような「積極型」「消極型」「無関心型」の3つのタイプを設けてみた。

1　農業経営や農業技術の改良にみずからすすんで積極的にとりくんでいきたい。（積極型）
2　農業経営や農業技術を改良しようとする気持はあるが，それほど積極的になれない。（消極型）
3　農業経営や農業技術の改良にはあまり関心がない。（無関心型）
4　わからない。

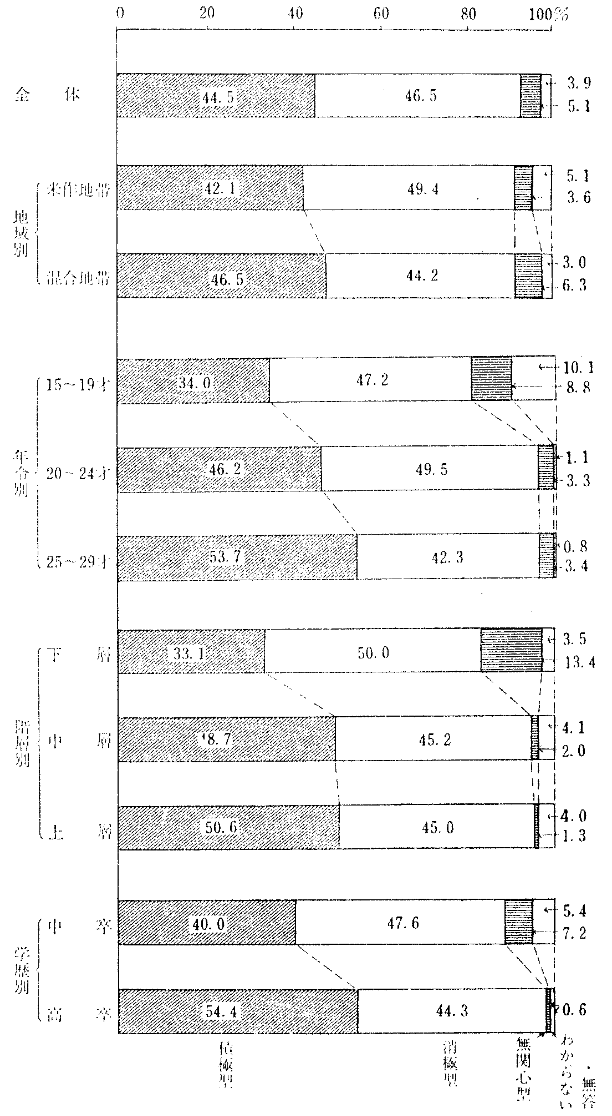
全体的には消極型（46.5%）と積極型（44.5%）とがほぼ同数で，この二者が大半を占めている。無関心型は5.1%にすぎない。

＜地域別＞米作地域よりも混合地域の方に積極型がやや多くうかがえる。消極型と無関心型は米作地域の方に多い。

＜年令別＞かなりいちぢるしい差異を示しており，高年令層ほど積極型が多く，反対に消極型と無関心型は低年令層の方により多い。

＜階層別＞とくに下層階層においては積極型がかなり

第49図　農業改善の意欲



少なく，逆に消極型と無関心型が多い。

＜学歴別＞積極型が高卒者の方にかなり多く現われており，反対に消極型と無関心型とは中卒者の方により多い。

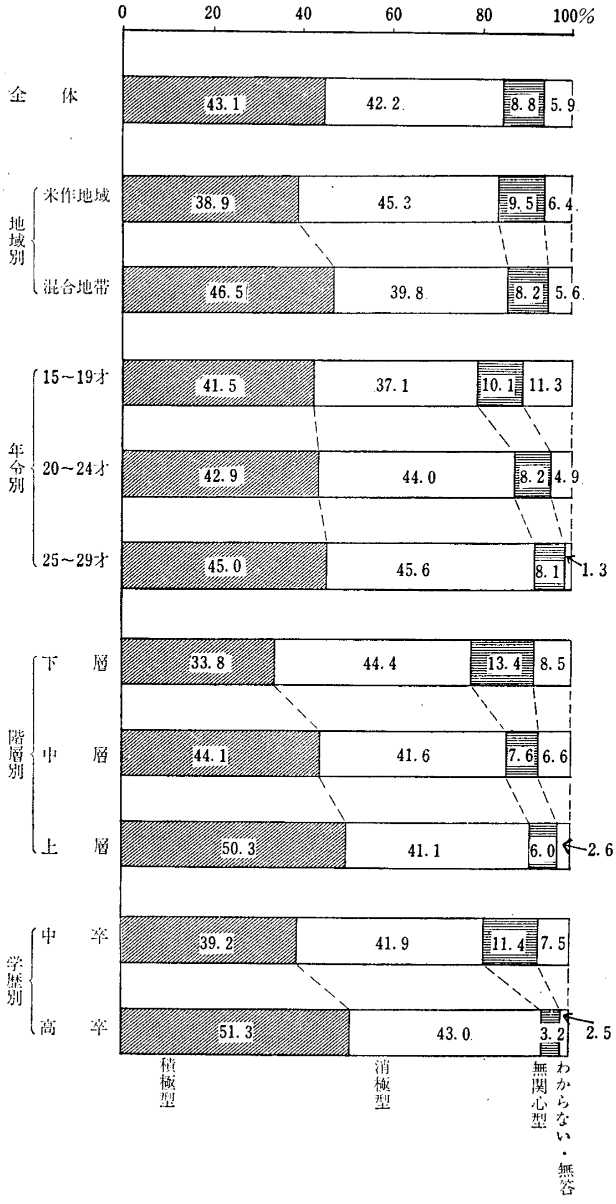
こうして農業青年の農業経営や農業技術の改良にたいする意欲は，地域別には米作地域よりも混合地域が，年令別には低年令層よりも高年令層が，階層別には下層よりも上層が，そして学歴別には中卒者よりも高卒者の方がより高いといえる。

F　団体活動への参加の意欲〔第50図〕

地域のさまざまの団体活動への意欲について，次のような「積極型」「消極型」「無関心型」の3つのタイプを設定した。

1　地域のさまざまの団体活動に積極的に参加して，それをもりたてていきたい。（積極型）
2　地域の団体活動にいちおう参加はするが，それほど積極的になれない。（消極型）
3　地域の団体活動にはあまり関心がない。（無関心型）
4　わからない。

第50図　団体活動への参加の意欲



全体的に見ると，積極型（43.1%））と消極型（42.2%）とがほぼ等しく，この二者で大半を占め，無関心型は8.8%である。

＜地域別＞積極型は混合地域の方により多く，反対に消極型は米作地域の方に多い。

＜年令別＞とくに顕著な傾向は示されないが，年令をのぼるにしたがって積極型，消極型が若干の増加を示し，逆に無関心型が減少する。

＜階層別＞積極型が上層ほど増加し，反対に無関心型は下層ほど多くなっていく。

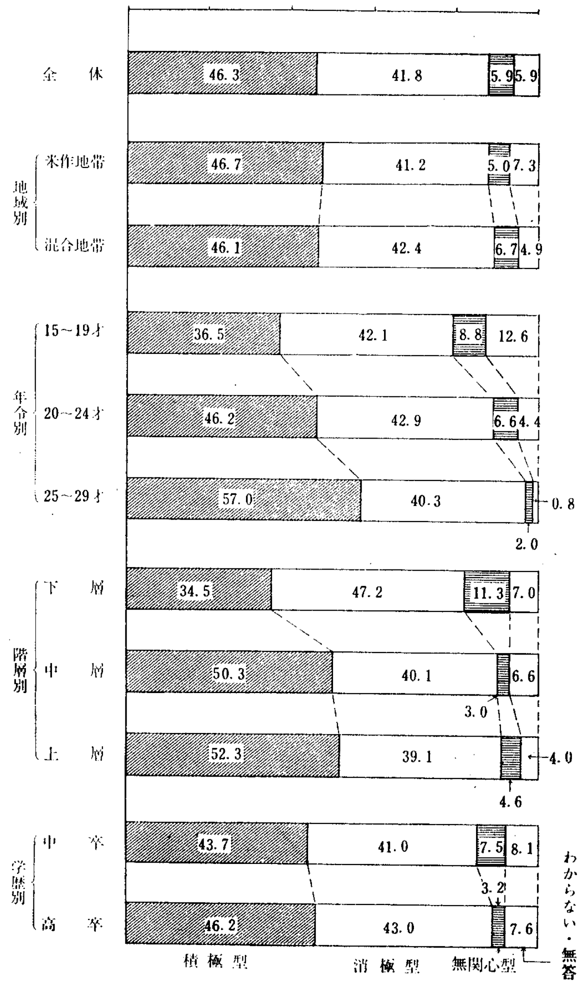
＜学歴別＞積極型は高卒者に多く，無関心型は中卒者の方に多い。

こうして，農業青年の地域団体活動への参加の意欲は，地域別には米作地域よりも混合地域の方が，年令別には低年層よりも高年層の方が，階層別には下層よりも上層の方が，そして学歴別には中卒者よりも高卒者の方がより高いということができる。

G　農業問題や農業政策にたいする関心〔第51図〕

農業青年は国の農業問題や農業政策にどの程度の関心を寄せているか。これを次のような「積極型」「消極型」「無関心型」の3つのタイプに分けてみた。
（設問は次頁）

第51図　農業問題や農業政策にたいする関心



1　農業政策や農業問題などに深い関心をよせ，それにたいして自分なりに積極的な意見をもちたい。（積極型）
2　農業政策や農業問題などにはいちおう関心はもつがそれほど積極的にはなれない。（消極的）
3　農業政策や農業問題にはあまり関心がない。（無関心型）
4　わからない。

全体としては，積極型（46.3%）と消極型（41.8%）とで大半を占め，無関心型は5.9%である。

＜地域別＞二つの地域間にはほとんど差異は示されない。

＜年令別＞積極型は年令とともに規則的に増加する。消極型は大差がないが，無関心型がやはり低年令層ほど多くなっている。

＜階層別＞中層と上層とでは大差はないが，これに比べてとくに下層においては積極型が少く，反対に消極型と無関心型がかなり多い。

＜学歴別＞さほど大きな差異は示されないが，それでも積極型は高卒者の方に若干多く，無関心型は反対に中卒者の方により多い。

こうして農業青年が国の農業政策や農業問題にたいして寄せる関心は，地域別には米作地域よりも混合地域が，年令別には低年令層よりも高年令層が，階層別には下層よりも中及び上層が，そして学歴別には中卒者よりも高卒者の方がより高いということができる。

以上農業青年の生活意識を7つの側面から多角的に探ってみたが，各々についてほぼ共通してうかがえるように，農業生活にたいする積極性や意欲は，混合地域——高年令層——上層階層——高卒の青年たちの方により高い。言いかえれば，問題なのは，米作地域——低年令層——下層階層——中卒の農業青年たちであって，かれらにおいては農業生活にたいする定着性や積極性・意欲の点で，前者の青年たちに比べて多分に劣っているといわねばならない。

§2　農業青年の価値意識

農業青年の価値意識をうかがうために，「生き方」「農業相続」「結婚相手」の3つについて，農業青年の意見をきいてみた。

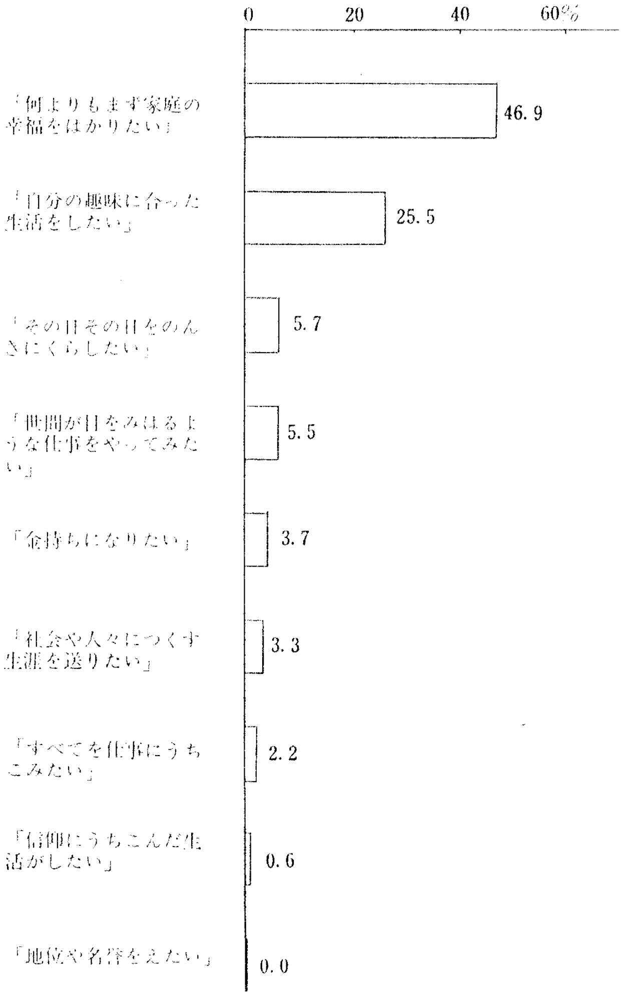
A　生き方〔第52・53図〕

農業青年はどんな生き方を望んでいるだろうか。ここでは次のような9つの生き方を設定して，自分の気持にもっとも近いものを1つだけえらんでもらった。

1　金持ちになりたい
2　地位や名誉をえたい
3　世間が眼をみはるような仕事をやってみたい
4　自分の趣味にあった生活をしたい
5　その日その日をのんきにくらしたい
6　すべてを仕事にうちこみたい
7　信仰にうちこんだ生活がしたい
8　何よりもまず家庭の幸福をはかりたい
9　社会や人々につくす生涯をおくりたい
10　その他

全体的には「何よりもまず家庭の幸福をはかりたい」（46.9%）と「自分の趣味に合った生活をしたい」（25.5%）の二つが大半を占め，次いで「その日その日をのんきにくらしたい」(5.7%)となっており，個人的，求心的な傾向がきわめて強い。「世間が眼を見はるような仕事をやってみたい」（5.5%），「金持ちになりたい」（3.7%），「社会や人々につくす生涯を送りたい」（3.3%），「すべてを仕事にうちこみたい」（2.2%），「信仰にう

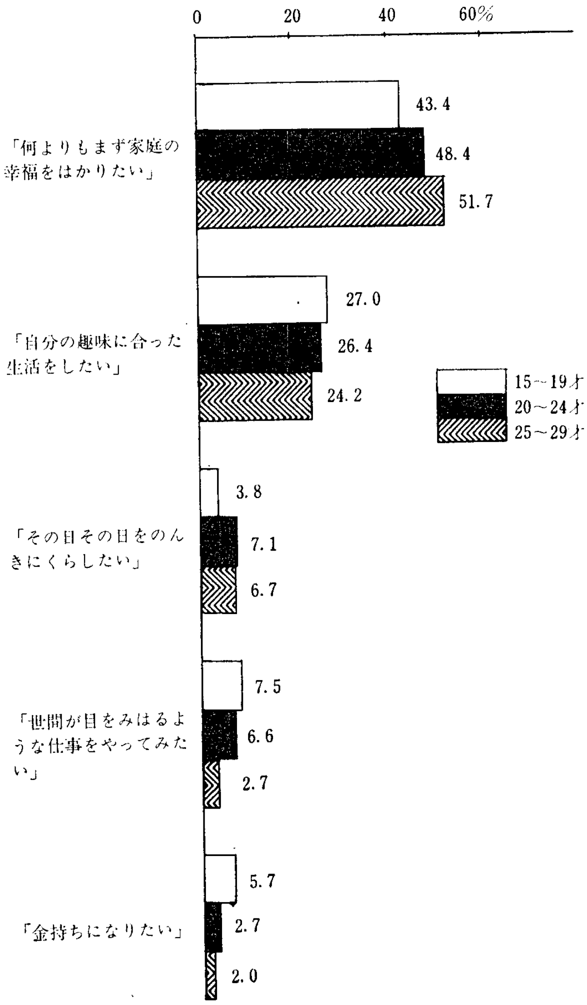
第52図　生　き　方



ちこんだ生活がしたい」(0.6%)，「地位や名誉をえたい」(0.0%) といった一連のパーセントに示されるように，遠心的に自己を拡大し，精力的に己れの生活を切り開いていこうとする意欲的な生活態度は，これらを総計してもわずか15%にすぎない。

＜年令別＞これをとくに年令別にとってみると，いくつかの興味深い傾向が示される。まず，「何よりもまず家庭の幸福をはかりたい」という家庭中心主義は年令の上昇とともに規則的に増加する。また，「その日その日をのんきにくらしたい」とする者も高年令層の方にいく

第53図　生き方——年令別——



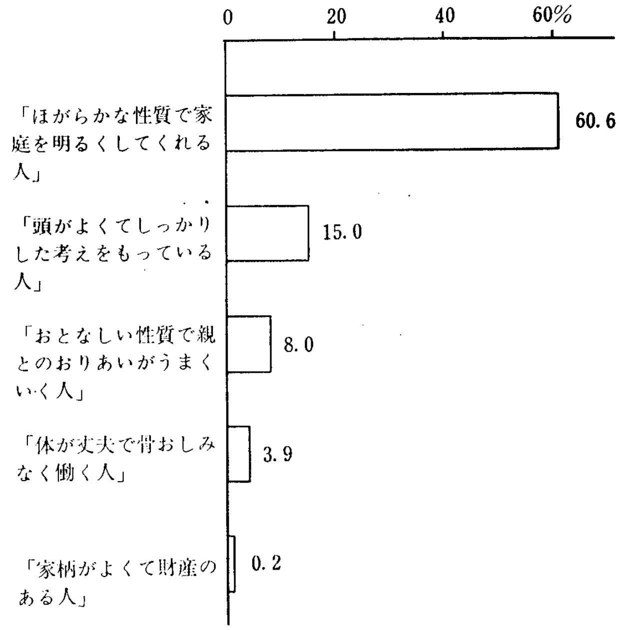
ぶん多い。他方，「自分の趣味に合った生活をしたい」は年令が上昇するにしたがって少しづつではあるがほぼ規則的に減少する。同様にして「世間が眼をみはるような仕事をやってみたい」や「金持ちになりたい」といった積極的意欲的な生活態度も年令が長ずるにしたがって減少していく。

B　結婚相手〔第54・55・56図〕

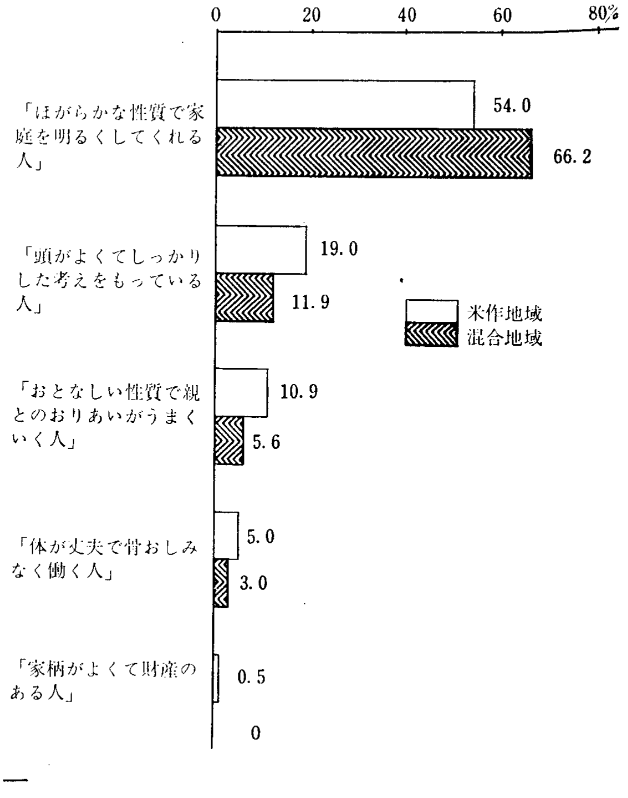
農業青年の価値意識の一端をうかがうために，「結婚するばあい，かりに次のような5人の候補者がいたら，そのうちあなたはどんな人をえらびますか」という質問を設けて，次のような5種の候補者を用意した。

1　頭がよくてしっかりした考えをもっている人
2　体が丈夫で骨おしみなく働く人
3　おとなしい性質で親とのおりあいがうまくいく人
4　家柄がよくて財産のある人
5　ほがらかな性質で家庭を明るくしてくれる人

第54図　結　婚　相　手



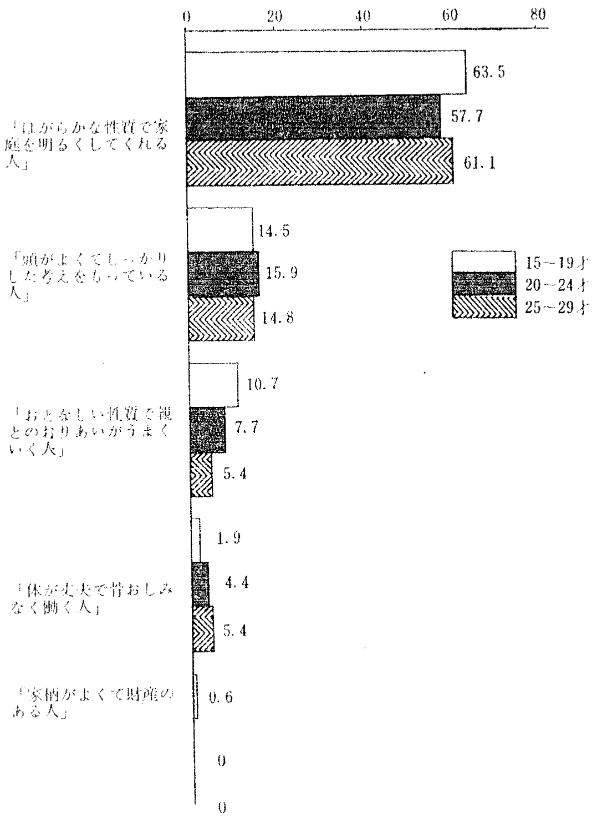
第55図　結婚相手——地域別——



全体的には，「ほがらかな性質で家庭を明るくしてくれる人」が圧倒的に多くて60.6%を占め，次いで「頭がよくてしっかりした考えをもっている人」15.0%，「おとなしい性質で親とのおりあいがうまくいく人」8.0%，「体が丈夫で骨おしみなく働く人」3.9%，そして「家柄がよくて財産がある人」はわずかに0.2%である。こうして，結婚相手にたいして個人的主体的な性質や能力を要求する者が大半を占め，体が丈夫で骨おしみなく働くとか，親との折合いとか家柄などの外的ないしは二次的な要因を重視する者はきわめて少ない。

＜地域別＞二つの地域間にはあまり顕著な差異は見られないが，結婚相手として「ほがらかな性質」の人を要求する者が混合地域の方に多く，「頭がよい」人を要求する者は米作地域にやや多い。また，「体が丈夫」「家柄」「親との折合い」などの外的ないしは二次的な要因を重視する者が，混合地域よりも米作地域の方に幾分多

第56図　結婚相手――年令別――



く見受けられる。

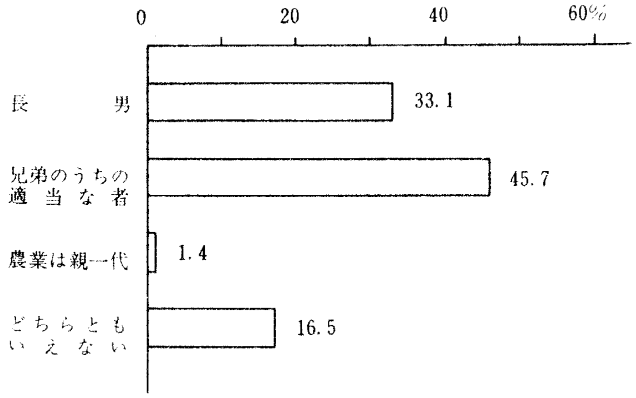
＜年令別＞顕著な傾向は示されないが，「親との折合い」を重視する者が低年令層ほど多く，また「骨おしみなく働く」人を求める者が高年令層ほど多くなっている。

C　農業相続〔第57・58・59図〕

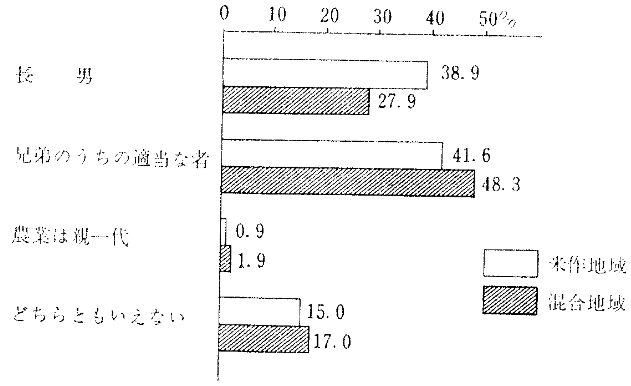
農業相続は農業青年にとってその一生の方向を決定する重要な問題である。「農業のあとつぎは長男がやるのがよいか，それとも兄弟のうちの適当な者がやるのがよいか」をたずねた。

全体的に見ると，「兄弟のうちの適当な者」とする者がもっとも多くて45.7%を占め，次いで「長男」が33.1%，「どちらともいえない」16.5%，「農業は親一代だけ」が1.4%である。

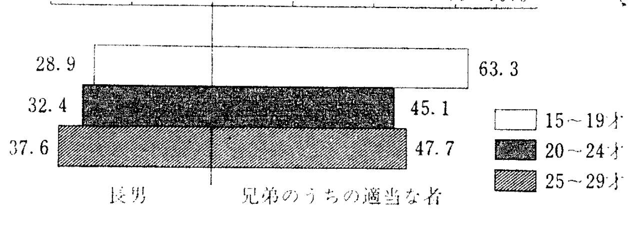
第57図　農　業　相　続



第58図　農業相続――地域別――



第59図　農業相続――年令別――



<地域別>両地域間ではかなりの差異を示して，「長男」とする者は米作地域に多く，反対に「兄弟のうちの適当な者」とする者は混合地域の方に多い。

<年令別>「長男」とする者と，「兄弟のうちの適当な者」とする者だけをとり出してこれを年令別に見てみると，ほぼ年令に比例して「長男」が増えて，「兄弟のうちの適当な者」は減少する。

以上農業青年の価値意識を，生き方，農業相続，結婚相手の3つについてうかがってみたが，最近とくに若い世代にいちじるしい個人主義的・合理主義的傾向は農業青年においてもその例外ではない。ほとんど大部分の青年たちが家庭（旧来の伝統的なイエではない）中心的・趣味的な生き方を望んでいる。結婚相手をえらぶにしても何よりもまず個人的資質を重視しており，また伝統的な長子相続の考え方も大きくくずれてきているのである。農業経営の構造改革といった物的な面における近代化を余儀なくされ，それに向かって徐々に変革を遂げつつある今日の農村は，また価値意識の面でも，すでに若い世代によって伝統から近代への脱却のあゆみが大きく踏み出されていることを，われわれはここに感じさせられる。

§3　農業青年の生活——労働と余暇——

農業青年の労働生活と余暇生活の実態として，生活時間・農休日・小遣い・余暇利用の諸点を明らかにしたい。

A　生活時間

余暇時間そのものを正面から扱うことをせずに，まず労働時間を明らかにすることにつとめ，余暇時間は労働時間から間接的に類推することにした。稲刈り，田植えなどの農繁期と7・8月の農閑期の各々について，始業・昼休み・終業の時刻をたずねてみた。

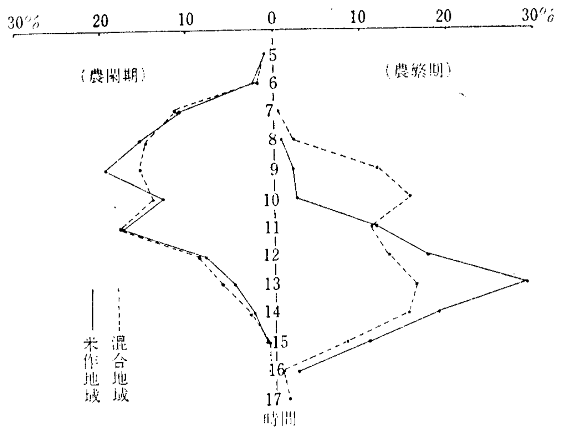
(イ)　農作業時間〔第60・61・62図〕

始業から終業までの時間を算出し，これから昼休み時間を差引いた残りの時間を農作業時間とした。

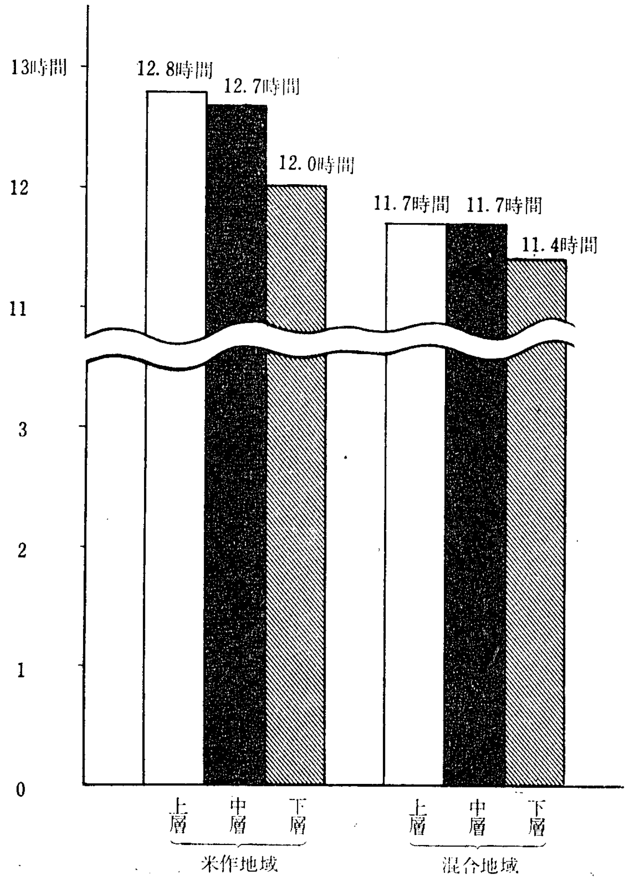
<地域別>まず稲刈り田植えなどの農繁期について見ると，平均農作業時間は米作地域が12時間54分，混合地域が11時間54分で，米作地域の方がちょうど1時間長い。労働時間が9時間以下が米作地域で3.2%，混合地域で14.2%，10〜14時間が各々8.01%，7.28%，15時間を越える者が，各々13.6%，9.7%となっている。

次にこれを7，8月の農閑期について見ると，米作地域の平均値が9時間36分，混合地域が9時間48分と，両者はほぼ等しい。労働時間9時間以下が米作地域で49.4

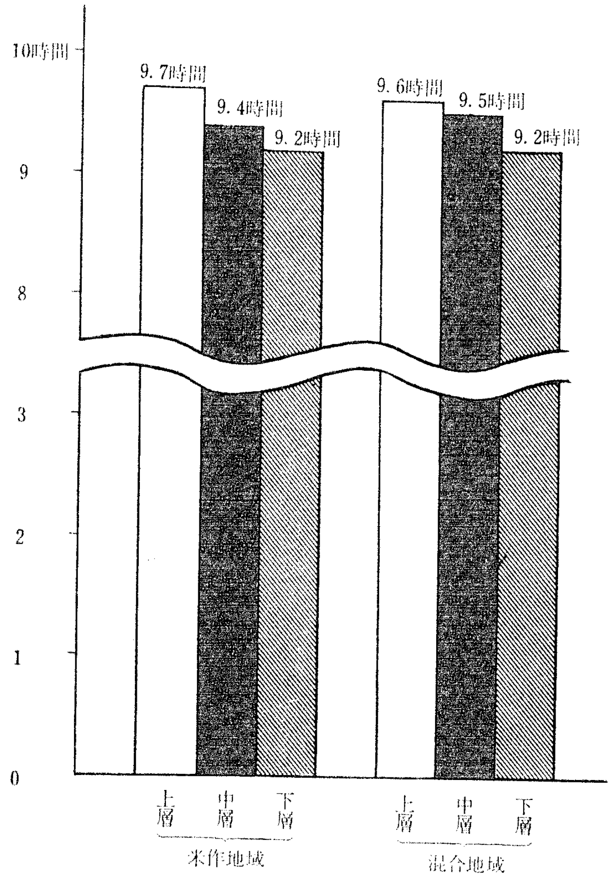
第60図　農作業時間——地域別——



第61図　農繁期の農作業時間——階層別——



第62図　農閑期の農作業時間——階層別——



%，混合地域45.6%，10～14時間がそれぞれ45.6%，49.5%，15時間以上が0.9%，1.2%となっている。

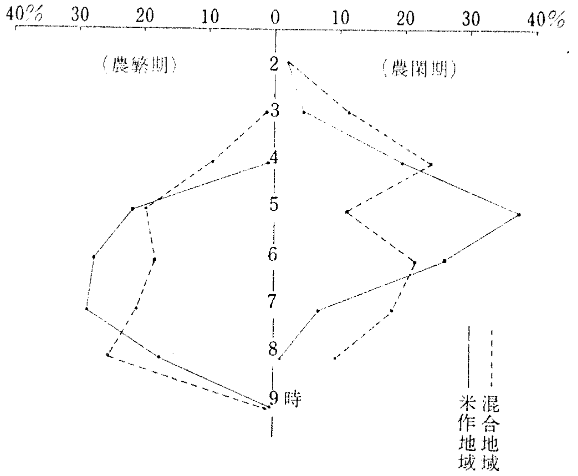
＜階層別＞これを階層別にとって見ると，平均農作業時間は，階層とかなりいちじるしい相関関係を示して，上層ほど農作業時間が長い。このような傾向は，米作地域と混合地域，農繁期と農閑期のいずれにおいてもほぼ等しく示されている。がとくに農繁期の米作地域では上・中層と下層との間のひらきが大きい。このような傾向は，上層階層ほど経営規模の大きさに比べて人手不足がはなはだしく，ために労働強化となって，負担が青年たちの上にかかってくることを物語るものであろう。

(ロ)　始業時刻〔第63図〕

以上によって見ても，農業青年の労働時間は，なかんずく農繁期においては，寝食の時間にもこと欠くほど大きなことが示されたが，ここでさらに始業時刻について見てみよう。

＜地域別＞まず農繁期では，平均始業時刻が米作地域

第63図　始業時刻——地域別——



で5時6分，混合地域で5時17分で，米作地域の方が若干早い。4時以前から仕事を始める者が米作地域では25.4%，混合地域で37,2%，5～6時が各々36.4%，32.8%，7時以後が7.7%と，27.1%なって，農業青年の労働のきびしさを物語っている。

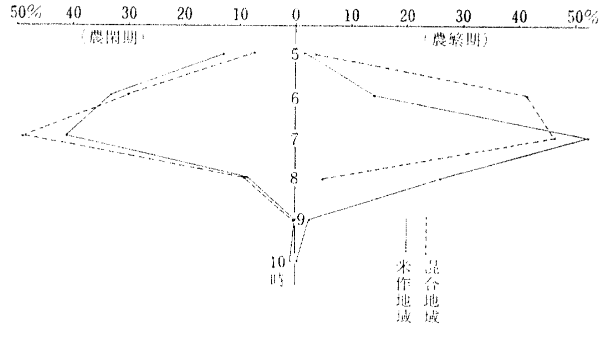
農閑期の平均始業時刻は米作地域が6時26分，混合地域6時22分で，両者はほぼ等しい。4時以前に作業を開始する者が米作地域0.9%，混合地域0.9%，5～6時がそれぞれ48.9%，37.5%，7時以後が46.6%，48.0%である。

(ハ)終業時刻〔第64図〕

始業時刻とともに終業時刻について見てみよう。

＜地域別＞まず農繁期では，平均の終業時刻が米作地域7時10分，混合地域6時33分で，米作地域の方が約40分も遅い。6時前に仕事を終える者が米作地域で15.4%，

第64図　終業時刻——地域別——



混合地域で45.3%，7時が各々52.5%，46.5%，8時以後が29.0%，5.2%となっている。

農閑期では，平均の終業時刻が米作地域6時29分，混合地域6時37分で大差はない。6時以前に作業を終える者が米作地域で46.1%，混合地域37.4%，7時が各々40.7%，49.1%，8時以後が9.1%，9.3%である。

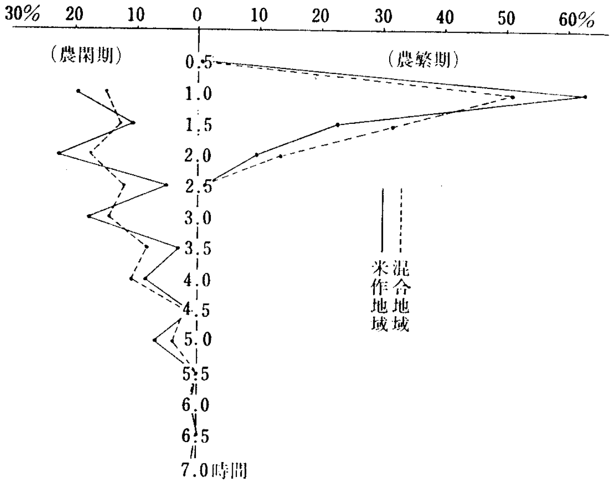
㈡昼休み時間〔第65図〕

ここでさらに昼休みの時間を見てみよう。

＜地域別＞農繁期では，平均の昼休み時間が米作地域1時間43分，混合地域が1時間19分で米作地域の方がやや長い。1時間以下が米作地域63.3%，混合地域51.3%，1時間半が各々22.6%，31.6%，2時間以上が10.4%，14.2%である。

農閑期では平均昼休み時間はかなり大巾に増加する。すなわち，米作地域が2時間28分，混合地域が2時間32

第65図　昼休みの時間——地域別——



分である。1時間半以下が米作地域29.9%，混合地域27.2%，2～2時間半が各々27.6%，29.4%，3時間以上が37.6%，39.5%である。

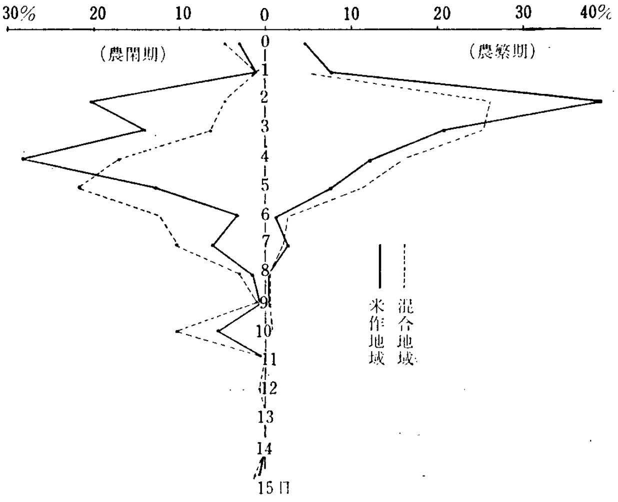
以上のようにして，農業青年の労働時間はとりわけ田植えや稲刈りなどの農繁期では，そしてとくに米作地域ではあまりにも長い。そこにはおそらく余暇時間などというものは存在しないに等しいであろう。

B　農休日〔第66図〕

農業青年はどの程度の農休日をとっているだろうか。農繁期と農閑期の各々について一ヶ月当たりの農休日数をたずねた。

＜地域別＞まず農繁期についてみると，一ヶ月当たりの平均農休日数は米作地域2．8日，混合地域3．1日で，混合地域の方が農休日はやや多い。1日以下が米作

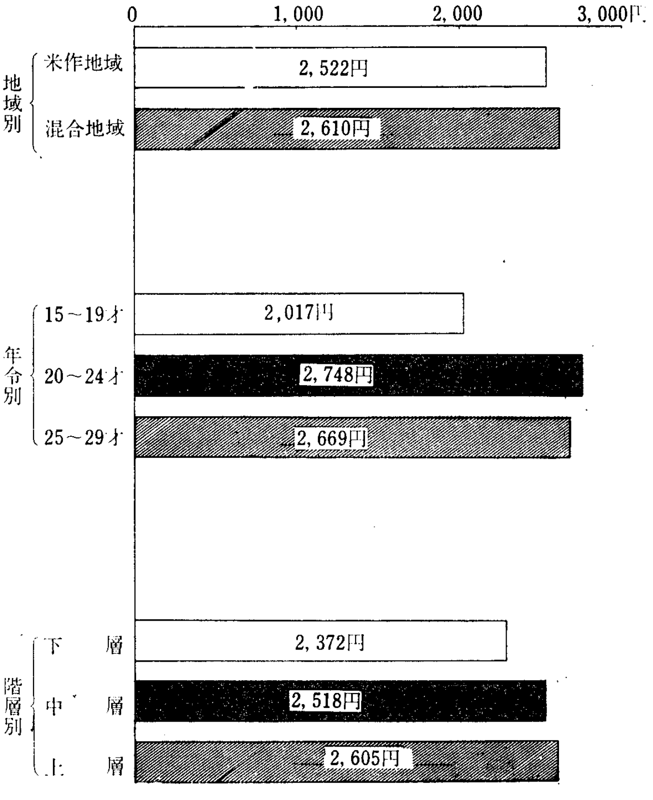
第66図　農休日（1ヶ月当り）——地域別——



地域12.2%，混合地域9.7%，2～3日が各々60.6%，51.7%，4日以上が25.0%，33.6%である。

農閑期における一ヶ月当たりの平均農休日数は，米作地域4・1日，混合地域5・5日で，混合地域の方がかなり多い。農休日が1日以下の者は米作地域4.1%，混合地域5.6%，2～4日がそれぞれ62.5%，27.9%，5日以上が30.0%，60.6%である，

第67図　小遣い（一ヶ月当り）



C　小遣い〔第67図〕

(イ)　小遣いの額

農業青年は一ヶ月にどのくらいの小遣いを使っているだろうか。

まず全体の平均額を算出してみると，2,554円となる。その内訳は次のとおりである。

1,000円以下	8.1%
1,000～2,000円未満	25.5%
2,000～3,000円未満	30.9%
3,000～4,000円未満	24.2%
4,000円以上	11.4%

＜地域別＞米作地域が2,522円，混合地域が2,610円で，混合地域の方が100円近く額が多い。

＜年令別＞15～19才2,017円，20～24才2,748円，25～29才2,669円で，とくに15～19才とそれ以上の年令層との間のひらきが非常に大きい。

＜階層別＞下層2,372円，中層2,518円，上層2,605円で，階層をのぼるにしたがって小遣いの額も上昇している。

(ロ)　小遣いのもらい方〔第68図〕

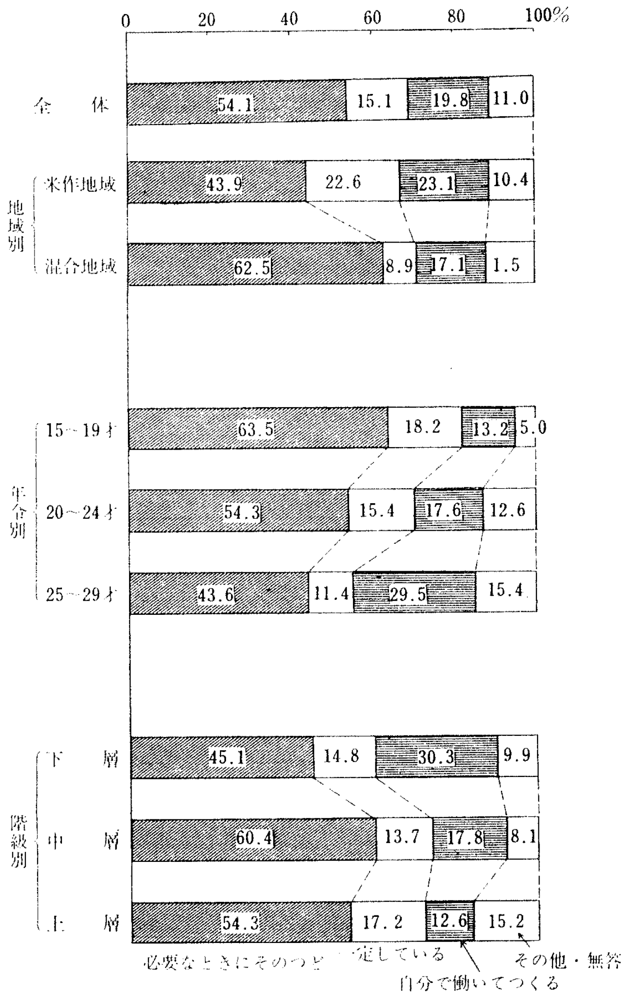
工業青年や商業青年は給料として毎月一定の金銭を得て，多かれ少なかれこれを自由に使うことができ，それがかれらの主体性，自律性の確立にとってきわめて重要な要因となっている。農村においても「父子契約」や「農家月給制」などが生み出されて，この点で農業青年が負わされていたハンディキャップが徐々にではあるが解消されつつある。われわれの調査対象地域では「父子契約」とか「農家月給制」と銘うつものはまだほとんど現われていないが，その実質的な内容はどうなっているだろうか。

まず全体的に見ると，「必要なときにそのつどもらう」者が半数以上（54.1%）を占め，次いで「家からもらわないで自分が働いてつくる」者が19.8%，「毎月きまって一定の額をもらう」とする者が15.1%，「その他」が11.0%である。

＜地域別＞これを地域別に見ると，「必要なときにそのつどもらう」者が米作地域よりも混合地域の方にかなり多い。「毎月きまって一定の額をもらう」者は反対に米作地域の方に多い。

＜年令別＞「必要なときにそのつど」とする者が年令段階をのぼるにしたがって規則的に減少していく。反対に「家からもらわないで自分で働いてつくる」とする者は年令とともに規則的に増加して，青年たちの自律性が増していくことがうかがえる。

第68図　小遣いのもらい方



＜階層別＞下層階層において「必要なときにそのつどもらう」者が比較的少なく，逆に「自分で働いてつくる」者が増加するのが注目される。

D　労働時間・農休日・小遣いにたいする満足度

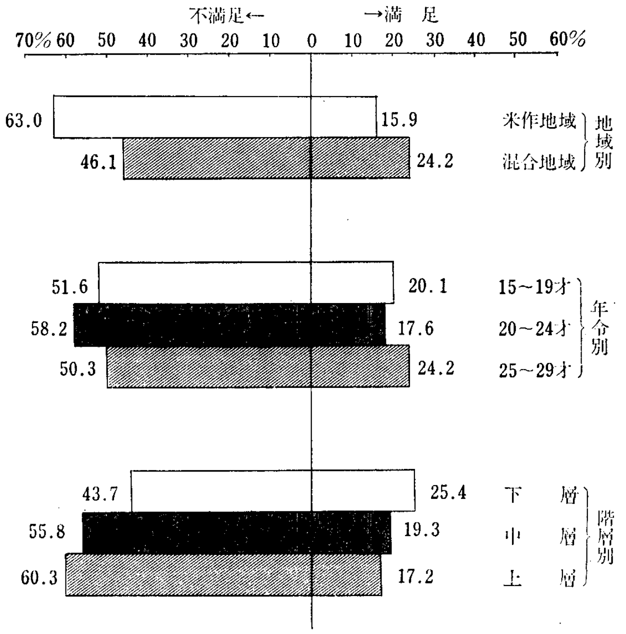
それでは，以上のようにして明らかにされた労働時間・農休日・小遣いの各々について，農業青年たちはどの程度満足しているだろうか。

まず，この労働時間・農休日・小遣いの三者を比較してみると，農業青年がもっとも不満を感じているものが労働時間であることが分かる（満足20.4%，不満足53.7%）。農休日（満足42.2%，不満足35.5%）と小遣い（満足37.8%，不満足31.4%）については満足，不満足が相半ばしている。

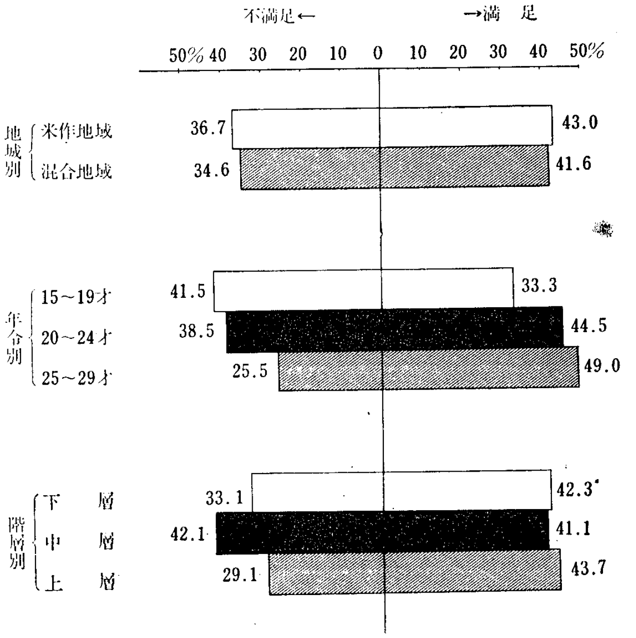
(イ)　労働時間にたいする満足度〔第69図〕

＜地域別＞一日の労働時間はなかんずく農繁期においては，混合地域よりも米作地域の方が一時間も長いことはすでに示したとおりだが，これを反映して，労働時間にたいして不満足を覚える者は米作地域63.0%，混合地

第69図　労働時間にたいする満足度



第70図　農休日にたいする満足度



域46.1%で，前者の方がかなり多い。

<年令別>とくに顕著な傾向は示されない。

<階層別>上層階層ほど満足が減少して不満足が増加していく。労働時間が上層ほど増加することを考え合わせればもっともといえよう。

(ロ)　農休日にたいする満足度〔第70図〕

<地域別>一ヶ月当たりの農休日は，とくに農閑期においては米作地域よりも混合地域の方がかなり多いことは，すでに見た通りであるが，このような農休日にたいする満足度は，両地域間にはほとんど差異が見られない。

<年令別>低年令層ほど農休日に満足する者が減少し，逆に不満を感ずる者が増加する。

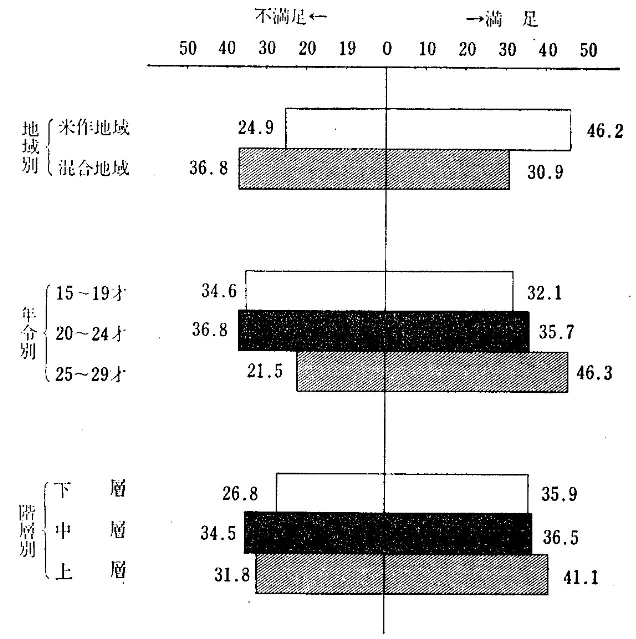
<階層別>中層階層において不満が若干多いが，とくに目立った傾向は示されない。

(ハ)　小遣いにたいする満足度〔第71図〕

<地域別>一ヶ月に使う小遣いの額は混合地域の方が米作地域をいくぶん上まわっていたが，小遣にたいする満足度は逆に米作地域の方がかなり高い。小遣いのもらい方において，「必要なときにそのつど」とする者が混合地域の方にかなり多く，「一定の額を毎月きまってもらう」者は反対に米作地域の方に多かったが，このことが小遣いにたいする満足度における両者の間のちがいに影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

<年令別>年令をのぼるにしたがって「満足している」とする者がほぼ規則的に増加する。すでに明らかにされたごとく，実際に使う小遣いの額も高年令層ほど多く，また小遣いのもらい方においても，「自分で働いてつくる」者が年令とともに増加していることを考え合わせれば，小遣いに関する満足度と年令の間の相関関係はもっともなことといえよう。

第71図　小遣いにたいする満足度

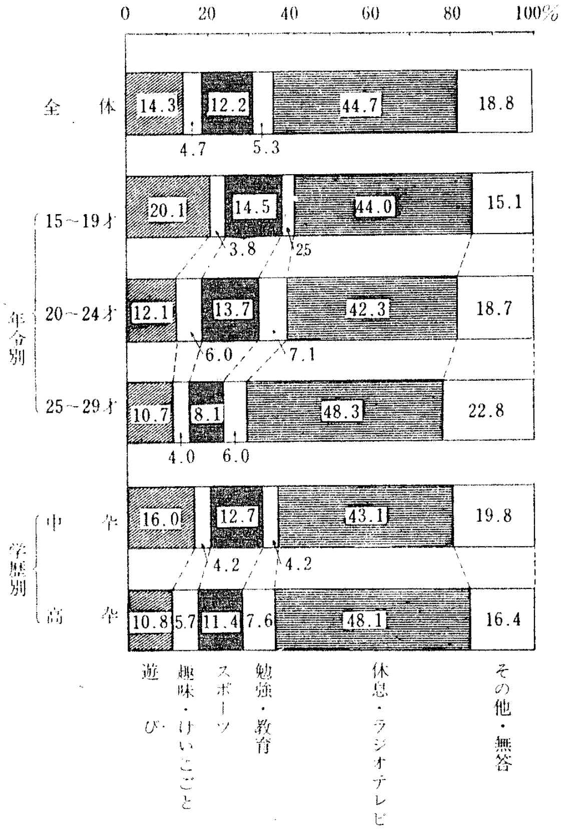


<階層別>農業青年が使う小遣いの額は階層をのぼるにしたがって増していくが，小遣いにたいする満足度も上層階層ほど高くなっていく傾向がうかがえる。

E　農休日の余暇利用〔第72図〕

すでに見たように，農業青年の余暇は平日においては，朝早くから夜遅くまでの長時間にわたる労働のために大きく限定されている。それゆえ，ここではとくに農休日（農繁期では一ヶ月に約3日，農閑期では4日ないし5日）について農業青年の余暇利用の実態をとらえてみることにした。

第72図　農休日の余暇利用



「あなたはこの前の農休日にはどんなことをしましたか」という質問を設け，次に示すような18項目にわたる余暇利用種別について該当するもののうち主なもの1つに○をつけてもらった。

1　映画，観劇
2　音楽会，レコード鑑賞
3　スポーツ（する）
4　スポーツ（見る）
5　ドライブ，サイクリング
6　旅行，登山
7　マージャン，パチンコ
8　読書，勉強
9　講習会，研究会
10　休息，休養，なんとなくすごす
11　家事，身のまわりの整理
12　趣味，けいこごと
13　競輪，競馬
14　飲酒（バー，キャバレー）
15　何となく町へ出る
16　宗教活動
17　テレビ，ラジオ
18　その他

まず全体的に見ると，「休息・休養・なんとなくすごす」がもっとも多くて約3分の1（30.6%）を占め，次いで「ラジオ・テレビ」8.6%，映画（観劇）8.6%「家事・身のまわりの整理」5.5%，「スポーツ（見る）」4.3%，「読書・勉強」3.9%，「何となく町へ出る」3.7%となっている。

余暇利用の種別の項目が多く数の散らばりが大きいので，18項目をさらに整理して，「遊び」「趣味・けいこごと」「スポーツ」「読書・勉強・教育」および「休息・ラジオ・テレビ」の5つに大別してみた。

全体としては「休息・ラジオ・テレビ」が半数近い44.7%を占め，次いで映画や町をぶらつくなどの「遊び」が14.3%，各種の「スポーツ」12.2%，「読書・勉強・教育」はわずかに5.3%「趣味・けいこごと」が4.7%である。

<年令別>「遊び」「スポーツ」は年令が低い者ほど多く，反対に「休息・ラジオ・テレビ」は年令が高い者ほど多い。また。「勉強・教育」は20才以下の若年層ではとくに少い。

<学歴別>「遊び」と「スポーツ」が高卒よりも中卒者の方に多い。反面，「趣味・けいこごと」「勉強・教育」は高卒者の方に多い。また「休息・ラジオ・テレビ」も高卒者の方が若干多くなっている。

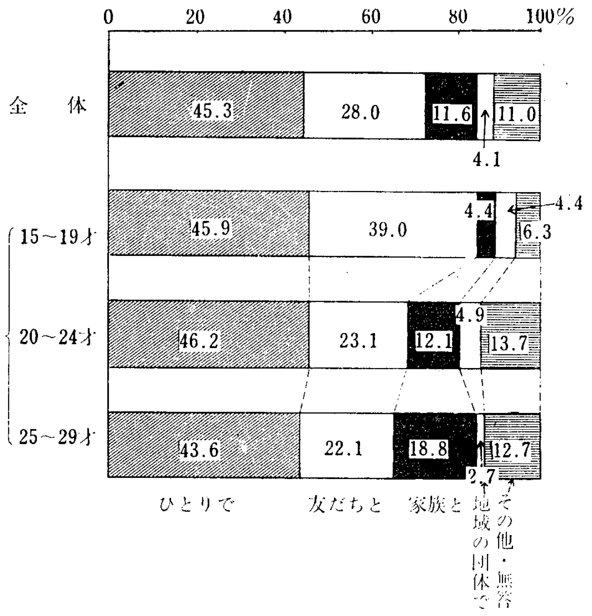
F　余暇を誰といっしょにすごすか〔第73図〕

余暇利用の態様のもうひとつの側面として，農業青年たちは余暇をどんな人といっしょにすごすかという問題を見落すわけにはいかない。

全体としては「ひとりで」がもっとも多く45.3%を占め，次いで「友だち」28.0%，「家族」11.6%，「地域の団体」4.1%，「その他の人」0.4%となっている。

<年令別>「ひとりで」とする者は各年令層を通じてほとんど差を見せないが，「友だち」と余暇をすごす者は低年令層に多く，反対に「家族」とともにする者は高年令層に多い。参考までに，各年令段階での既婚者の占める比率を示すと，15~19才2.3%，20~24才33.8%，25~29才91.7%である。また，「地域の団体」でとする

第73図　余暇を誰といっしょにすごすか—年令別—



者は低年令層の方に若干多くなっている。

以上のようにして，農業青年の労働生活と余暇生活をいくつかの面から採ってみるとき，次のようないくつかの特徴的性格が浮彫りにされる。

1　農業青年の労働時間は，とくに農繁期においては12時間ないし13時間とあまりにも長く，労働のはげしさと相俟って，これに不満を覚える者が非常に多い。

2　経済的に親から独立するということは，青年の人格形成，なかんずく自律性の確立にとってきわめて重要な役割を果たすものと考えられるのであるが，農業青年においては小遣いを「必要なときにそのつどもらう者」が約半数以上を占めている。必らずしも多いとはいえない小遣いの額と相俟って，小遣いに関して不満を感ずる者がかなり多く，見逃しえない問題を残している。

3　長時間にわたっての，しかもかなりはげしい労働のために，農業青年の休日の余暇はその半数近くが「休息・休養」やこれをかねた「ラジオ・テレビ」などの消極的な余暇利用に費されて，「読書・勉強」や「講習会・研究会」「趣味・けいこごと」などの積極的な余暇利用は，これらを総計してみても10%に満たない。

§4　親とのくいちがい及び悩みとその相談相手

A　親とのくいちがい〔第23表，第74～77図〕

農業青年は1日の大部分を，すなわち労働生活と余暇生活の大部分を家族とくに親と一緒にすごす。はげしい社会変化の波をまぬがれえない農村においては，農業青年と親との間の対立や葛藤は，両者の間の距離の近さと接触の恒常性のために，都市におけるそれよりも一層深刻なものであるにちがいない。農業青年と親との間のくいちがいは，われわれにとってゆるがせにできない重要な問題のひとつである。

下に示すように，「農業技術や農業経営」「家庭」「勉強・教育」「あとつぎや将来の職業」「友人・異性・遊び」「近所や親類づき合い」などの，農業青年の生活全般にわたって合計24の問題領域を設定して，親と意見がくいちがうもののうち主なものつに○をつけてもらった。

1　農業相続（あとつぎ）や将来の職業のこと
2　財産のこと
3　耕地のこと
4　農業技術のこと
5　農業経営のこと
6　人手不足のこと
7　共同化のこと
8　農協のあり方のこと
9　過重な労働のこと
10　農業政策や農業問題のこと
11　親子関係のあり方のこと
12　きょうだい関係のあり方のこと
13　隣り近所とのつき合いのこと
14　本家分家関係のこと
15　地主小作関係のこと
16　村の政治のこと
17　結婚相手のこと
18　生活改善のこと
19　勉強や教育のこと
20　学力や教養のこと
21　遊ぶ時間や金のこと
22　異性のこと
23　友達のこと
24　その他

第23表　悩みと親とのくいちがい（%）

順位	<悩　み>		<親とのくいちがい>	
1	農業経営	20.2	農業経営	20.5
2	人手不足	17.3	過重な労働	9.4
3	農業技術	9.2	遊ぶ時間や金	8.8
4	過重労働	6.6	農業技術	8.2

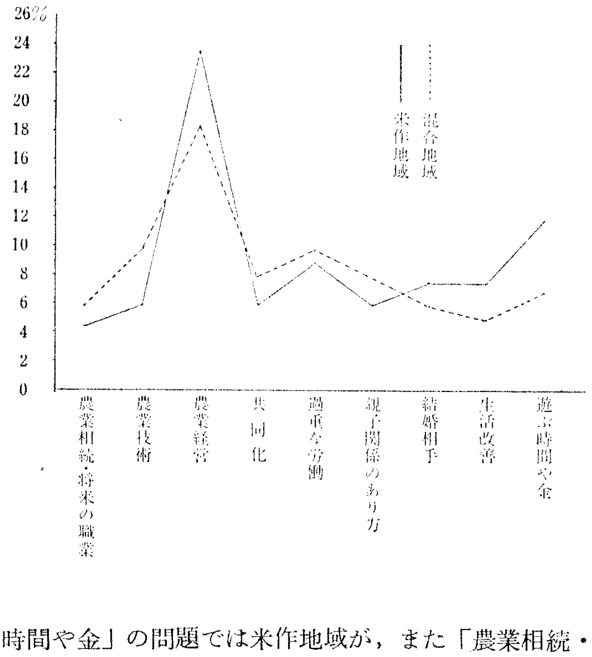
5	共同化	5.9	親子関係	7.0
6	農業相続・将来の職業	5.5	共同化	7.0
7	結婚相手	5.2	結婚相手	6.4
8	耕地	5.1	生活改善	5.8
9	農業政策・農業問題	4.4	農業相続・将来の職業	5.3
10	学力・教養	3.3	近所づき合い	3.5

まず全体的に見ると，農業青年が親と意見がもっともくいちがうのが「農業経営」(20.5%)のことである。次いで「過重な労働」(9.4%)，「遊ぶ時間や金」(8.8%)，「農業経営」(8.2%)，「親子関係のあり方」(7.0%)，「共同化」(7.0%)，「結婚相手」(6.4%)，「生活改善」(5.8%)となっている。

次に主要なもの10項目について，さらに検討を加えてみよう。

<地域別>「農業経営」「結婚相手」「生活改善」「遊

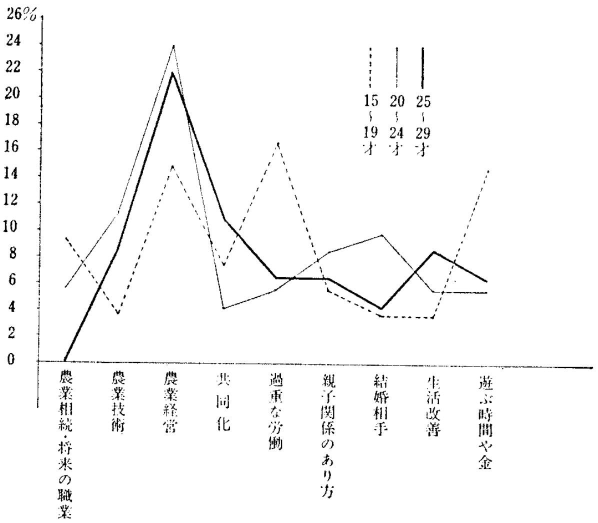
第74図　親とのくいちがい――地域別――



ぶ時間や金」の問題では米作地域が，また「農業相続・将来の職業」「農業技術」「過重な労働」「親子関係のあり方」「共同化」などにおいては混合地域の方が，親とのくいちがいの比率が大きい。

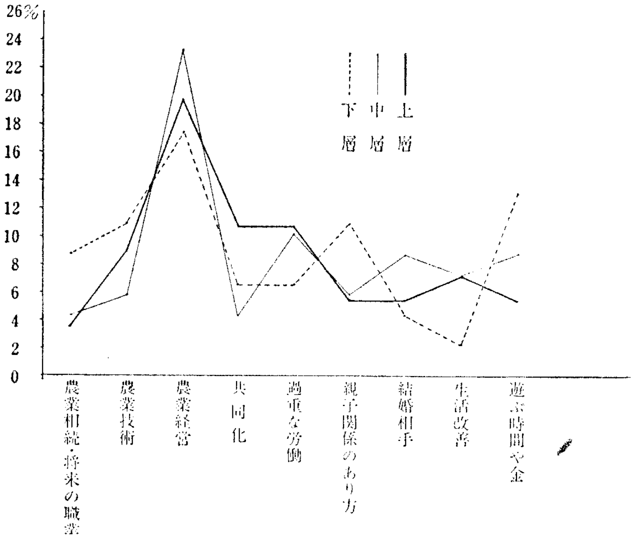
<年令別>全体として年令的な差異がかなり示されている。「農業技術」「農業経営」「生活改善」では年長青年が，また「農業相続・将来の職業」「過重な労働」「遊ぶ時間や金」では年少青年とくに15～19才の青年の方が親とのくいちがいが多い。また「結婚相手」の問題は，年令を反映して20～25才にもっとも多い。

第75図　親とのくいちがい――年令別――



<階層別>「農業相続・将来の職業」「親子関係のあり方」「遊ぶ時間や金」などでは下層階層の方が，また「共同化」「過重な労働」「生活改善」などでは上層階

第76図　親とのくいちがい――階層別――



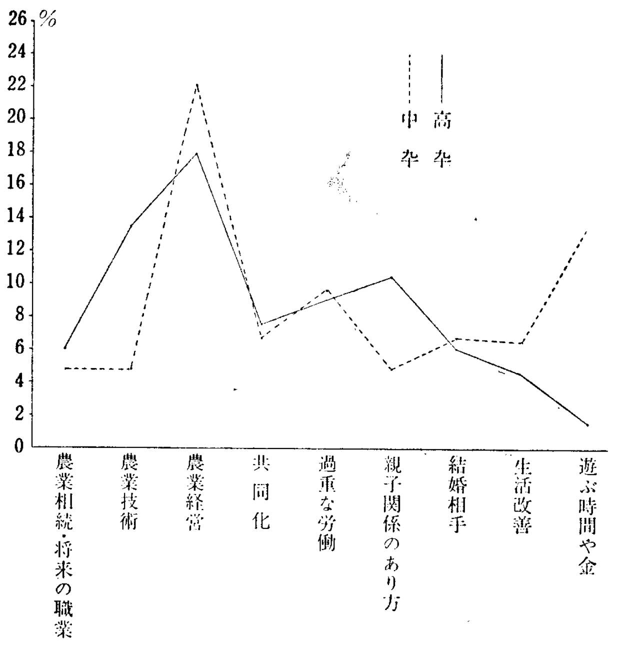
層の方が，親とのくいちがいが多い。

<学歴別>とくに「農業技術」「親子関係のあり方」においては高卒者の方にくいちがいがより多く，また「遊ぶ時間や金」に関しては，かなり大きな差異を見せて，中卒者の方が高卒者よりも高い比率を示している。

B　悩み〔第23表・第78～81図〕

前記の親とのくいちがいのばあいとまったく同じ24項目によって，農業青年の悩みの所在を探ってみた。該当

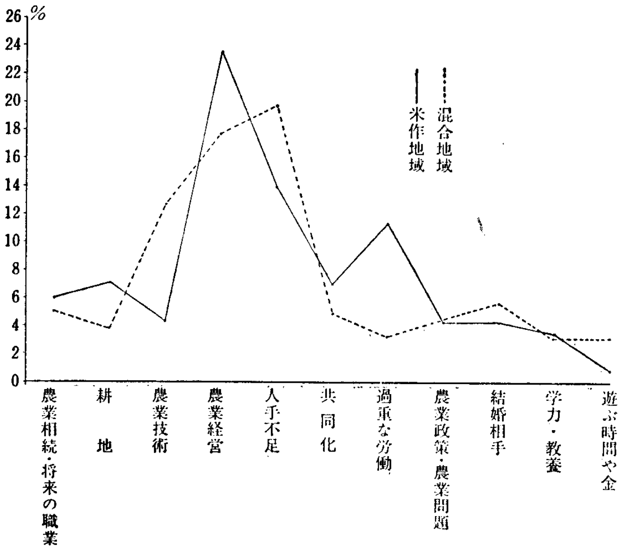
第77図　親とのくいちがい――学歴別――



するもののうち主なもの１つに○をつけてもらった。

まず全体的に主要なものを拾ってみると，「農業経

第78図　悩み――地域別――



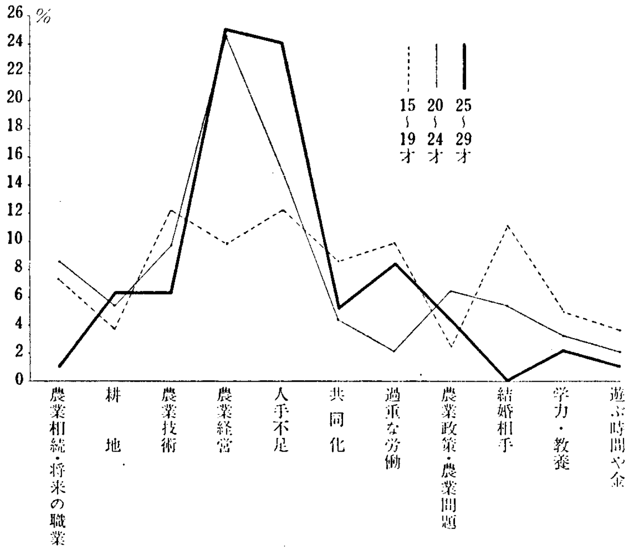
営」(20.2%)，「人手不足」(17.3)，「農業技術」(9.2%)，「過重な労働」(6.6%)，「共同化」(5.9%)，「農業相続・将来の職業」(5.5%)，「結婚相手」(5.2%)，「耕地」(5.1 %)などである。

次に主要なもの10項目についてさらに検討してみよう。

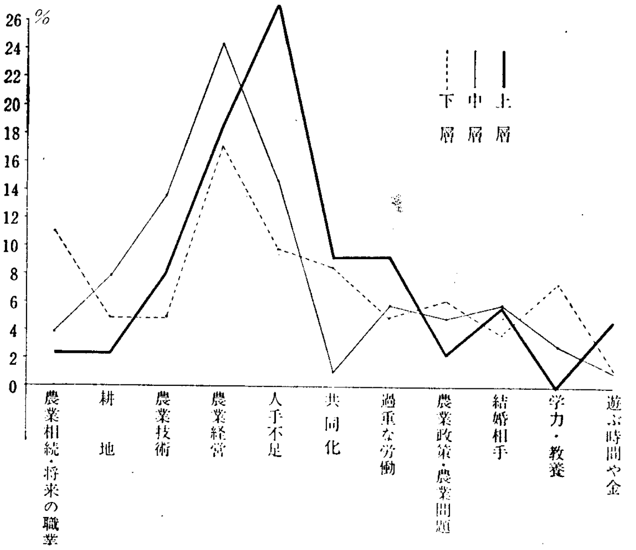
<地域別>「農業技術」「人手不足」では混合地域の方が，また「農業経営」「過重な労働」では米作地域の方が高い比率を示している。

<年令別>親とのくいちがいの場合とほぼ等しく，「農業相続・将来の職業」「農業技術」「結婚相手」「学力・教養」「遊ぶ時間や金」においては低年令層の方が，また「農業経営」や「人手不足」では高年令層の方が悩みがより多い。

第79図　悩み――年令別――



第80図　悩み――階層別――



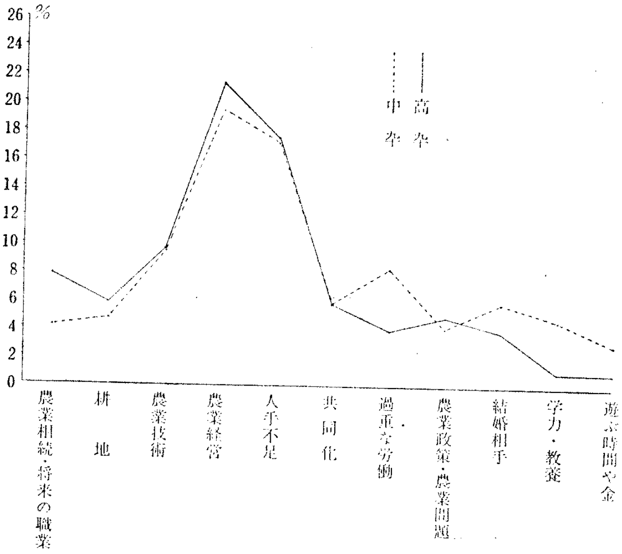
<階層別>ここでも親とのくいちがいの場合にかなり似て，とくに「人手不足」「過重な労働」においては上層階層の青年の方に悩みが多いのが目立つ。また「農業相続・将来の職業」「農業政策・農業問題」においては上層よりも下層の青年に悩みがより多い。また「学力・教養」の面でも下層階層の青年の方に悩みがより多い。

<学歴別>全体としてはさほど大きな差異は示さないが，「過重な労働」「学力・教養」「遊ぶ時間や金」

「結婚相手」などでは中卒者の方に，また「農業相続・将来の職業」では高卒者の方に悩みがより多く現われている。

以上，農業青年がどんなことで親と意見がくいちがい，どんなことに悩んでいるかを地域・年令・階層・学歴などのクロスによって探ってきたが，われわれは，この農業青年の親とのくいちがいと悩みの両方がほゞ共通した問題を示していることを見てとることができる。

第81図　悩み——学歴別——



まず「悩み」と「親とのくいちがい」について，それぞれ上から10位までのものを比べてみると，そのうちの6つまでが重複している。すなわち「農業経営」をはじめとして「農業技術」「過重な労働」「共同化」「農業相続・将来の職業」「結婚相手」がそれであって，農業青年の生活における主要な問題領域がここに端的に示されているといえよう。

次に，地域別に見て「悩み」と「親とのくいちがい」の両方に共通して現われているのは，「農業経営」においては米作地域の方が，また農業技術においては混合地域の方がそれぞれより高い比率を示しているという点である。これは両地域の農業におけるそれぞれの問題点を物語るものではないだろうか。

年令別のクロスにおいても，「悩み」と「親とのくいちがい」の両方にほぼ似通った傾向が現われている。「悩み」と「親とのくいちがい」の各々の場合に年少青年の方が高い比率を示しているものと，反対に年長青年の方がより高い比率を見せているものとをあげてみると次のようになる。すなわち，年長青年におけるそれは，「農業経営」「人手不足」「共同化」「生活改善」などであって，これらはいずれも農業そのものをめぐる諸問題である。これにたいして年少青年の方が高い比率を示しているものは「農業相続・将来の職業」「遊ぶ時間や金」「結婚相手」「過重な労働」などであって，そのほとんどは農業そのものに関連するものではなくして，むしろ農業の周辺にあるところの諸問題である。こうして，年長青年はすでに農業生活への適応をかなり果たして，農業経営の積極的な主体としての役割をある程度になっているのにたいして，他方年少青年においては，いまだ農業生活への定着が果たされえないでのであり，かれらの農業生活への適応の過程そのものに問題が存在しているのである。

次に階層別に見て，同じく「悩み」と「親とのくいちがい」の各々の場合に，下層階層においては主として「農業相続・将来の職業」および「農業政策・農業問題」がより高い比率を示しているのにたいして，他方上層階層においては，「人手不足」「過重な労働」「共同化」などが下層よりも一層高い比率を現わしている。これによってわれわれは，下層階層における農業経営の不安定性，将来の見通しの暗さをうかがうことができるとともに，上層階層では先の労働時間のところでも見たように，比較的大きな経営規模にたいする人手の不足，そしてそれによってもたらされた過重労働が切実な問題になっていることを見てとることができるであろう。

C　悩みの相談相手〔第24表〕

われわれは農業青年がどんなことで親と意見がくいちがい，どんなことに悩んでいるかを知った。それでは農業青年はこういった様々な悩みをいったいどんな人に相談するのだろうか。

農業青年の悩みを「農業技術や農業経営のこと」「家庭のこと」「勉強や教育のこと」「あとつぎや将来の職業のこと」「友人・異性・遊びのこと」「近所や親類づき合いのこと」の6つの領域に分けて，その各々について困ったり悩んだりした場合に次にあげたうちのどんな人に相談するかをたずねてみた。

1　誰にも相談しない
2　友人や恋人
3　親
4　きょうだい
5　母校の先生
6　農業改良普及員
7　生活改良普及員
8　青年学級の主任
9　青年研修所の指導員
10　農業教育センター（経営伝習農場）の指導員

11　その他の人

第24表　悩みの相談相手（%）

	農業技術 農業経営	家庭	勉強 教育	あとつぎ 将来の職業	友人異性 遊び	近所 親類
1 誰にも相談しない	3.8	9.9	24.3	11.8	24.4	15.2
2 友人・恋人	6.9	14.7	15.4	15.2	56.6	7.2
3 親	18.7	53.9	18.9	53.2	8.4	69.0
4 きょうだい	1.3	9.1	4.9	9.5	7.0	3.3
5 先生	4.9	2.4	22.9	4.0	1.7	0.2
6 農業改良普及員	54.7	0.3	3.4	1.7	0.6	—
7 生活改良普及員	1.5	4.5	0.3	—	—	1.9
8 青年学級主事	1.3	—	2.6	0.3	0.6	0.2
9 青年研修所職員	2.0	0.3	2.3	1.1	—	—
10 農業教育センターの指導員	1.8	0.3	1.7	0.9	0.3	—
11 その他の人	3.1	4.8	—	2.3	0.6	2.7
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

全体として見ると，農業青年の相談相手は，各々の悩みの性格をそのまま直接的に反映している。各問題領域について相談相手として示されたもののうち主なものをあげてみると次のようになる。

1　農業技術や農業経営のこと……
　　農業改良普及員　54.7%
　　親　18.7%
2　家庭のこと　……親　53.9%
　　友人・恋人　14.7%
3　勉強や教育のこと……誰にも相談しない　24.3%
　　先生　22.9%
　　親　18.9%
　　友人・恋人　15.4%
4　あとつぎや将来の職業のこと……
　　親　53.2%
　　友人・恋人　15.2%
　　誰にも相談しない　11.8%
　　きょうだい　9.5%
5　友人異性遊びのこと…友人・恋人　56.6%
　　誰にも相談しない　11.8%
6　近所や親類づき合いのこと……
　　親　69.0%
　　誰にも相談しない　15.2%

なお，各問題領域の相談相手に関して，<地域別><年令別><階層別><学歴別>のいずれにおいても，注目すべき差異はほとんど示されなかった。

§5　ま　と　め

以上われわれは，新潟県下の米作地域と米・蔬菜の混合地域に生きる農業青年について，かれらの生活と意識の諸相を探つてきたが，ここでふり返って，これまで示してきた調査結果を要約し，あわせていくつかの問題点を指摘しておきたい。

1　農業青年の生活意識，価値意識，労働生活と余暇生活，親とのくいちがい，悩みなどのほとんどすべての領域にわたって何よりもまずわれわれがくりかえし強く印象づけられたのは，農業生活への適応における年少青年と年長青年の間の大きなへだたりである。とくに25～29才の高年令層の青年たちはすでに農業生活への適応をかなりの程度にまで果たし，自家の農業経営の担い手として積極的な役割りを演じているのにたいして，低年令層とりわけ20才以下の青年たちにおいては，農業生活への不適応，積極的意欲の欠如がかなりいちじるしい。このような若年層の農業青年をいかにして農村に定着させ，農業生活への意欲を高めるかということは，今日の農業青年教育に課せられたもっとも大きな課題のひとつであろう。

2　このような農業生活のモラルの低さや意欲の欠如，不安定性といったものを，われわれはまた高卒者よりも中卒者の方に，また中層ないしは上層よりも下層階層の青年たちにより多くうかがうことができた。

3　米作地域と混合地域の別に関しては，さほど顕著な差異は示されなかったが，それでも農業生活にたいする消極性，運命的なあきらめは混合地域よりも米作地域の方に若干強いように見うけられた。

4　次にわれわれが強く印象づけられたのは，あまりにも過重な農業労働である。なかんずく農繁期における，そしてとくに米作地域における農業青年の労働時間はじつに13時間に近い。この過重な労働は農業青年の悩みや親とのくいちがいにおいても上位を占めており，この労働時間にたいして，米作地域では6割以上，混合地域でも5割近くの青年たちが不満を痛感している。なかでも，経営規模に比べて人手が大巾に不足している上層階層の青年たちにおいては，人手不足—過重労働—労働時間への不満といった一連の問題が大きな悩みになっていることを見逃すことができない。

5　この長時間にわたる労働時間によって，平日における農業青年の余暇時間はきわめて乏しいものとなる。今回の調査においては明らかにすることができなかったが，おそらくこの乏しい余暇時間はただひたすらに休息にあてがわれるにちがいない。したがって教育や学習といった積極的な余暇利用は，少なくとも平日においてはほとんど不可能のように思われる。では休日はどうか。農業青年は1週間にほぼ1日ずつの休みをとっているがこの農休日は，平日のきびしい労働を反映してほとんどが休息と遊びについやされ，教育や学習にこれを活用する者はきわめて僅かである。

6　最近とくに若い世代にいちじるしいところの，個人主義的，合理主義的傾向は，農業青年においてもその例外ではないことを，われわれは生き方や，あとつぎ，結婚相手などに関する農業青年たちの意見によって知ることができた。遠心的，精力的，積極的な意欲の欠如という点に看過できない問題がひそんでいるにしても，やはりわれわれは，こういった個人的，合理的な考え方をもった新たな世代が，封建的とか古いとか遅れているとハンで押したようにいわれてきた一時代前の農民―かれらの親たち―にとって代わって，新しい農業を切り開いて明日の農村を背負って立っていくことに，何かしら希望を託さずにはいられない。

3　ま　と　め

以上青年調査と指導者調査を通じて，次のようないくつかの問題点を指摘することができよう。

1）現在のわが国の農村及び農業が直面している深刻な諸問題を反映して，農業青年には，農業生活の種々の局面ことに農業経営の面での悩みや不安が非常に大きい。

2）とくに20才以下―下層―中卒の農業青年においては，他の農業青年に比べて農業生活への不適応がかなりいちじるしい。農業青年教育に課せられた大きな課題のひとつがこゝに存在しているのではなかろうか。

3）現代の学校教育やマス・コミの影響は農業青年においても例外ではなく，現代青年に特有な価値意識や気質は，かれらにおいてもまた等しく見てとることができる。

4）農業青年にたいする農業指導者の認識や評価も，基本的な点に関してはこれと変わるところがない。とくに年少青年と年長青年とではかなり異った評価がなされている。20才前の年少青年にたいしては，農業生活への消極的な態度もしくはそれからの離脱的傾向を多分に認めているのに対し，20才以上の年長青年にたいしては，農業生活への積極的態度をかなり認め，明日の農業の担い手として年長青年に期するところが大きいとしているのである。

5）ただしこのような農業指導者の見解は，農業青年たちの意識や態度をそのまゝ正しく反映しているとすることはできない。むしろ農業指導者においては，世代的な距離のへだたりによって，現代農村に生きる農業青年の姿が非常にシャープに，いいかえればかなり極化されたかたちでとらえられていると見るべきであろう。

調　査　票　　指導者用

東京大学教育学部教育社会学研究室

この調査のねらいは，日頃，農業青年の指導にあたっておられる方々に，今日，農業青年が直面している問題をおたずねし，今後の農業青年指導を考える上での一つの参考資料を得ようとするものです。ご面倒でしょうが，あなたの日頃の体験，御意見をこの機会におきかせねがえれば幸いに存じます。

尚，調査対象は，新潟県下の社会教育主事，農業改良普及員，青年研修所職員，農業教育センター職員の名簿のなかからこちらで無作為に抽出させていただきました。

また，ここでは，とくに農業青年のうち男子のことが中心となっておりますので，女子は除外し男子のことについてだけお答え下さい。回答がすみましたら，同封の封筒に入れて10月25日までに御返送下さい。

イ　あなたの年令をお書き下さい。　満（　　　）才

ロ　現職とその経験年数をお知らせください。（あてはまるものを○でかこみカッコの中には，適当な数字を入れて下さい）

社会教育主事　農業改良普及員　青年研修所職員　農業教育センター職員
経験年数→　　満（　　　）年

ハ　あなたの最終学歴をお知らせください。（あてはまるものの番号を○でかこんで下さい。）

1 新制中学・旧制小学校卒業程度
2 新制高校・旧制中等学校・実業学校卒業程度
3 新制大学・短大・旧制専門学校・大学卒業程度

1　最近，新しく学校を卒業した者で，農業につくものがどんどんへっているといわれています。あなたのひごろの経験ではいかがですか。次の中から一つだけえらび，その番号を○でかこんで下さい。

1 あととりまでが，農業から離れていく傾向が強い。
2 次・三男は都会に出ていくが，あととりはだいたい農村に残る傾向である。
3 農業をすてるものの数は，まだそれほど多くはない。
4 一度農村をでて，またかえってくる傾向がでている。

2　若い青年を農業にひきとめるために，何らかの対策を立てねばならないという意見がありますが，あなたはどう考えられますか。次の中から一つだけえらびその番号を○でかこんで下さい。

1 農業人口は，へった方がよいのでとくに引きとめ策を考える必要はない。
2 今のうちに引きとめ策を立て，農業後継者を確保することが必要である。
3 どちらともいえない。

（2をえらんだ方にうかがいますが）どういう対策が最も重要ですか。その要点をこゝに書いてください。

3　これからの農業には，どうしても高等学校を出なければならないという意見があります。あなたは，どう考えられますか。次の中から一つだけえらびその番号を○でかこんで下さい。

1 中学校卒業程度の学力があれば，あとは実際の経験をつんでいけば十分だ。
2 高校を出なくとも，中学校卒業後，適当な教育訓練を随時与えれば十分だ。
3 これからは，高等学校卒業程度の学力が必要だ。

4　次には，AからGまで農村や農業などに関していろいろな意見があげてありますが，あなたがふだん接している男子の農業青年にはどんな考え方の者が多いですか。

農業青年をだいたい20才以下の年少青年と20才以上の年長青年のふたつに分けて，それぞれについてあてはまるものを，ひとつずつえらび，その番号を(　)の中に記入してください。

A　農村への定着について

1 「農村は古いしきたりも多く、また何かと不便で住みにくい、できれば都会へ出たい」と思つている青年
2 「農村は都会とちがつて健強的だし、農村の人間には人情がある。農村に住むにこしたことはない」と思つている青年
3 「一度は都会に出て、いろいろな経験をつむのはいいが、都会は永住するところではない。やがて村に戻つて住みつきたい」と思つている青年
4 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　)

B　農業にたいする考え方について

1 「農業は国のもとだから、ひたいに汗して働くだけの値うちのある大切な仕事だ」と思つている青年
2 「農業はあまり割の合う仕事とはいえないが、やつてみればいろいろおもしろいところのある仕事だ」と思つている青年
3 「農業はつまらない仕事だが、あとつぎである以上、運命だからしかたがない」と思つている青年
4 「農業はまつたくつまらない仕事だ、できればやめてほかの仕事に移りたい」と思つている青年
5 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　)

C　働くことについて

1 「働くことこそ生きがいだ、べつにとりたてて遊びたいとは思わない」と思つている青年
2 「働くことは楽しみだが、時には楽しく遊びたい」と思つている青年
3 「もしも働かずに遊んでくらせるなら、それにこしたことはない」と思つている青年
4 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　)

D　余暇利用について

1 「自分の知識や技術・教養を高めるために余暇を有効に使いたい」と思っている青年
2 「余暇を大勢でにぎやかに遊んですごしたい」と思っている青年
3 「ひとりかあるいはごく親しい人と余暇を静かに楽しみたい」と思っている青年
4 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)

E　農業改善について

1 農業経営や農業技術の改良にみずからすすんで積極的にとりくんでいる青年
2 農業経営や農業技術を改良しようとする気持はあるが、それほど積極的でない青年
3 農業経営や農業技術の改良には無関心な青年
4 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)

F　団体活動について

1 地域のさまざまな団体活動に積極的に参加し、これをもりたてていこうとしている青年
2 地域の団体活動にいちおうは参加するが、それほど積極的ではない青年
3 地域の団体活動にはあまり関心を示さない青年
4 わからない

イ 年小の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)

G　政治的関心について

1 農業政策や農業問題などに深い関心をよせ、それにたいして自分なりに、積極的な意見をもつている青年
2 農業政策や農業問題などにいちおう関心を示すが、それほど積極的でない青年
3 農業政策や農業問題などには無関心な青年
4 わからない

イ 年少の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)
ロ 年長の農業青年(男子)に多いのは→(　　　)

5　次には、若い人たちについていろいろ意見があげられてありますが、あなたがふだん接している農業青年（男子）についてはどう思いますか。だいたい20才以下の年少の農業青年と20才以上の年長の農業青年のふたつに分けて、その各々について「そう思う」、「思わない」、「わからない」のどれかひとつに○をつけて下さい。

A　「自己中心的だ、自分勝手だ」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	その思う	思わない	わからない

B　「無責任だ、公共心に乏しい、他人の迷惑を考えない」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

C　「理屈つぽい、口ばかり達者だ」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

D　「卒直だ、はつきりしている」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

E　「積極的だ、実行力がある」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

F　「打算的だ，あまりにも現実的だ」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

G　「明るい，きびきびしている」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

H　「計画性がある，やることが合理的だ」と

イ 年少の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない
ロ 年長の農業青年（男子）については⟶	そう思う	思わない	わからない

I　「おとなの意見に耳をかさない，なまいきだ」と

イ	年少の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない
ロ	年長の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない

J　「独立心がある，生活力がある，他人にたよらない」と

イ	年少の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない
ロ	年長の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない

K　「派手だ」と

イ	年少の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない
ロ	年長の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない

L　「社交性がある，人なつっこい」と

イ	年少の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない
ロ	年長の農業青年（男子）についてはーー→	そう思う	思わない	わからない

6　次には，農業青年の悩みがいろいろあげてありますが，あなたがふだん接している男子の農業青年についてはどうですか。年少の農業青年と，年長の農業青年の各々について，あてはまるものの番号を4つまでえらび下欄の解答欄の中に記入し，さらに，それらのうち，青年たちがもっとも悩んでいると思われるものをひとつだけえらんで，その番号を○でかこんで下さい。

記入例						
イ	年少の農業青年(男子)が悩んでいるのは ──→	1	5	⑧	15
ロ	年長の農業青年(男子)が悩んでいるのは ──→	2	③	6	9

解答欄					
イ	年少の農業青年(男子)が悩んでいるのは ──→				
ロ	年長の農業青年(男子)が悩んでいるのは ──→				

8　イ　今の農業青年(男子)には，どのような知識，技術，態度が欠けていると思いますか。年少の農業青年と，年長の農業青年とに分け，次のうち1番欠けていると思われるものから順に4番まで順位をつけて下さい。

ロ　また，農業青年たちが身につけたいと要求しているものは何ですか。同じく1番から4番まで，年少農業青年と年長農業青年にわけて答えて下さい。

	イ 欠けている点		ロ 要求の強い点	
	年少青年	年長青年	年少青年	年長青年
1 基礎的な農業技術				
2 新しい農業技術を導入しようとする積極性				
3 農業経営改善に必要な基礎知識				
4 農業経営を改善しようとする積極性				
5 農業に対するほこり				
6 家庭生活を改善し，合理化しようとする積極性				
7 仲間づくりに対する積極性				
8 部落生活を改善し，合理化しようとする積極性				
9 農産物の流通機構についての知識				
10 共同化に対する積極性				
11 国や県の農業政策についての理解				
12 農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度				
13 社会・経済・政治全体のうごきについての理解				
14 余暇の健全な利用のしかた				

9　イ　次のうち，中学校卒業程度の学力の者には，教えるのがむずかしいと考えられるものは，どれですか。とくにむずかしいと思われるもの5つに○をつけ，そのうちもっともむずかしいと思われるもの1つには◎をつけて下さい。

ロ　また，今までのような講習会，研修会等の短期間の教育訓練ではなく，なるべく，学校などで系統的に教育するのがのぞましいと思われるものはどれですか。次のうちから5つをえらび，それに○をつけて下さい。またそのなかから，系統的に教育するのがもっとも必要だと思われるものを1つだけえらび，それに◎をつけて下さい。

	イ 中卒程度の学力では無理なもの	ロ 系統的に教えるのが必要なもの
1 農業機械の整備・運転		
2 品種作目の選定		
3 育苗技術		
4 農薬・肥料のやり方		
5 病虫害防除		
6 水のかけひき，熟期判定		
7 温床のつくり方，管理のしかた		
8 接木・剪定のしかた		
9 畜産技術		
10 肥料，飼料の成分や栄養の計算		
11 農産物の流通機構		

12 農家簿記のつけ方，農業経費の計算		
13 国や県の農業政策		
14 社会・経済・政治全体のうごき		

10　現在，農業青年には，さまざまな教育訓練の機会が与えられています。これらのうち，次の各項目について効果があると考えられるものはどれですか。ひじょうに効果があると考えられるものには◎を，やや効果があると考えられるものには○を，ほとんど効果がないと考えられるものに×をつけて下さい。

	青年学級	農事研究会	農業教育センター（経営伝習農場）	4Hクラブ	ラジオ農業学校	農協青年部	青年研修所	生活改善グループ	青年団	（その他）
1 農業技術の学習										
2 農業経営改善のしかたの学習										
3 共同化の推進										
4 生活様式の合理化・改善										
5 仲間づくり										
6 健全な余暇利用										
7 社会常識の学習										

11　現在，農業青年には，通信教育，青年団，4Hクラブなど，いろいろの教育活動があります。こうした状態について，次のような意見がありますがあなたはどう考えますか。あなたの意見に近いものに○をつけて下さい。

1　それぞれ目的がちがう。それぞれの特色をもっとのばすのがよい。
2　相互に重複が多い。調整し，統一をはかり，一本化すべきだ。
3　部分的には統合するのもよいが，いくつか種類性格のちがったものがあってもよい。
4　わからない。

12　農業高校卒業者と，普通高校卒業者と，中学校卒業者とを比較した場合，次の点で差が見られますか。あてはまる欄に○を記入して下さい。

	農高卒がすぐれている	普高卒がすぐれている	中卒がすぐれている	差なし
1 基礎的な農業技術				
2 新しい農業技術を導入しようとする積極性				
3 農業経営改善に必要な基礎知識				
4 農業経営を改善しようとする積極性				
5 農業に対するほこり				
6 家庭生活を合理化し，改善しようとする積極性				
7 仲間づくりに対する積極性				
8 部落生活を改善し，合理化しようとする積極性				
9 農産物流通機構についての知識				
10 共同化に対する積極性				
11 国や県の農業政策についての理解				
12 農業を社会全体のうごきのなかで考えようとする態度				
13 社会・経済・政治のうごきについての理解				
14 余暇の健全な利用のしかた				

13　最近，高校への進学率が高まっておりますが，この際，農業青年にも中学校卒業後何年かの義務教育を与えた方がよいという意見があります。あなたはそれに賛成ですか。反対ですか。

1 賛　成	2 反　対	3 わからない

→それでは，どのような形で義務化したらよいでしょうか。下から一つだけえらんで下さい。

1 全日制高校を義務化するのがよい。
2 定時制高校を拡充し，義務化するのがよい。
3 現在の高校とはちがった新しい農業青年のための全日制の学校を作って義務化するのがよい。
　⟶何年ぐらいがよいですか。
　（　　　）年
4 現在の高校とはちがった新しい農業青年のための定時制の学校を作って義務化するのがよい。
　⟶何年ぐらいがよいですか。
　（　　　）年
5 現行の各種の教育機関（通信教育，農業教育センター，青年学級等）をそれぞれ整備し，そのうちどれかをうけるよう義務化するのがよい。
6 その他
（具体的に書いて下さい：　　　）

→反対の理由はどんなものですか。こゝに具体的に書いてください。

14　ここで，少し話題が変りますが，日頃，農業青年の指導に当っているうえで，今日の農業青年の指導面で，問題だと考えられるものはどんな点でしょうか。一番問題だと考えられるものから，3番まで(　　)のなかに順位を入れて下さい。

(　) 指導のための施設，設備がたりないこと。
(　) 指導者が不足していること。
(　) 指導の機構がわかれすぎていること。
(　) 指導者自身の研修の機会が少ないこと。
(　) 予算がたりないこと。
(　) 上層部の意欲がたりないこと。
(　) 地域の人々の関心，理解が低いこと。
(　) 学ぶ青年自身に意欲，関心が欠けていること。
(　) その他
(具体的に書いて下さい：　　　　　　　　　)

15　イ　ところで，これからの農業と農業青年のことについて，二，三うかがいたいのですが，最近，新聞，ラジオ，テレビなどで，「父子契約」，「農家月給制」といったことがとりあげられています。あなた自身の考えでは，こうした動きはもっと進めていった方がよいと思いますか。

ロ　また，あなたの日頃の体験では，こうしたものは実際に農村のなかに入って行く可能性があると思いますか。

A　「父子契約」について

イ あなたの考えでは→	1 進める必要がある	2 その必要はない	3 わからない
ロ 農村に入って行く可能性は→	1 ある	2 ない	3 わからない

B　「農家月給制」について

イ あなたの考えでは→	1 進める必要がある	2 その必要はない	3 わからない
ロ 農村に入って行く可能性は→	1 ある	2 ない	3 わからない

16　以上，いろいろと答えていただきましたが，最後におたずねします。これからの農村の生活は全体としてどうなると思いますか。あなたの意見に一番近いものを一つだけえらび○をつけて下さい。

1　全体として楽になる。
2　貧富の差がはげしくなる。
3　全体としてくるしくなる。
4　変らない。
5　わからない。
6　その他
(具体的に書いて下さい：　　　　　　　　　)

17　また，農村の将来を考える上で，現在の男子の農業青年をあなたはどう思いますか。年少の農業青年と年長の農業青年の各々について，次にあげたものの中から，あなたの考えにもっとも近いものをひとつづつえらんで，その番号を(　)の中に記入して下さい。

1　ひじょうにたのもしいと思う。
2　何とか，農村を背負っていってくれるだろうと思う。
3　農村を背負っていけるかどうか心配だ。
4　農村を衰退させるのではないかと思う。
5　わからない。
6　その他
(具体的に書いて下さい：　　　　　　　　　)

イ　年少の農業青年(男子)は⟶	(　　　　　)
ロ　年長の農業青年(男子)は⟶	(　　　　　)

調　　査　　票　　農業青年用

東京大学教育学部
教育社会学研究室

おねがい

この調査は農業に従事しておられる若い皆さん方が，農業や農村の生活についてどんな考え方をされているかをうかがうためのものです。
どうぞあなたのありのままの考えをお答えください。
一日の仕事でお疲れのことと思いますが御協力を心からお願いいたします。

※まずつぎのことがらについてあてはまるものに○をつけ，また(　)の中に数字を記入してください。

イ，あなたの年令は⟶ 満(　　　)才
ロ，あなたの続柄は⟶ 長男｜次三男以下
ハ，結婚は　　　⟶ 結婚している｜していない
ニ，あなたの家族について

祖　父　は⟶	ある・ない	農業をしている・していない
祖　母　は⟶	ある・ない	〃 ・ 〃
父　　　は⟶	ある・ない	〃 ・ 〃
母　　　は⟶	ある・ない	〃 ・ 〃
兄　弟　は⟶	(　)人	農業をしているのは(　)人
姉　妹　は⟶	(　)人	〃 (　)人
その他の人⟶	(　)人	〃 (　)人

1　あなたが中学を卒業したのはいつですか。

昭和(　　　)年3月

2　あなたが最後に出た学校はつぎのどれですか。
あてはまるものに○をつけてください。

1　中学校
2　全日制普通高校
3　定時制普通高校
4　全日制農業高校
5　定時制農業高校
6　その他の全日制高校
7　その他の定時制高校
8　その他の学校（具体的に書いてください　　）

3　学校を出てからいままであなたは農業以外の職業についたことがありますか。
つぎのどちらかに○をつけてください。

1　ずっと農業をつづけている
2　農業以外の職業についたことがある

――2と答えた人にうかがいますが

イ　全部で何年ぐらい農業以外の職業についていましたか

約（　　　）年ぐらい

ロ　それは主にどんな職業ですか。ここに具体的に書いてください

4　お宅の経営規模はおよそどのくらいですか。下の表に記入してください。

	実際に耕作している面積	そのうち小作地として借りているもの
水　田	(　)町(　)反	(　)町(　)反
畑	(　)町(　)反	(　)町(　)反
果樹・園芸	(　)町(　)反	(　)町(　)反
そ の 他	(　)町(　)反	(　)町(　)反
山　林	(　)町(　)反	(　)町(　)反

5　お宅の一年間の収入はだいたいどのくらいですか。

イ　農業粗収入は⟶約（　　　　　　）万円
ロ　農業外収入は⟶約（　　　　　　）万円

6　あなたはこれからもずっと農業をつづけるつもりですか。次のどれかに○をつけて下さい。

1　つづけるつもり
2　つづけるつもりはない
3　わからない

7　あなたはなぜ農業に従事することに決めたのですか。つぎのうちの主なもの三つに○をつけさらにそのうちいちばん主なもの一つに◎をつけてください。

1　だれにもいばられず独立して自由に働けるから
2　農業は健康的で，農村は静かで住みやすいから
3　他の職業にくらべて好不況が少なく，安定しているから
4　国民の食糧を生産するもっとも大切な産業だから
5　他の職業につくよりも多くの所得があげられるから
6　先祖代々から伝わった職業で愛着があるから
7　勤め人のように退職してから後の不安がないから
8　あとつぎの立場にあるのでやむをえず
9　家族が強く希望するのでやむをえず
10　他によい就職口がないのでやむをえず
11　都会の生活や他の職業に耐える自信がないから

8　お宅の農業経営についてうかがいますが，ここ5年間ほどの間に，作るものに目立った変化がありましたか。次のどちらかに○をつけてください。

1　あった	2　なかった

――1と答えた人にうかがいますが，それではどのような面で変化がありましたか。あてはまるもの全部に○をつけてください。

1　果樹に力を入れるうよになった
2　蔬菜に力を入れるようになった
3　花に力を入れるようになった
4　養蚕に力を入れるようになった
5　畜産に力を入れるようになった
6　その他（具体的に書いてください　　　）

9　次の農機具をお宅ではもっていますか。個人でもっているときは「個人所有」の欄に，共同でもっているときは「共同所有」の欄にそれぞれ○を記入してください。
またいつごろからその機械を使うようになったのか，その時期も記入してください。

	個人所有	共同所有	導入の時期
1　動力耕耘機			昭和(　　)年ごろから

2 動力脱穀機			〃（　）〃
3 動力籾摺機			〃（　）〃
4 動力精米機			〃（　）〃
5 動力噴霧機			〃（　）〃
6 モーター			〃（　）〃
7 石油発動機			〃（　）〃
8 自動三輪車			〃（　）〃
9 軽四輪車			〃（　）〃
10 ハンドトラクター			〃（　）〃
11 その他 具体的に書いて下さい（　）			〃（　）〃

10　お宅では次にあげるような帳簿をつけていますか。またいつごろからはじめましたか。

1 作業（あるいは労働）日記	つけていない・つけている	昭和（　）年ごろからつけている
2 現金日記	〃　〃	〃（　）〃
3 生産物受払帳	〃　〃	〃（　）〃
4 経営用現物（材料）受払帳	〃　〃	〃（　）〃

11　あなたは家の農業経営をどの程度まかされていますか。次のどれか一つに○をつけてください。

1 ほとんど経営の全部をまかされている
2 経営の一部をまかされている
3 ほとんどまかされていない

――2をえらんだ人にうかがいますが，あなたにまかされているのはどんなことですか。あてはまるところ全部に○をいれてください。（例えば，畜産について計画から管理，販売までまかされているときは，畜産の欄全部に○をいれてください。

	設計や計画	肥料・栽培・飼育などの管理	出荷や販売
1 稲作			
2 蔬菜			
3 果樹			
4 花			
5 養蚕			
6 畜産			

12　これからの農家のくらしは全体としてどうなると思いますか。次のうちあなたの考えにもっとも近いものに○をつけてください。

1 全体として楽になる
2 貧富の差がはげしくなる
3 全体として苦しくなる
4 変らない
5 わからない
6 その他（具体的に書いてください　　　）

13　次にはAからGまで農村や農業などに関していろいろな意見がありますが，あなたはどう思いますか。各々について，あなたの考えにもっと近いものを一つづつえらんで○をつけていってください。

A―農村への定着について―

1 農村は古いしきたりも多く，また何かと不便で住みにくい。できれば都会へ出たい。
2 農村は都会とちがって健康的だし，農村の人間には人情がある。農村に住むにこしたことはない。
3 一度は都会へ出ていろいろな経験をつむのはいいが，都会は永住するところではない。やがては村に帰ってきて住みつきたい。
4 わからない

B―農業の考え方について―

1 農業は国のもとだからひたいに汗して働くだけの値うちのある大切な仕事だ。
2 農業はあまり割のあう仕事とはいえないが，やってみればいろいろとおもしろいところのある仕事だ。
3 農業はつまらない仕事だが，あとつぎである以上運命だからしかたがない。
4 農業はまったくつまらない仕事だ。できればやめてほかの仕事に移りたい。
5 わからない

C―働くことについて―

1 働くことこそ生きがいだ。べつにとりたてて遊びたいとは思わない。
2 働くことは楽しみだが，時には楽しく遊びたい。
3 もしも働かずに遊んでくらせるなら，それにこしたことはない。
4 わからない

D―余暇利用について―

1 自分の知識や技術教養を高めるために余暇を有効に使いたい。
2 余暇を多勢でにぎやかに遊んですごしたい。
3 余暇をひとりかあるいはごく親しい人と静かに楽しみたい。
4 わからない

E一農業改善について一

1 農業経営や農業技術の改良にみずからすすんで積極的にとりくんでいきたい。
2 農業経営や農業技術を改良しようとする気持はあるが，それほど積極的になれない。
3 農業経営や農業技術の改良にはあまり関心が，ない。
4 わからない

F一団体活動について一

1 地域のさまざまの団体活動に積極的に参加し，それをもりたてていきたい。
2 地域の団体活動にいちおう参加はするが，それほど積極的になれない。
3 地域の団体活動にはあまり関心がない。
4 わからない

G一農業政策や農業問題について一

1 農業政策や農業問題などに深い関心をよせ，それにたいして自分なりに積極的な意見をもちたい。
2 農業政策や農業問題などにはいちおう関心はもつがそれほど積極的にはなれない。
3 農業政策や農業問題にはあまり関心がない。
4 わからない

14 あなたが結婚するばあい，かりにつぎのような5人の候補者がいたら，そのうちどんな人をえらびますか。一つだけえらんで○をつけてください。

1 頭がよくてしっかりした考えをもっている人
2 体が丈夫で骨おしみなく働く人
3 おとなしい性質で親との折合いがうまくいく人
4 家柄がよくて財産のある人
5 ほがらかな性質で家庭を明るくしてくれる人
6 その他(具体的に書いてください)

15 あなたの家の農業相続（あとつぎ）についてどう思いますか。
次のうち一つだけえらんで○をつけてください。

1 長男がついだ方がよい
2 兄弟のうちの適当な者がついだ方がよい
3 農業は親一代だけでよい
4 どちらともいえない
5 わからない

16 農繁期と農閑期のあなたの農作業時間をお知らせください。

イ，稲刈り，田植えなどの農繁期では

午前中は──→(	)時から(	)時項まで
午後は ──→(	)時から(	)時項まで

ロ，七，八月の農閑期では

午前中は──→(	)時から(	)時項まで
午後は ──→(	)時から(	)時項まで

17 あなたはどの程度農休日をとっていますか，農繁期と農閑期の各々に分けてお答えください。

イ 農繁期では──→一ヶ月に(	)日位
ロ 農閑期では──→一ヶ月に(	)日位

18 その農休日はどのように決めたのですか。どれか一つに○をつけてください。

1 市町村で決めた
2 部落で決めた
3 自分の都合で適当に決めた
4 その他(具体的に書いてください)

19 あなたの小遣いは一ヶ月にどのくらいですか。

一ヶ月に（ ）円ぐらい

20 その小遣いはどのようにしてもらっていますか。
一つだけえらんで○をつけてください。

1 必要なときにそのつどもらう
2 毎月きまって一定の額をもらう
3 家からもらわないで自分で働いてつくる
4 その他(具体的に書いてください)

21 農作業時間，農休日，小遣いについてあなたはどの程度満足していますか，各々についてあてはまるものに○をつけてください。

イ 労働時間は→	満足	不満足	どちらともいえない
ロ 農休日は →	満足	不満足	どちらともいえない
ハ 小遣いは →	満足	不満足	どちらともいえない

22　あなたはこの前の農休日にはどんなことをしましたか。あてはまるもの全部に○をつけ，さらにそのうち主なもの一つに◎をつけてください。

1 映画、観劇
2 音楽会、レコード鑑賞
3 スポーツ（する）
4 スポーツ（見る）
5 ドライブ、サイクリング
6 旅行、登山
7 マージヤン、パチンコ
8 読書、勉強
9 講習会、研究会
10 休息、休養、なんとなくすごす
11 家事、身のまわりの整理
12 趣味、けいこごと
13 競輪、競馬
14 飲酒（バー、キヤバレー）
15 何となく町へ出る
16 宗教活動
17 テレビ、ラジオ
18 その他（具体的に書いてください）
（　　　　　　　　　　　　　　）

23　前問で◎をつけたものについて，あなたはそれを誰といっしょにしましたか。あてはまるものに○をつけてください。

1 ひとりで
2 友だちと
3 家族と
4 地域の団体で
5 その他の人と
（具体的に書いてください　　　　　　）

24　あなたはどんな人生を送りたいと思いますか。つぎのうちから，あなたの気持にもっとも近いものを一つだけえらんで○をつけてください。

1 金持ちになりたい
2 地位や名誉をえたい
3 世間が眼をみはるような仕事をやってみたい
4 自分の趣味にあった生活をしたい
5 その日その日をのんきにくらしたい
6 すべてを仕事にうちこみたい
7 信仰にうちこんだ生活がしたい
8 何よりもまず家庭の幸福をはかりたい
9 社会や人々につくす生涯をおくりたい
10 その他（具体的に書いてください　　　）

※ここで少し話題をかえますが

25　高校に進学しなかった方におききしますが，あなたは高校への進学を希望しましたか。どちらかに○をつけてください。

1 し　　た	2 しなかった

26　高校に進学しなかった方におききしますが，あなたが高校に進学しなかった主な理由は何ですか。いちばんあてはまるもの一つに○をつけてください。

1 家の経済状態が許さなかったので
2 学校が遠かったので
3 農業をやっていくうえに必要がないので
4 自分以外に働き手がいなかったので
5 兄弟のつり合い上
6 近所親類とのつり合い上
7 勉強がきらいだったので
8 自信がなかったので
9 試験に合格しなかったので
10 べつに理由はない，ただなんとなく

27　高校卒業者におききしますが，あなたは大学への進学を希望しましたか。つぎのどちらかに○をつけてください。

1 希望した	2 希望しなかった

28　大学に進学しなかった人におききしますが，あなたが大学に進学しなかった主な理由は何ですか。いちばんあてはまるものに○をつけてください。

1 家の経済状態が許さなかったから
2 学校が遠いので
3 農業をやっていく上に必要がないので
4 自分以外に働き手がいなかったので
5 兄弟のつり合い上
6 近所親類とのつり合いの上
7 勉強がきらいだったので
8 自信がなかったので
9 試験に合格しなかったので
10 べつに理由はない，ただなんとなく

29　イ　あなたはこれまでつぎの表にあげるような活動に参加したことがありますか。各々についてあてはまるところに○をつけていってください。

ロ　つぎに，参加したことのあるものには，参加の期間を記入してください。

ハ　さいごに，参加したことのあるものについて，それがどんな点で役に立ったか，あてはまるところに○をつけてください。

	イ 参加の有無			ロ 参加の期間	ハ 役に立った			
農業教育センター（経営伝習農場）	現在参加している	参加したことがある	参加したことがない	（ ）年（ ）ケ月	農業技術知識の点	社会常識の点	趣味娯楽の点	友達と仲良くなった点
青年学級	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
ラジオ農業学校	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
青年研修部	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
4 H クラブ	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
農事研究会	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
生活改善グループ	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
青年団	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
農協青年部	〃	〃	〃	（ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
その他（具体的に書いてください ）	〃	〃	〃	（ ）（ ） （ ）（ ）	〃	〃	〃	〃
その他（具体的に書いてください ）	〃	〃	〃	（ ）（ ） （ ）（ ）	〃	〃	〃	〃

30 イ これからずっと農業をやっていくとしたら，あなたが勉強したいのはつぎのどのようなことですか。希望するものを三つえらび一番強く希望するものから順に三番まで「希望順位」の欄に記入してください。

ロ また，それを勉強するとしたらどんな活動に参加するのがよいと思いますか。具体的に例えば青年学級，ラジオ農業学校というように書いてください。

		イ 希望順位	ロ どんな活動で勉強したいか（具体的に書いてください）
1	農業機械の整備，運転のしかた		
2	品種，作目のえらび方		
3	育苗のしかた		
4	農薬，肥料のやり方		
5	病虫害防除のしかた		
6	水のかけひき，熟期のみわけ方		
7	温床の作り方，管理のしかた		
8	接木剪定のしかた		
9	畜産のしかた		
10	肥料，飼料の成分や栄養の計算のしかた		
11	農産物の売られかた，値段のきめられ方		
12	共同化のしかた		
13	農家簿記のつけ方，農業経費の計算のしかた		
14	国や県の農業政策		
15	社会経済全体のうごき		
16	仲間づくり		
17	一般教養		

31 イ あなたは現在どんなことで悩んでいますか。つぎにあげたもののうちあてはまるところに○をいれてください。さらにそのうちあなたがもっとも悩んでいるもの一つに◎をいれてください。

ロ また，あなたはどんなことで親と意見がくいちがいますか。あてはまるところに○をいれ，さらに親ともっともくいちがいの大きいもの一つに◎をいれてください。あてはまるものがない場合には○や◎をいれなくてかまいません。

	イ あなたの悩んでいるのは	ロ 親との意見がくいちがう
1 農業相続（あとつぎ）や将来の職業のこと		
2 財産のこと		

3 耕地のこと		
4 農業技術のこと		
5 農業経営のこと		
6 人手不足のこと		
7 共同化のこと		
8 農協のあり方のこと		
9 過重な労働のこと		
10 農業政策や農業問題のこと		
11 親子関係のあり方のこと		
12 きょうだい関係のあり方のこと		
13 隣り近所とのつき合いのこと		
14 本家分家関係のこと		
15 地主小作関係のこと		
16 村の政治のこと		
17 結婚相手のこと		
18 生活改善のこと		
19 勉強や教育のこと		
20 学力や教養のこと		
21 遊ぶ時間や金のこと		
22 異性のこと		
23 友達のこと		
24 その他（具体的に書いてください） （　　　　　　　　　　　）		